



Title	アイヌ韻文の行頭韻
Author(s)	丹菊, 逸治
Citation	1-127
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/79010">http://hdl.handle.net/2115/79010</a>
Type	research report
File Information	Tangiku20200723.pdf



[Instructions for use](#)

# アイヌ韻文の行頭韻

Alliteration in Ainu Poetry

丹菊逸治

Tangiku Itsuji

アイヌ・先住民研究センター

Ainu Teetawanoankur Kanpinuye Cise

Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University

2019年度アイヌ・先住民族言語アーカイブプロジェクト報告書

Ainu and Indigenous Language Archive Project Report 2019



## はじめに

2018年に北海道大学アイヌ・先住民研究センター報告書として刊行した『アイヌ叙景詩鑑賞～押韻法を中心に』では、upopo ウポポなどアイヌ叙景詩の押韻法について解説した。同書では紙数の関係もあり、叙景詩以外のジャンル、特に叙事詩の韻文形式についてはかなり簡略化したモデルで説明せざるをえなかった。本報告書では、叙景詩と叙事詩の韻文形式について改めて検証している。

本来であれば本報告書のほうが先に出るべきだったのだが諸般の事情で遅れてしまった。アイヌ語を学び叙事詩を鑑賞する人々にいくらかでも参考にしていただければ幸いである。

2020年3月4日

丹菊 逸治



## 目次

### アイヌ韻文の行頭韻

はじめに-----	3
目次-----	5
序章-----	9
1. 本書の目的-----	9
2. アイヌ語韻文の「押韻」にかんする先行研究-----	9
第1章 伝統歌謡ウポポの行頭母音韻-----	11
概略-----	11
1. 目的-----	11
2. アイヌ伝統歌謡ウポポ-----	12
2-1. 本稿で扱う資料-----	12
2-2. ウポポの歌い方-----	12
2-3. 完全4行形式のウポポ(8歌)-----	13
3. 一般的なウポポの頭脚韻-----	18
3-1. 母音による行頭韻-----	19
3-1-1. 母音による行頭韻と「繰り返し語句」-----	19
3-1-2. 母音による不完全韻-----	20
3-2. 子音による行頭韻-----	21
3-3. 母音による脚韻-----	25
3-4. 子音による脚韻-----	26
3-4-1. 子音による脚韻とは何か-----	26
3-4-2. 子音による脚韻と思われる例-----	27
3-5. 母音による繰り返し韻-----	29
3-6. 子音による繰り返し韻-----	30
4. 繰り返し語句-----	32
4-1. 繰り返し語句が行頭にあるウポポ-----	32
4-2. 繰り返し語句が行末にあるウポポ-----	33
4-3. 最終行内の繰り返し語句-----	34
4-4. 同一行の繰り返し-----	36
4-4-1. 4行中2行が繰り返される形式-----	36
4-4-2. 同一の1行のみを繰り返す形式-----	37
4-4-3. 同一の2行を2回繰り返す形式-----	38
4-5. 関係文的な繰り返し語句-----	39
5. 交差配列による行頭韻-----	40
6. 1行の音節数-----	41

7. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポ6歌の検討-----	42
7-1. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその1 / 6-----	43
7-2. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその2 / 6-----	44
7-3. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその3 / 6-----	46
7-4. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその4 / 6-----	48
7-5. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその5 / 6-----	49
7-6. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポその6 / 6-----	51
7-7. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポ6例のまとめ-----	52
9. 第1章の結論-----	53
第2章 アイヌ叙事詩の行頭母音韻-----	54
概略-----	54
1. 目的-----	54
2. 平賀サタモによる1959年の語りにおける「行」-----	55
2-1. アイヌ韻文体の「行」-----	55
2-2. 1行の音節数-----	55
2-3. 1行の最大音節数-----	57
2-4. 1行の単語数-----	58
3. アイヌ叙事詩の詩連構造-----	59
3-1. 2行からなる対句や定型表現-----	59
3-2. 詩連-----	60
3-3. 独立性の高い関係修飾節・4行対句-----	62
3-3-1. 独立性の高い関係修飾節による詩連-----	63
3-3-2. 4行からなる対句による詩連-----	63
3-4. 詩連構造があいまいな例-----	64
3-5. 1詩連の行数-----	66
4. 平賀サタモの1959年の語りにおける押韻出現数-----	67
4-1. 4行詩連における頭脚韻-----	68
4-1-1. 4行詩連(104例)における行頭母音韻出現数-----	70
4-1-2. 繰り返し語を除外した場合の行頭母音韻出現数-----	70
4-1-3. 4行詩連における行頭子音韻出現数-----	72
4-1-4. 行頭母音韻・繰り返し語句も持たない4行詩連-----	74
4-2. 3行詩連(87例)における行頭母音韻出現数-----	76
4-3. 5行詩連(48例)における頭脚韻-----	78
4-3-1. 5行詩連における行頭母音韻出現数-----	78
4-3-2. 5行詩連における行頭子音韻出現数-----	79
4-4. 2行詩連における行頭母音韻・行頭子音韻出現数-----	80
4-5. 6行詩連の構造-----	81

4-5-1. 6行詩連の行頭母音韻出現数-----	81
4-5-2. 繰り返し行による「5行詩連+1」構成-----	82
4-5-3. 省略宣言句による「5行詩連+1」構成-----	83
4-5-4. 場面転換句による「5行詩連+1」構成-----	83
4-5-5. 感嘆句による「5行詩連+1」構成-----	84
4-5-6. 間接話法句による「5行詩連+1」構成-----	85
4-5-7. 対句を含む構成-----	86
4-5-8. 言い換えを含む構成-----	87
4-5-9. ただ長いだけの構成-----	88
4-6. 7行詩連の構造-----	89
4-6-1. 7行詩連その1：比喻による繰り返しを含む構成-----	90
4-6-2. 7行詩連その2：美辞の繰り返しを含む構成-----	90
4-6-3. 7行詩連その3：長い定型的表現を含む構成-----	91
4-6-4. 7行詩連その4：言い換えを含む構成-----	91
4-6-5. 7行詩連その5：関係文と定型表現を含む構成-----	92
4-6-6. 7行詩連その6：長い関係節を含む構成-----	92
4-7. 平賀サタモによる1959年の語りにおける詩連と押韻まとめ-----	94
5. その他の押韻-----	95
5-1. 複数の詩連において最初の行あるいは最終行を一致させる-----	95
5-2. 部分的な一致による連鎖-----	96
5-2-1. 同一の語句による連鎖-----	96
5-2-2. 同一音・類似音による連鎖-----	97
6. 不完全韻-----	98
6-1. 複数音節で母音や子音が一致する-----	99
6-2. 一致しない母音や一部素性が異なる母音が参加している例-----	100
6-3. 行内位置は同じだが音節内位置が異なる例-----	101
6-4. 音節数が異なる例-----	102
6-5. 行内位置が異なる例-----	103
6-6. 行内位置と音節数がともに異なる例-----	105
6-7. 行内位置は同じだがあまり類似していない例-----	106
6-8. あまり類似しないが3行以上にまたがる例-----	107
7. 第2章の結論-----	109
第3章 結論-----	110
引用文献-----	111
付録資料：平賀サタモによる1959年の語りの全詩連構成および全不完全韻-----	113





## 序章

### 1. 本書の目的

本書はアイヌ韻文における「音の一致」の一部が意識的な技法すなわち「押韻」であることを指摘するものである。丹菊逸治（2018）では4行詩連構造と頭脚韻、不完全韻、韻律（音節構造の一致）の存在を主張したが、それらがたんに偶然によるものではないと考える明確な根拠を示さなかった。本稿では行頭母音韻、4行詩連構造、不完全韻について、NHK（1965）および、平賀サタモ（〔1959〕1993）という限られた資料においてではあるが、偶然生じたものか否か検証を試みるものである。

行頭母音韻については、①NHK（1965）収録の upopo ウポポ 159 歌には行頭母音韻がほぼ例外なくみられること、②平賀サタモ（〔1959〕1993）には行頭母音韻が偶然に生じるより高い比率でみられることを指摘する。

4行詩連構造と不完全韻については、丹菊（2018）を補う解説ともに、巻末に田村すゞ子・平賀サタモ（〔1959〕1993）一篇全体の全詩連構造と不完全韻と思われる全ての例を示す。

### 2. アイヌ語韻文の「押韻」にかんする先行研究

アイヌ語の日常会話文体と朗唱文体の間に語彙や動詞複合体形成法の違いがみられることは早い時期から知られていた。金田一京助（〔1931〕1993：278）では最上徳内による文化5年（1858年）の『渡島筆記』の記述をあげている。同書では最上徳内は朗唱文体について「古辞雅語を専に用ふることと見えたり」と記し、現在でも用いられている「雅語」という表現で言及している（高倉新一郎編 1969：531-532）。現在のアイヌ語研究やアイヌ文学研究においては朗唱文体は「雅語」「韻文」などとさまざまに呼ばれるが、本稿では「韻文」と呼んでおく。この朗唱文体＝韻文について、日本の研究者の多くは「音節数をそろえる」ものだと考えてきた<sup>1</sup>。特殊な人称形式や語彙を用いたり、対句表現を多用したり、ということはあるが「韻」すなわち頭脚韻などの押韻は存在しないと考えてきたのである。

金田一京助（〔1908〕1992：18）が「韻や、アクセントに基く規定は全然自由で、唯音綴の数のきまりが、ほぼ一定して居る事である。」として以来、現在まで多くの研究者の見解はそれとほぼ同じである。中川裕（1997：195-196）は「アイヌ語の韻文は『韻』より『律』のほうに重点がおかれている」、中川裕・中本ムツ子（2007：107）は「韻文といっても、いわゆる頭韻、脚韻のようなものは、踏んでいるようにみえることもまれにありますが、さ

---

<sup>1</sup> もちろん1行の音節数が意識的にそろえられているのは間違いなく、実際に5音節行の比率は非常に高い。平賀サタモ（〔1959〕1993）においても、虚辞を含めれば全1151行中1018行、つまり全体の88.4%、虚辞を含めなければ763行（66.3%）が5音節行である。

して重要ではありません」とし、押韻への志向を否定している。

一方、押韻がみられるという指摘も全くなかったわけではない。Philippi ([1979]1982 : 29) では "In Ainu poetry rhyming occurs quite accidentally, as it does in Japanese poetry, but it is not prosodically relevant and not cultivated per se. Alliteration occurs sporadically, and there sometimes appear to be conscious attempts on the part of the reciters to cultivate it, although it is by no means obligatory." 「アイヌ詩においては脚韻 (rhyming) は日本の詩におけると同様に偶発的なものであり、韻律論的に関連はなく、本質的に洗練されたものではない。頭韻 (alliteration) は散発的にあり、決して義務的ではないものの、歌い手がそれを洗練しようと意識的に試みているようにみえることもある。」と指摘し、子音による行頭韻を例示している<sup>2</sup>。村崎恭子 (1989:6) は樺太に伝承される散文形式の昔話ジャンル tuytah トゥイタハについて「語りの中に、節のついた、韻をふんだ歌がはさまれることがおおい」と指摘し、村崎恭子 (2001 : 9) では「散文の語りの中に、子どもの泣き声や鳥の鳴き声、舟が近づいてくる音、糸つむぎの音などを描写するのに、韻を踏んだ調子の良い短い歌が挿入されている」とする。ただし「韻」や「調子」の具体的な詳細についてはふれていない。また、報告・論文等での言及はないものの、詩の実作者や一部の研究者の間では北海道のアイヌ韻文における押韻も意識されていた<sup>3</sup>。

本稿はほぼ Philippi ([1979]1982) と村崎恭子 (1989) の指摘を裏付けるものである。Philippi の「義務的ではないが、意識的に用いられている」という指摘は叙事詩に当てはまり、村崎恭子の「韻をふんだ歌」という指摘は叙景詩に当てはまる。

---

<sup>2</sup> Philippi (1979 : 29) で Alliteration の例として挙げられているのは行頭子音韻である。なお、Philippi は *husko as ras/ras emaknakur-/-roski kane/asir as ras/ras esanakur-/-roski kane* の 6 行で  $C_1VC_2$  の  $C_1$  にあたる *r* の一致だけでなく、 $C_2$  にあたる *s* の一致も Alliteration (頭韻) と呼んでいる。

<sup>3</sup> 太田満氏によれば、言語学者浅井亨 (アイヌ語) は詩法としての押韻に気づいていたという。太田満氏自身も詩作において押韻は意識している、とのことである (2018 年 5 月 2 日ネット上での個人的なテキストメッセージのやりとりによる)。

## 第1章 アイヌ叙景詩の行頭母音韻

### 概略

アイヌ叙景詩の1ジャンル upopo ウポポの行頭母音韻の有無を『アイヌ伝統音楽』（1965 NHK）に掲載された159歌で検討した。その結果、行頭における母音の一致は偶然より高い比率（153歌96.2%）で生じていて、作為的な押韻が行われている可能性が高いことがわかった。行頭における母音の一致がみられないものは6歌あるが、そのうち3歌には行頭母音がかかわる押韻が確認できる。いかなる意味でも行頭に押韻を持たないのは3歌であり、それらを除くと偶然とは思えない高率（156歌98.1%）で押韻が出現していることが分かった。村崎恭子による1989年の「樺太アイヌの散文説話の挿入歌には押韻がある」という指摘が北海道アイヌのウポポにも当てはまることになる。

### 1. 目的

第1章では、アイヌ伝統歌謡 upopo ウポポの押韻・繰り返し語句の在り方と行頭押韻の出現比率を確認し、「押韻」がたんに偶然によるだけのものか、意図的に行われているか否かを推定することである。資料として、NHKのアイヌ伝統歌謡調査資料の報告書にあたるNHK（1965）を用いる。

本稿では、まずウポポの4行詩形式を確認し、次に行頭で押韻も繰り返し語句も持たない（つまり、母音の一致を持たない）歌が6例しかないこと、さらにそのうち3例が「何らかの形で押韻している」ことを示す。

## 2. アイヌ伝統歌謡ウポポ

### 2-1. 本稿で扱う資料

アイヌ伝統歌謡は4行形式を基本とする。丹菊逸治(2018)ではそれを詩形式としてとらえ、風景や情景の描写を内容とするものが多いことから「叙景詩」と呼んだ。ウポポと呼ばれる、複数人で歌う歌謡ジャンルの諸歌も、もともとは個人の詩として作られたものだと思われる<sup>4</sup>。複数人で歌うこともあり、ウポポの詩形式はかなり整えられている。ほとんどが4行で1つの歌になっている。

NHK(1965)は事実上、これまでに刊行された最大のアイヌ伝統歌謡資料である<sup>5</sup>。438歌が楽譜付きで紹介されている。残念ながら付された6枚のレコードには64歌しか音源が収録されていない。実際に調査で採録された録音は全てNHKに保存されており、一時は研究利用もされていた。アイヌ民族にとっては伝統文化復興のためにも貴重な資料であり、早期の公開が望まれる<sup>6</sup>。刊行されたNHK(1965)に付された音源は少ないものの、同書には楽譜が掲載されており歌い方がある程度確認できる<sup>7</sup>。本稿では内容ではなく押韻という音からみた形式を扱うため、資料をこのNHK(1965)掲載のウポポ159歌に限定した。

### 2-2. ウポポの歌い方

ウポポの歌い方には1人が先導で歌い、その後に数人が①何グループかに分かれてそれぞれ輪唱で続く場合、②数人が声を合わせて唱和する場合、がある(主として地域によって異なる)。その際にしばしばシントコと呼ばれる漆器の蓋を叩いて拍子をとる。これを慣習的に「打(だ)」と呼ぶことがあり、本稿でもそれにならっている。1打は多くの場合2音節に相当する。4打単位で音の高低パターン(いわゆる旋律)が付けられることが多い。これがウポポにおける、いわゆる「行」である(「句」と呼ぶこともある)。

---

<sup>4</sup> アイヌ伝統歌謡はアムール・サハリンからさらにシベリア・北極圏まで広がる「個人の歌」文化に属する。詩としての内容分析については、代表的な叙景詩を取り上げた丹菊逸治(2018)等を参照されたい。

<sup>5</sup> 録音資料としては久保寺逸彦の録音資料等も存在するが、刊行物になっていない。

<sup>6</sup> 何人かの研究者は複製を所持しており、これまでにその一部が研究利用され論文も公開されている。また北海道アイヌ協会本部にも録音の複製があるというが、やはり公開はされていない。現在遺族の手元にどれだけが還元されているかも不明である。

<sup>7</sup> 楽譜は増田又喜と谷本一之によるもので、楽譜の作成方針は統一されていない。また、アイヌ伝統音楽の構造や伝統的な歌唱法を完全に反映したものではない。したがって音源が公開されなければ実際の歌唱の細部は不明である。

### 2-3. 完全4行詩形式のウポポ (8例)

ウポポには「繰り返し」行や、意味のないかけ声が大半を占めるものも多い。だが、各行が異なる語句で構成された、完全な4行詩形式のものもある。つまり、同じ行を2~4回繰り返したり、意味のないかけ声が大半を占めたり、ということがなく、言語音として意味があり、互いに異なる4行で構成されているものである。NHK(1965)に掲載された159歌のウポポにはそうした完全な4行詩形式のものが8例ある。楽譜番号は第16、59、60、124、126、127、135、140番である。これらには全て押韻が見られる。

以下、ウポポ資料は提示順に番号をふるが、NHK(1965)の楽譜に付された番号(「楽譜番号~」)も示す。アイヌ語表記は適宜修正してある。母音韻・子音韻は適宜太字で示してある。不完全韻は下線部で示してある。持続時間が同じ部分を/で区切って示すことがある。その場合、○で休止を示すことがある。「打」は確認できないため記していない。

日本語訳は基本的に丹菊による試訳である。語義不明の語は、カタカナでそのまま表記していることもある。語義が不明確な場合は訳語の後ろに「(?)」を付した。NHK(1965)に日本語訳が付されている場合はそれも掲載した。また、資料は□で囲んだが、必要に応じて□をさらに追加して語釈を加えてある。

#### 資料1

楽譜番号16 (NHK1965:35) (採録地:白老近文)

(丹菊試訳)

<b>Asipet parun</b>	アシペツ川の河口の
<b><u>Kamuy mawe</u></b>	神の風
<b><u>Kantori wa</u></b>	天から
Pitori <b>wa</b>	神(?)から

(NHK1965:35 掲載訳)

芦別川口の  
神風は  
天上から  
神から

資料 2

楽譜番号 59 (NHK1965 : 71) (採録地 : 釧路地区白糠)

(丹菊試訳)

**Hawo punkar hawop pa** 音がする (?) ブドウヅルで音がする (?)  
**Hasi kuruka sorarpa** 枝の上に滝がある (?)  
**Hasipet un casi** ハシペツ川の砦の  
**Kanras kasi ketunke** 屋根ぶきの骨組みが見えた (?)

(NHK1965 : 72 掲載訳、改行は原文ママ)

……蔓で

……………

灌木の上を

片付けて

ハシペツの砦の

一本の割木の上に

かぶせ

資料 3

楽譜番号 60 (NHK1965 : 71) (採録地 : 釧路地区白糠)

(丹菊試訳)

**Hesi punkar sorarpa** ヘシ (語義不明) 蔓が床を押さえつける (?)  
**Wasipetun casi** ワシペツ川の砦の  
**Kanrasi kasi ketunke** 屋根板の上がはがれた (?)  
**Hawo punkar hawoppa** 音がした 蔓で (?) 音がした

※kanrasi は kanras かもしれない

資料 4

楽譜番号 124 (NHK1965 : 113) (採録地 : 静内地区豊畑)

(丹菊試訳)

<b>Kanto horikasi</b>	天空から
<b>Kamuy ran mat hene</b>	神が降ろした女神
<u>Payosi payo</u>	(?)
<u>Kanto hura ko</u>	天の香りが立つ (?)

(NHK1965 : 113) に付された訳

天空から  
神の降した女神の  
なりとどろく  
天上の稲光りぞ

資料 5

楽譜番号 126 (NHK1965 : 115) (採録地 : 近文)

(丹菊試訳)

<b><u>Karapto</u> atuy riri</b>	樺太の海
<b>Paya</b> riri soya	行くぞ (?) 海原を (?)
Hutan kurka hutan rari	(?) の上を越えて (?)
<b><u>Kane pon pon</u> <u>kane pon</u> sor ka</b>	金属の小さな小さな、金属の小さな (?)
<b>Sa yusa soya</b>	(?)

※最終行は後世の追加行かもしれない



資料6

楽譜番号 127 (NHK1965 : 116) (採録地 : 十勝地区芽室太)

(丹菊試訳)

**Kaype rur sama**

波のところの

Oniwen kamu**y**

荒々しい神が

**Atuy pen rur**

海のアたりで

**H**aw osi haw osi

声をあげる 声をあげる (?)

(NHK1965 : 116 掲載訳)

波にのって

おこった神の

おこった声が

叩き 叩く

資料7

楽譜番号 135 (NHK1965 : 126) (採録地 : 千歳)

(丹菊試訳)

**Ororo wa he kore pun**

(?) して持たせるよ、ポン

**Korokoni pon kama su**

フキが小さなかますを (?)

**Op tarakin na**

槍が揺れるぞ

Haw o

ハウォ (大きな音を表す擬音語)

(NHK1965 : 126 掲載訳)

.....

露の小さな吠

ぶらぶらだ

.....

## 資料 8

楽譜番号 140 (NHK1965 : 128) (採録地 : 静内地区田原)

(丹菊試訳)

<b>Nipesi ka ta</b>	シナノキの内皮の上に
<b>Nipesi konkani</b>	シナノキの金属が (?)
Cara <u>cara carin na</u>	さらさらと音を立てる
<b>Nisikur ka ta carin na</b>	雲の上でさらさら音を立てる

以上の 8 例には「複数行の行頭あるいは行末において、母音あるいは子音の一致」がみられる。これらが「頭韻」と「脚韻」である。また下線を引いた部分のように、複数行で「似ている音連続」がみられることがある。これらが「不完全韻」である。以下では両者を「押韻」と呼ぶ<sup>8</sup>。これらの一致を技法的な押韻とみなしてよいかどうか、つまりこれらが「偶然の産物」以上のものであるかどうか、を検証することが本稿の目的である。

とはいえ、実際のウポポでは、このように 4 行の各行が異なり、また 4 行全体で意味が通じるような完全な詩形式になった作品は少ない。例えば、

- ・ かけ声が主体のもの
- ・ かけ声ではないにせよ、非常に短い語句が繰り返されるだけのもの
- ・ 意味の分からない行が 2 から 3 行含まれるもの
- ・ 1 行が半分の長さのもの

などがかかなりある。だが、いずれにせよほとんどの作品に行頭・行末での音の一致、不完全韻がみられる。意図的であるにせよ偶然であるにせよ、「押韻」は「一定の時間間隔で同じ音が繰り返される」という現象であり、繰り返しの印象を与えるものである。

---

<sup>8</sup> 音の一致がそれぞれ全て意図的であるかどうかには形式上の差異はない。ここでアイヌ韻文における「押韻」と呼んでいるものは、偶然の結果も作為の結果も含んでいるはずである。本稿の目的は、作者が全体として一致させるべく意識的・無意識的に努力しているかどうか、つまりなるべく多く押韻しようとしているかどうか、を解明することである。

### 3. 一般的なウポポの頭脚韻

NHK (1965) に収録されたウポポの多くは繰り返し語句・繰り返し行と、押韻つまり「行頭・行末における音の一致」を含んでいる。以下ではそれら「一般的なウポポ」について、

1. 母音による行頭韻
2. 子音による行頭韻
3. 母音による行末韻 (脚韻)
4. 子音による行末韻 (脚韻)
5. 母音による繰り返し韻
6. 子音による繰り返し韻

の例を確認する。

母音による頭韻はもっとも一般的にみられるものである。子音による頭韻は例は少ないものの、やはり意識的と思える例がある。母音による脚韻も意識的と思われるものの、かけ声等でそろえられていることが多く、韻と呼びにくい例もしばしばみられる。子音による脚韻については、当然ながら単一の子音では明確ではない。またアイヌ語の韻脚 (複数音節による行末押韻の単位) が存在するのか否かも分かっていないため、はっきりしたことはいえない。

1行の内部において、複数の単語の語頭や語尾で同じ音を繰り返す「繰り返し韻」もしばしばみられる。母音、子音どちらの例もある。

### 3-1. 母音による行頭韻

#### 資料9

楽譜番号7 (NHK1965:29) (採録地:千歳)

(丹菊試訳)

<b>Ororo pinne owa heya</b>	オロロ (語義不明) 雄が集って へヤ
<b>Owa cisinere</b>	集って鳴く (?)
<b>Apka topa owa heya</b>	雄鹿の群れが集って へヤ
<b>Owa cisinere</b>	集って鳴く (?)

(NHK1965:29 掲載訳)

狼の雄の群がどっさり  
どっさりさわいでいるよ  
強い雄鹿がどっさり  
どっさりさわいでいるよ

この歌の pinne「雄の」apka「雄シカ」topa「群れ」は日常語でも用いられる。NHK (1965:29) 掲載訳では ororo は「狼」と訳されているが、おそらく歌手の説明にもとづくのであろう。語り手は horokew「オオカミ」から推測したのかもしれない。NHK (1965:29) 掲載訳では owa は「群がどっさり」と訳されている。o「たくさんいる」と接続詞 wa と解釈したものであろう。heya は意味がないかけ声。cisinere は「さわいでいる」と訳されているが、この語形では他に記録されていない。cis「鳴く」と使役語尾-re等の組み合わせから、そういう意味になると歌手が推測しただけかもしれない。

#### 3-1-1. 母音による行頭韻と「繰り返し語句」

owa heya (第1行後半・第3行後半) が繰り返し語となっており、owa cisinere (第2行全体・第4行全体) が繰り返し行となっている。また、繰り返し行を含め3行の行頭で母音oが繰り返されている(以下の太字部分)。

1. **Ororo pinne owa heya**
2. **Owa cisinere**
3. Apka topa **owa heya**
4. **Owa cisinere**

第1行冒頭の語 ororo と第2行冒頭の語 owa は違う語句だがともに同じ母音 o で始まっている。これが行頭の母音韻である。偶然同じ母音で始まっている可能性もあるが、故意に並べてある可能性もある

第2行と第4行では同じ語句 owa cisinere が2回繰り返されているだけだから、「押韻」ではなく「繰り返し語」である。行頭母音 o が一致しているのも「押韻」ではない。だが、故意に同じ語句を繰り返しているのも、これは「繰り返しという技法」である。また、押韻ではないにしても、同じ音になっているので押韻と同じ「繰り返しの感覚」の効果はある。

### 3-1-2. 母音による不完全韻

資料9の第1行 ororo pinne と第3行 owa cisinere は全体としての音、特に母音の並びが似ている「不完全韻」である<sup>9</sup>。

**ororo pinne** の母音の配列は o-o-o i-e  
**owa cisinere** の母音の配列は o-a-i-i-e-e

oro	ro	pin	ne
o	wa	cisi	nere
母音 o	×	母音 i	母音 e

これらはしばしばみられる技法である。

<sup>9</sup> 丹菊逸治 (2018: 22) および、第2章第6節を参照のこと。

### 3-2. 子音による行頭韻

子音による明確な頭韻の例は少ない。NHK（1965）に掲載された159歌では、暫定的ながら<sup>10</sup>全595行の行頭子音出現数は以下のようにになっている。試みに声門閉鎖音を含む子音韻の割合も示したが、これもあくまで暫定的なものである。

表.1 NHK（1965）掲載のウポポ159歌における行頭子音の割合

子音種別	出現数	比率	出現数のうち押韻もしくは繰り返し語句頭にある数と比率	出現数のうち押韻をなしている数と比率
h	263	44.2 %	232 (88.2%)	83 (31.6%)
声門閉鎖音	153	25.7 %	153 (100.0%)	83 (54.2%)
k	55	9.2 %	23 (41.8%)	23 (41.8%)
t	31	5.2 %	18 (58.1%)	9 (29.0%)
c	20	3.4 %	8 (40.0%)	6 (30.0%)
p	16	2.7 %	4 (25.0%)	0 (0.0%)
s	16	2.7 %	8 (50.0%)	6 (37.5%)
m	10	1.7 %	7 (70.0%)	2 (20.0%)
n	10	1.7 %	7 (70.0%)	3 (30.0%)
r	10	1.7 %	2 (20.0%)	0 (0.0%)
y	6	1.0 %	3 (50.0%)	0 (0.0%)
w	6	1.0 %	2 (33.3%)	0 (0.0%)
合計	595	100.2 %		

（以下、本稿各表では各出現率や比率を個別に小数点以下2位を四捨五入した。そのため合計が100%ぴったりにならないこともある）

hが半数近く（44.2%）を占める。これはhで始まるかけ声がしばしば行頭に置かれていることを反映しているであろう。声門閉鎖音はいわゆる「母音始まり」のことであり、全体の25.7%である<sup>11</sup>。hと声門閉鎖音だけで7割を占める。残りの子音も繰り返し語句の行頭や押韻形式の音の一致に参加していることが多い。本稿では子音韻については深入りせず、後の課題としたい。以下では行頭子音韻とみられる例をあげておく。

<sup>10</sup> NHK（1965）では詩形が明確ではないこともあり確実なことがいえない。早期の音源の全面公開が望まれる。

<sup>11</sup> 丹菊逸治（2018）では「声門閉鎖音による行頭子音韻」を推定したが、これを母音韻とみるか子音韻とみるかを含め議論の余地はあろう。別稿に譲りたい。

楽譜番号 157 (NHK1965 : 142) (採録地 : 屈斜路)

(丹菊試訳)

<b>Tuptari yan na</b>	流水が寄せたよ	
<b>Tahiyo ta</b>	タ ヒヨ タ	(語義不明)
Hiyo roro ha ho	ヒヨロロハホ	(語義不明)
Hiyo <b>ta</b>	ヒヨ タ	(語義不明)

(NHK1965 : 142 掲載訳)

流水が寄せたよ

.....

.....

.....

NHK(1965) の解説によれば **tuptari** は「流水」のことらしい。rup「氷」と関係がある語だろうか。yan は「上陸する (岸に向かってくる)」、na は終助詞である。tahiyo は不明、ta は場所を表す副助詞もしくは強調詞である。hiyo roro ha ho はいずれも言語音としての意味がないかけ声である。

意味が取れない部分が大半を占めるが、**tuptari** と **tahiyo** は語頭で母音が異なり子音がともに t である。つまり子音 t で押韻している。

このような行頭の子音による押韻は数が少ないが他にもみられる。

資料 11

楽譜番号 71 (NHK1965 : 77)

(丹菊試訳)

**Hawwappa** 半ワッパを  
**Hero hero hero** 食べよう食べよう食べよう

※NHK (1965 : 77 9 掲載訳は「弁当食べよう」だけである。

hero は本来は a=e ro (e「食べる」ro「～しよう」) であり、人称接辞 a=があるはずで、また子音 h は不要である。もし NHK(1965 : 77-78) の解説と訳の通りだとすると、本来は以下のように行頭母音韻を踏んでいたと考えられる。

**Haw wappa**  
**A=e ro**

しかし、やがて第 2 行の冒頭の人称接辞 a=が、第 1 行末の wappa の末尾母音 a を伸ばしたものと誤解されて意味が分からなくなり、e がたんにかへ声と解釈されるようになったのであろう。そして行頭子音韻を踏むように子音 h が付加されて以下になったのであろう。

**Haw wappa**  
**Hero**

なお、楽譜によれば持続時間で区切ると a で行頭母音韻、h で行頭子音韻を踏む。

**Hawwa / pa-**  
**-a he / ro**  
**he / ro-**  
**-o he / ro**

つまり 2 行詩ではなく、以下のように各行の音節数の少ない 4 行詩と解釈できよう。

**Hawwapa**  
**Hero**  
**Hero**  
**Hero**



次のものは一見 2 行詩に見えるが、行の長さが半分の 4 行詩と解釈すると子音による頭韻の存在が分かる。

## 資料 12

楽譜番号 101 (NHK1965 : 95) (採録地 : 二風谷)

(丹菊試訳)

Hup ca ho horerere	トドマツの枝 ホ ホレレレ (語義不明、かけ声)
Hup ca ho hum hum	トドマツの枝 フムフム (かけ声)

この歌の持続時間の配分は以下のようにになっている (/で区切った部分が同じ長さで歌われる)。

Hup ca ho / horerere  
Hup ca ho / hum hum

これは 1 行の音節数が少ない 4 行詩形式である。4 行で示せば以下のようになる。

<b>Hup ca ho</b>	トドマツの枝、ホ (かけ声)
<b>Horerere</b>	ホレレレ (語義不明。かけ声)
<b>Hup ca ho</b>	トドマツの枝、ホ (かけ声)
<b>Hum hum</b>	フムフム (擬音語)

なお、NHK (1965 : 95-96) では horerere について胆振・釧路の類例から、元は ho ren ren だったと推測している。ho ren ren は「端よ沈め、沈め」というような意味である。hum hum は低い音を表す擬音語である。4 行には 2 行の繰り返し語句 hup ca ho が含まれているが、全て子音 h で始まっている。これは偶然ではなく、子音による頭韻であろう。

### 3-3. 母音による脚韻

#### 資料 13

楽譜番号 8 (NHK1965:30) (採録地: 沙流川流域ピタラパ)

(丹菊試訳)

Apka top**a** hoo 雄シカの群 ホー  
Ho top**a** hoo ホー 群 ホー  
Usus kina**a** hoo 蹄 草 ホー  
Ho kina**a** hoo 草 ホー

(NHK1965:30 掲載訳)

雄鹿の群だ ホー  
ホー 群だ ホー  
蹄の跡が草を ホー  
ホー 草を ホー

usus は日常語としては中川裕 (1995:62) に usis 「ひづめ」という語が記録されている。伝統歌謡中で語形が変化してしまったのか、たんに歌謡の記録時のゆれなのかは不明である。なお、usus 「ひづめ」と kina 「草」は名詞が並置されているだけで、関係は歌詞中では語られていない。文としては動詞がなく不完全である。NHK (1965:30) では意識している。

hoo は言語音としては意味のないかけ声であり、毎行の最後に繰り返されているので、神謡形式のリフレインのようなものと考えることができる。その場合は本文は

Apka top**a**  
Ho top**a**  
Usus kina**a**  
Ho kina**a**

となり、各行の最後は topa と kina が 2 回ずつ繰り返されていることになる。topa と kina はともに母音 a で終わっているため、母音 a による脚韻である。

### 3-4. 子音による脚韻

音節末子音による明確な脚韻はみられないようである。ただし、最後の音節の子音同士で押韻しているようにみえることもある。

#### 3-4-1. 子音による脚韻とは何か

アイヌ語詩は原則として歌謡であり、各行末は持続して発声されるため、子音による脚韻は困難なはずである。しかし音節単位でみれば子音の一致は可能である。

資料3 (再掲)

楽譜番号 60 (NHK1965 : 71) (採録地 : 釧路地区白糠)

(丹菊試訳)

<b>Hesi punkar sorarpa</b>	ヘシ (語義不明) 蔓が床を押さえつける (?)
<b>Wasipetun casi</b>	ワシペツ川の砦の
<b>Kanras kasi ketunke</b>	屋根板の上がはがれた (?)
<b>Hawo punkar hawoppa</b>	音がした 蔓で (?) 音がした

※kanrasi と表記

この歌では、第1・4行の行末はどちらも pa で音節の子音と母音がともに一致している。これは複数標示の同じ接尾辞だが、sorar-pa と hawop-pa のように単語自体は別である。もちろん、たんに詩の意味内容によってどちらも複数標示がついているだけであり、音が一致したのはその結果にすぎず意図的ではないのだ、という可能性ももちろんある。

だが、もしもこれが意図的になされているとしたら、これは母音が一致した母音韻なのだろうが、子音も一致はしている。音節同士で onset オンセット ( $C_1VC_2$  の  $C_1$ ) が一致するものを頭韻、rime ライム ( $C_1VC_2$  の  $VC_2$ ) もしくは coda コーダ ( $C_1VC_2$  の  $C_2$ ) が一致するものを脚韻と呼ぶなら、これは「行末における頭韻」である。丹菊逸治 (2018) では「最終音節における  $C_1VC_2$  の任意の  $C_1$  と  $C_2$  が一致する押韻」つまり、「オンセット同士、コーダ同士、もしくはオンセットとコーダが一致する押韻」がアイヌ韻文の脚韻なのではないかと推測したが、それが偶然か否かの検証は、行頭母音に比較すると困難である。比較的検証しやすいと思われる叙事詩に関しても、田村すゞ子・平賀サタモ (1993) の行末音節でオンセット ( $C_1$ ) 同士が一致する比率は偶然より高いわけではない。また、実際には (ウボボにせよ叙事詩にせよ) 歌詞の行末に閉音節が来る例は極めて少ない。

### 3-4-2. 子音による脚韻と思われる例

本稿での検証は主として行頭における頭韻、特に母音韻に絞り、アイヌ韻文における脚韻については今後改めて確認していきたいと考えている。ここでは脚韻と思われる例を紹介するだけにとどめておく。

#### 資料 14

楽譜番号 81 (NHK1965 : 83) (採録地 : 沙流川流域)

hetunup / hekarkar	エトゥヌプ (酒容器) が転がる (?)
hekannisi <b>po</b> / hesu <b>ye</b>	天空が揺れる
sa tomari <b>ya</b> / sa ye <b>ya</b>	○ 先の港の岸 (?) 先の岸 (?)

この歌を3行詩形式とすると、第2・3行末の ye と ya は意識的にそろえられているように思える。また、第1行前半部の最終音節 nup と第2行最終音節 po の子音 p も、偶然ではないように思われる。というのは hetunup の-p は単語の一部だが、hekannispo の-po はおそらく指小辞であり、本来はなくてもよいはずだからである。つまり hetunup に合わせて hekannisi に po が付けられた可能性がある。

次の例では、おそらく行末最終音節の母音は変えられているが、子音は保存されている。

#### 資料 15

楽譜番号 138 (NHK1965 : 127) (採録地 : 近文)

	(丹菊試訳)
Ota nisike oman	砂浜の薪を取りに行く (?)
Nisike se <b>tori</b>	薪を運んで (tori は語義不明)
Ota nisike se <b>toro</b>	砂浜の薪を取って背負って (?) (toro は語義不明)
Hun	フン (かけ声)

NHK (1965:128) では「歌詞の意味は『砂浜を薪運びに行く……』とっているようであるが、なぜこんな歌が明らかでない。」とする。ota nisike oman「砂浜を薪運びに行く」(日常語文体であれば nisike の後に接続詞があってもよいかもしれない) ははっきりしているが、次の se tori と se toro は意味が分からない。したがって、se tori と se toro のどちらが本来の形なのかもわからないが、おそらく本来は同じ音形だったのに、最終母音だけ i

と o に分かれたのは間違いなさそうである。

次の例では最終音節が-run, we, wa, wa となっている。第 1 行は一致とはいえないかもしれないが、第 2 行末音節-we と、第 3・4 行末の wa は子音をそろえているように見える。

資料 1 (再掲)

楽譜番号 16 (NHK1965:35) (採録地：近文)

(丹菊試訳)

Asipet par <b>un</b>	アシペツ川の
Kamuy maw <b>e</b>	神の風
Kantori <b>wa</b>	天界から
Pitori <b>wa</b>	神 (?) から

なお、持続時間が同じ部分を「/」で区切って示せば以下のようなになる。

Asipe pa / run **ka**  
muy maw / -e  
Kantori / wa pi-  
-tori / **wa**

### 3-5. 母音による繰り返し韻

行頭と行頭で音を一致させる行頭韻、行末と行末で音を一致させる行末韻など、複数の行にまたがる押韻のほかに、1つの行の内部で同じ音を繰り返す「繰り返し韻」がある。「繰り返し韻」は母音によるものと、子音によるものがある。

#### 資料9 (再掲)

楽譜番号7 (NHK1965:29) (採録地: 千歳)

(丹菊試訳)

<u>Ororo pinne</u> owa heya	オロロ (語義不明) 雄が集って へヤ
<u>Owa cisinere</u>	集って鳴く (?)
Ap <b>a</b> top <b>a</b> owa <b>a</b> heya <b>a</b>	雄鹿の群れが集って へヤ
Owa cisinere	集って鳴く (?)

(NHK1965:29 掲載訳)

狼の雄の群がどっさり  
どっさりさわいでいるよ  
強い雄鹿がどっさり  
どっさりさわいでいるよ

第3行 ap**a** top**a** owa**a** heya**a** は単語 (あるいは2音節単位) が全て a で終わっている。これは「繰り返し韻」である。「繰り返し韻」には「繰り返し頭韻」と「繰り返し脚韻」がある。ここでは「繰り返し脚韻」であり、ちょうど4打の裏 (ウラ) 拍にあたる。

### 3-6. 子音による繰り返し韻

#### 資料3 (再掲)

楽譜番号 60 (NHK1965 : 71) (採録地 : 白老浜)

(丹菊試訳)

<u>Hesi punkar sorarpa</u>	ヘシ (語義不明) 蔓が床を押さえつける (?)
<u>Wasipet un casi</u>	ワシペツ川の砦の
<b>Kanrasi kasi ketunke</b>	屋根板の上がはがれた (?)
<u>Hawo punkar hawoppa</u>	音がした 蔓で (?) 音がした

田村すゞ子 (1987 : 45) に類例と解説があり、kanras は板屋根の板、ketunke は「はがれる」という意味だという。sorarpa は田村訳では「見えてきた」。試訳では so-rarpa 「床を・押さえつける」とした。hesi は語義不明。hawo はかけ声だが、NHK(1965 : 72) では hawot 「音がする」、hawoppa はその複数形と解釈している。

第3行の **kanras kasi ketunke** は3単語の各語頭および最後の語の最終音節がいずれも子音kで始まる、「繰り返し頭韻」である。位置的にも4打を打つときの表 (オモテ) 拍にあたる。

なお、NHK(1965) では訳は付されていないが、次の類例が訳とともに掲載されている。

楽譜番号なし (NHK1965 : 72) (採録地 : 釧路地区白糠和天別)

<b>Haw</b> o punkar	…蔓で
<b>haw</b> oppa	……
<b>Hasi</b> kuruka	灌木の上を
sorarpa	片付けて
<b>Kasi</b> pet tun casi	ハシペツの砦の
<b>ka</b> nراسi kasi	一本の割木を上
<b>ke</b> tunke	かぶせ

これはこれで美しい行頭子音韻が並んでいることになるが、各行に2打を打つと第5行がうまく合わない(この行には3打が必要である)。この歌い方が楽譜例と同じだとするとむしろ以下のような4行詩ととるべきであろう。

<b>Haw</b> o punkar haw oppa	…蔓で……
<b>Hasi</b> kuruka sorarpa	灌木の上を片付けて
<b>Kasi</b> pet un casi (休止)	ハシペツの砦の
<b>Kan</b> راسi <b>kasi</b> <b>ke</b> tunke	一本の割木を上にかぶせ

(丹菊による再構、訳はNHK1965 : 72をそのまま用いた)



#### 4. 繰り返し語句

複数の行で同じ語句が繰り返されている歌がある。これらは同じ行が繰り返されていることもあるが「行の一部の語句のみが複数行で一致する」場合もある。「一部のみ一致する」という点では押韻と共通するが、押韻と異なり「一致した部分」は同じ意味を有している。「押韻」は「意味は異なるが音が一致する」という現象であり、「繰り返し語句」は「行全体の意味は一部異なるが音が一致する」という現象である。つまり「繰り返し語句」は「押韻より音の一致度が高い」ともいえよう<sup>12</sup>。繰り返し語句は押韻と同じく、行頭にある場合、行末にある場合、そして行内部で繰り返される場合がある。また、押韻とは異なる特殊なものに「同一行の繰り返し」と「しりとり型配置」による関係文がある。

##### 4-1. 繰り返し語句が行頭にあるウポゴ

先にあげた NHK (1965 : 127) 楽譜番号 138 は行頭で一致している例である。

資料 15 (再掲)

楽譜番号 138 (NHK1965:127) (採録地 : 近文)

(丹菊試訳)

<b>Ota nisike</b> oman	砂浜の薪を取りに行く (?)
Nisike se tori	薪を運んで (tori は語義不明)
<b>Ota nisike</b> se toro	砂浜の薪を取って背負って (?) (toro は語義不明)
Hun	フン (かけ声)

上の詩は 4 行詩形式としてみた場合、第 1・3 行の行頭が繰り返し語句 ota nisike になっていて、残り 2 行は押韻していない。

---

<sup>12</sup> 詩は発話であるから、発話内容が先に進まなくてはならないが、同時に繰り返し感覚を持たせたい。押韻は「話を先に進めつつ、音を繰り返す」ための技法である。同一行を繰り返せば、音は完全な繰り返しになるが、話が先に進まなくなってしまう。「繰り返し語句」はその中間的な技法ともいえる。すなわち、「音は不完全に繰り返され、話は少しだけ先に進む」のである。

#### 4-2. 繰り返し語句が行末にあるウポポ

繰り返し語句が行末にあり、残りの行に押韻がみられない例もある。

##### 資料 17

楽譜番号 123 (NHK1965 : 113) (採録地 : 十勝地区伏古)

(丹菊試訳)

Kanto horikasi wa	天空から
Kamuy ran mat <b>heene</b>	神が降ろした女神
Piwsee piw	バリバリ響く
Kanto <b>heene</b>	天空に

行頭・行末でたんに 1 組の母音が一致するだけならば偶然の可能性もあるが、このように語句が一致する場合にはもちろん偶然ではありえない。また、この heene は語義が明確ではなく、意味的な理由で一致しているとは限らないのである。このような例は、行末においても音の一致すなわち行末韻（脚韻）が志向されている可能性を示唆する<sup>13</sup>。

---

<sup>13</sup> 「繰り返し語句」と押韻は類似の現象という可能性が高い。日本の和歌においても、古代歌謡に頭韻現象が知られているが、福田智子・南里一郎・竹田正幸（2002）は『万葉集』に同一文字列の反復が多くみられることを指摘している。

#### 4-3. 最終行内の繰り返し語句

詩の最終行などに繰り返し語があることがある。前項における繰り返し語は、頭韻と同じく複数の行の行頭部に繰り返されるが、このタイプでは「繰り返し韻」と同じく、同一行内で同じ語句が繰り返される。

#### 資料 18

楽譜番号 142 (NHK1965:131) (採録地：十勝地区伏古)

(丹菊試訳)

Pon paykar an kor	小さな春が来た
Iwa se kotor	霊山の背後に
Apka kotoyse	雄鹿が群れをなす
Iwa topenni	霊山のイタヤカエデを
<b>Kepu kepu kepu</b>	かじるかじるかじる

(NHK1965:131 に付された訳)

早春になると  
山の斜面に  
雄鹿が集まって  
イタヤの木を  
かじる かじる かじる

NHK (1965:131) では第3行第一語は apuka になっているが apka の誤記であろう。なお、\*kepu という語形は主要な辞書・語彙集には収録されていないが、kepkepu「かじる(他動詞)」という語の存在からすると、kepu という語形があってもおかしくない。

最終行 kepu kepu kepu では、\*kepu「剥ぐ(?)」が同一行内で繰り返されている。このような歌の最後部分にある同一行内の繰り返し語からはいずれもとってつけたような印象を受ける。歌も元来は以下のような4行詩形式だったのではないかと思われる。kepu の繰り返しは、ウポポとして複数人で歌われるようになったのちに追加されたのではないか。

(丹菊による再構形)

Pon paykar an **kor**

**Iwa** se kotor

Apka kotoyse

**Iwa** topenni kepu (あるいは keppure)

この再構でも、第2・4行で繰り返し語 *iwa* が用いられていて、残りの行は行頭で押韻していない（つまり、最初から頭韻はなかった）。

なお、この歌は歌い方も変わっている。持続時間の配分を「/」で区切って示せば以下のようになる。それぞれ上から2打・2打・3打・2打・3打ずつと思われる。

Pon paykar / an kor

Iwa se / kotor

Apka / kotoyse- / -e

Iwato / penni

Kepu kepu / kepu- / -u

#### 4-4. 同一行の繰り返し

同一行の繰り返しには、歌詞中の2行以上が同一行になり、他の行が異なっている場合と、同一行だけを繰り返すものがある。

##### 4-4-1. 4行中2行が繰り返される形式

資料 19

楽譜番号 12 (NHK1965:31) (採録地：鷗川流域春日)

(丹菊試訳)

<b>Ho topa ho</b>	ホ 群 ホ
Uses kina ho	蹄の草 ホ
Apka topa ho	鹿の群 ホ
<b>Ho topa ho</b>	ホ 群 ホ

資料 13 (楽譜番号 8 本書 p25) の類歌である。この歌では、最初の行と同一の行が最後に繰り返されている。はさまれた2行は別の語句になっている。

行全体が繰り返される位置は歌によって決まっているようである。**AABC** (楽譜番号 133 など)、**ABAC** (楽譜番号 110 など)、**ABCA** (楽譜番号 12 など)、**ABCB** (楽譜番号 89 など)、**ABCC** (楽譜番号 115)、の全ての組み合わせが実在する。

なお、ウポポ以外のジャンルでは4行中第3行のみが異なり、残り3行が同じ行になっているもの (AABA)があるが (楽譜番号 160 など)、NHK (1965) に掲載されたウポポ 159 歌にはそのような例は見当たらない。

#### 4-4-2. 同一の1行のみを繰り返す形式

資料 20

楽譜番号 53 (NHK1965:65) (採録地: 静内地区新冠万世)

(丹菊試訳)

**Hanru hae** ruhu wa      ハンルハエ (かけ声) 道から  
Hanru hae ruhu wa  
Hanru hae ruhu wa

NHK(1965:65) には「意味はよくわからないが次のようにも解される」として「足跡がわからない／ツンドラ地帯で」という訳を掲載している。

NHK(1965) では、同一行の繰り返しでも各回の音の高低パターン（いわゆる旋律）が異なる場合は全回を楽譜化している。これらは同一行の繰り返しによる複数行詩と考えるべきであろう<sup>14</sup>。同一行1行の繰り返し回数は2～6行まで幅があるが、1行が1回だけ歌われるとおぼしき例はないからである。なお、この形式の歌の多くには「繰り返し韻」が含まれている。

---

<sup>14</sup> 音の高低パターン（いわゆる旋律）と語句や詩形式の関係については今後の研究課題としたい。この繰り返し回数が何によって決まるのかについても現時点では全く分からない。

#### 4-4-3. 同一の2行を2回繰り返す形式

##### 資料 21

楽譜番号 149 (NHK1965 : 136) (採録地 : 沙流川流域荷負)

(丹菊試訳)

Tama kuto 玉が帯についた (?)

Hae ハエ (かけ声)

Tama kuto

Hae u

NHK (1965 ; 136) では類歌をあげて「首飾りの珠の紐が切れて、珠がちらばったときの驚きが、そのままウポポになったものである」としている。

この歌は各行が4音節になっている。tama kuto と hae が同じ長さで歌われていることから、tama kuto hae を2回繰り返す2行形式ではなく、4行形式とみるべきであろう。

このような2行の繰り返しには ABAB 形式、AABB 形式がある (ABBA 形式はないようである。繰り返し歌うので AABB と差がないためであろう)。2行の繰り返し形式の歌にはこの歌のように意味の分かる語句が含まれるものは少ない。

##### 資料 22

楽譜番号 110 (NHK1965 : 102) (採録地 : 釧路地区美幌)

(-e) Hu wa e / iyo ey o

wa hew / ro hae-

-e hu wa e / iyo ey o

wa hew / ro ha e- (語義不明)

歌詞が全て語義不明ではあるが、歌い出しがウラ拍になっているので、実際には以下のような2行を2回繰り返している4行形式としてみるべきであろう。

Hu wa e iyo ey o

Wa hew ro hae

#### 4-5. 関係文的な繰り返し語句

先行する行の行末と、後続する行の行頭に同じ語が繰り返されることがある。これは一種の関係文であり、統語論的な現象でもある。

##### 資料 23

楽譜番号 121 (NHK1965 : 110) (採録地 : 静内地区昭和)

	(丹菊試訳)
Kani <b>rewka</b>	金属の橋
<b>Rewka</b> pake	その橋の頭が
Topan topan	たわむ たわむ
Topan rewke	たわんで曲がる

Batchelor (1938 : 506) 「Topan-topan v.t. To move or shake about.」とある。何かの影響で揺れる、すなわち「たわむ」ということかと思われる。

第1・2行では kani rewka rewka pake 「金属の橋 橋の頭」という叙事詩文体的な関係文が用いられている。口語文体であればたんに kani rewka pake 「金属の橋の頭」である。このような関係文については、金田一京助 ([1908]1992 : 20) は「尚、『繰返し』の今一つの他の仕方は、前の句の末の語を、次の句の頭に今一遍繰返して綾を成して行く方法である」、田村すゞ子 (1987 : 18) は「位置名詞などの前で、韻文ではよく、その前の名詞句の最後の名詞を行の頭にくり返す : páse kotan/kotan tapkasi.」と指摘する。丹菊逸治 (2018 : 24) でも「しりとり型母音配置」として押韻と同じような「繰返し」の詩的技法とみなした。しかしこれはたんに音の上での効果を狙った「繰返し語」ではなく、叙事詩的な関係文構造というむしろ統語論的な現象とみなすべきかもしれない。

なお、第3行の内部で topan 「たわむ (?)」が2回繰り返されている。この詩には、行頭部に繰返し語があるだけで頭韻はない(母音脚韻は4行で踏んでいる)。また、第3・4行の行頭では頭韻と同じような「繰返し語」としても topan が用いられている。



## 5. 交差配列による行頭韻

### 資料 24

楽譜番号 29 (NHK1965 : 46) (採録地 : 静内地区田原)

(丹菊試訳)

<b>C</b> upka wa	東から
<b>k</b> amuy ran	神が下りた
<b>l</b> wa teksam	小山の近くに
<b>o</b> rew	とまった
<b>l</b> wa teksam	小山の近くに
<b>k</b> ani maw ne	金属音が
<b>c</b> inu	聞こえた

(NHK1965 : 47 掲載訳)

東の方から  
神がおりて  
岩角に  
とまった  
岩角に  
美しい響が  
聞えた

この歌では行頭の母音と子音が c-k-i-o-i-k-c と並んでいる。いわゆる交差配列である。交差配列<sup>15</sup>は通常は 1 行の内部で母音の繰り返し韻として好まれる。行頭でこのように母音と子音が整然と並んでいる歌は管見ではこの歌だけであるが、類歌が全道的に分布しているのでかなり好まれたのであろう。

---

<sup>15</sup> アイヌ口承文芸において交差配列が好まれていることは、大喜多紀明 (2012) とそれに続く一連の研究で指摘されている。この歌の行頭交差配列韻については丹菊逸治 (2018 : 44) が指摘している。

## 6. 1行の音節数

1行の音節数は原則として8音節以内である。ウポポとして歌う場合、sintoko シントコと呼ばれる漆器の蓋等を軽く叩いて拍子をとるが、その際には2打×2回＝計4打を音の高低パターン<sup>16</sup>の単位としており、1打につき2音節を発声する。ただし、全体が1行4音節で構成されている場合もある。その場合は1行あたり4打ではなく2打で歌われる。1～4音節の行と5～8音節の行が混在している場合は、たいていは続けて歌ってしまうが、短い行に休止を足したり、適宜母音を伸ばしたりして長い行に合わせることもある。

次のものは1行あたり2打（4音節）の4行形式である。

### 資料 25

楽譜番号 82 (NHK1965:83-84) (採録地：近文)

Hetunup  
He kar kar  
Hekan nisu  
He sue

歌い方を無視したとしても、これらを十数音節の1行詩あるいは、7音節前後の行からなる2行詩と考えることは困難であろう。実際にはもっと短い単位で頭韻もしくは脚韻を意識しているからである<sup>17</sup>。やはり、行の長さが通常より短い（4打ではなく2打分である）4行詩になっているとみるべきであろう。NHK(1965)に2行詩形式で掲載されているもののほとんどはこれにあたる。

<sup>16</sup> いわゆる「旋律」であるが、本稿では「音の高低パターン」と呼ぶ。実際にはアイヌ伝統歌謡は言語音から音の高低が確定する「朗唱」であり、言語音と無関係に作られうる「旋律」という用語は適切ではないからである。

<sup>17</sup> もちろん「規則的に繰り返し語句が入る1行詩」などとみなすことはできようが、それはあまり意味がないように思われる。

## 7. 行頭に母音韻・繰り返し語句を持たない6例の検討

アイヌ語の母音は5つなので、4行あれば偶然でも8割程度は「2個以上の母音の一致」がみられるはずである。以下は4行形式の行頭で母音の一致が偶然生じる確率である。

表2. 4行詩において偶然押韻が生じる確率

押韻の種類	確率 (%)
2行のみ一致	57.6
2行の一致が2組	9.6
3行の一致	12.8
4行全てが一致	0.8
4行全てが相違	19.2
合計	100

このように4行形式では偶然でも母音が一致しやすい。一つでも一致がある確率は81.8%である。したがって行頭や行末で母音が一致していても大半は作為ではなく偶然であろう。また、「繰り返し語句」があれば、行頭母音も当然一致するが、これは作為であるにしても「押韻」とはいえないであろう。

しかし、NHK (1965) のウポポ 159 歌では、うち 153 歌に「行頭での母音の一致」(繰り返し語句による一致、同一行の繰り返しによる複数行詩を含む) がみられる。この比率は 96.2%であり、偶然より高い比率である。

行頭に繰り返し語句も押韻もみられないのは以下の6歌である。

楽譜番号 1、22、28、33、120、159

これは全 159 歌の 3.8%にすぎず、偶然で生じる確率 19.2%を考慮すると少ない。以下ではさらにこれら6歌について「行頭母音がかかわる別種の押韻の有無」を1つずつ検討する。

## 7-1. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポポ (その1/6)

### 資料 26

楽譜番号 1 (NHK1965:26) (採録地:近文)

A ho he

Ho ho he (語義不明)

全体が意味のない音で構成されているが、形式的には数少ない 2 行形式とみてよいであろう。最初の音節が第 1 行は a、第 2 行は ho というように変えられている。残りの部分 ho he は同じである。これはむしろ「同じ音の繰り返しで冒頭音節のみ変えてある」のである。つまり「繰り返し語句」の変形であり、押韻と同じような「繰り返し」効果がすでにあるので、押韻をさらに重ねなくともよいはずである。また、言語音としては意味がない ho he という音は同じ子音 h と異なる母音 o, e の組み合わせになっている。つまり一種の繰り返し韻である。

なお、4 行形式として解釈すれば、以下のような数少ない 1 行 1 打形式である。

A ho-

●-He ○

Ho ho-

●-He ○ (持続時間で切った場合)

A ho

He

Ho ho

He (言語音(?)で切った場合)

7-2. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポポ (その2/6)

資料 27

楽譜番号 22 (NHK1965:89) (採録地: 沙流川流域去場)

(丹菊試訳)

<b>A</b> tuy so ka <b>ta</b> hua ra e hoy	海原の上で フアラエ ホイ
<b>O</b> pinne cir[i]p <b>o</b> hua ra e hoy	雄の小鳥が フアラエ ホイ
Tepakan tepakan hua ra e hoy	羽ばたく羽ばたく フアラエ ホイ
<b>Sa</b> n ota ka <b>ta</b> hua ra e hoy	村の前の浜で フアラエ ホイ
<b>O</b> matne cir[i]p <b>o</b> hua ra e hoy	雄の小鳥が フアラエ ホイ
Rimimse rimimse hua ra e hoy	叫ぶ叫ぶ フアラエ ホイ

(NHK(1965:40)に「tepapan は水禽が水の上で羽搏きすることをいう」とある)

(NHK1965:40 掲載訳)

海の上で／ウワラエ ホイ  
雄の小鳥が／フワラエ ホイ  
あっぷあっぷすると／フワラエ ホイ  
浜辺では／フワラエ ホイ  
雌の小鳥が／フワラエ ホイ  
びっくりして騒ぐ／フワラエ ホイ  
(改行は適宜／に変えた)

2つの3行詩連で構成されている。各詩連内部では第1行の行頭・行末母音がともに a、第2行の行頭・行末母音がともに o となっている。各詩連内部では行頭で母音韻は存在しないが、第1詩連と第2詩連の第1行同士、第2行同士は同じ母音 a, o となっている。つまり各詩連の第1行同士、第2行同士という対応行頭が押韻する。例は少ないが叙事詩等にもみられる技法である。

このような2連3行詩形式は、4行詩的から派生して作られたと考えてよいだろう。すなわち、第1詩連第3行 tepakan tepakan、第2詩連第3行 rimimse rimimse という押韻していない繰り返しを1回にして第2行の末尾につれば（そして hua ra e hoy というリフレインを除けば）、以下のような5・8・5・8音節の4行詩形式になる。

**A**tuy so ka **ta**

**O** pinne cir po tepak**an**

**Sa**n ota ka **ta**

**O** matne cir po rimimse

7-3. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポポ (その3/6)

資料 28

楽譜番号 28 (NHK1965:45) (採録地:東静内)

(丹菊試訳)

Cupka un mat	東の女性 (女神) が
Atte sinta	かけた揺り籠
Sinta atka	その揺り籠の紐
O ha o	オ ハ オ (かけ声)

(NHK1965:45 掲載訳)

月の上の女神の  
 さげたゆりかごの  
 ゆりかごの紐  
 オ ハ オ

第1行が u-a-u-a という繰り返しの母音配列になっている。また第2・3行は atte sinta sinta atka 「かけた・揺り籠の、揺り籠の・紐に」という4語の頭母音が a-i-i-a という交差配列になっている。第4行も母音が交差配列である。つまり

<b>Cupka un mat</b>	u-a-u-a	(音節単位)
<b>Atte sinta / Sinta atka</b>	a-i-i-a	(単語の語頭)
<b>O ha o</b>	o-a-o	(音節単位)

なお、この歌詞は脚韻が優位である。行単位はもとより、cupka / un mat / atte / sinta / sinta / atka / o ha o という2音節単位でも、7つのうち5つまでが a で終わっている。

Cupka / un mat  
 Atte / sinta  
 Sinta / atka  
 O ha o

そしてこの詩は音節の軽重の配列も以下のようにそろっている。●は CVC、○は CV 音節である。

●○●●	Cupka un mat
●○●○	Atte sinta
●○●○	Sinta atka
○○○	O ha o

第1～3行まではほぼそろっている<sup>18</sup>。第1行末と第2・3行末は○●（軽重）が揃っていないが、mat, -ta, -ka のように行末母音が揃えられている。

以上のように、この詩では行頭部も含めて別の音の作為がなされているので、それが理由で行頭での押韻を志向しなかった可能性が考えられよう。

なお、この歌はもともとは叙景詩として作られたものではなかったようである。NHK (1965:45) の解説には、特定の儀礼と結び付けられた特殊なウポポである、本来は子守歌だった、などの証言が紹介されている。また、歌詞中の *atte sinta sinta atka* 「かけた揺り籠、その揺り籠の紐」という叙事詩的關係文が見られることから、叙事詩 (yukar) あるいは神謡 (oyna) など何らかの韻文物語の一部だった可能性が考えられる。散文であれば *atte sinta atka* 「かけた揺り籠の紐」でよい。このタイプの關係文は NHK (1965) の掲載のウポポ 159 歌中、この楽譜番号 28 (資料 28)、楽譜番号 120 (資料 30)、楽譜番号 121 (資料 23) の計 3 歌にしかみられない (第 2 章でとりあげる平賀サタモ [1959]1993 では 310 詩連中 21 詩連にみられる)。楽譜番号 120 は楽譜番号 28 同様に押韻を持たない歌である。楽譜番号 121 はおそらく楽譜番号 120 の最後の 1 行が繰り返されるようになったものである。

---

<sup>18</sup> アイヌ語韻文の formula 内の行同士でしばしば音節数がそろえられているという現象については金田一京助 ([1933]1992:296) Philippi (1979:30) が叙事詩文体について指摘している。金田一京助も Philippi もアイヌ韻文に韻律 (metre つまり、CVC 音節と CV 音節の規則的配置) を認めてはいない。実際には丹菊逸治 (2018) で指摘したように、音節数だけでなく音節の配置パターンがそろえられる、という韻律がみられる。



7-4. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポポ (その4/6)

資料 29

楽譜番号 33 (NHK1965 : 49) (採録地 : 十勝地区音更)

(丹菊試訳)

Cupkihi kamuy	神々しい月の光が
<u>Iwani kurka oman</u>	アオダモの上を照らし行く
<u>Etannewa oman</u>	長く伸びて行く

(NHK1965 : 49 掲載訳)

月の光の神が  
アオタモの影の上に行く  
それを長くして行く

第2・3行末で oman という同語の繰り返しがあるが、それ以外は押韻も繰り返し語もない。だがこの詩では資料 28 (楽譜番号 28) と同様、叙事詩によくみられる不完全韻<sup>19</sup>が用いられている。不完全韻というのは、「音が全体として似た語句」同士という「韻」である。ここでは、第2行前半部 iwani kurka と第3行前半部 etannewa が不完全韻となっている。

**i-wa-ni kur-ka**  
**e-tan-ne w-a**

のように、i と e、wa と tan、ni と ne、kur と w、ka と a が対応し、全体として「音がよく似た語句」になっている。

第2行前半	i	wa	ni	kur	ka
第3行前半	e	tan	ne	w	a
音の共通性	前舌の狭め母音	母音 a	子音 n 前舌の狭め母音	円唇音	母音 a

この歌には資料 28 (楽譜番号 28) とは異なり、もともと韻文物語の一部だったという証言はないようだが、同じく叙事詩等に多用される不完全韻を用いている。特殊な行頭音配列を持つ楽譜番号 29~32 の類歌でもある。丹菊逸治 (2018 : 44) を参照のこと。

<sup>19</sup> 第2章第6節参照

7-5. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポポ (その5/6)

資料 30

楽譜番号 120 (NHK1965 : 110) (採録地 : 十勝地区芽室太)

(丹菊試訳)

Kane <u>rexwka</u>	金属の橋
rexwka no ho sike	橋の真ん中
topan <u>rexwke</u>	たわんで曲がる

(NHK1965 : 111 掲載訳)

丈夫な橋  
橋の真中が  
しなりまがる

ローマ字表記の x は NHK (1965 : 110) に従ったものである。

x で表されている部分は、おそらく裏声を使っている部分であり、言語音ではないであろう。また、no ho sike の ho も no が裏声を用いて伸ばした部分であろう。sike の母音 i も聞き間違いの可能性が高い。したがって、言語音としては

Kane rewka  
rewka noske  
topan rewke

というような語形と思われる。この歌は叙事詩形式の特徴を備えている。散文体であれば kane ruyka noski 「金属の橋の真ん中」となる関係文を kane ruyka, ruyka noski 「金属の橋・橋の真ん中」と2つの名詞句に分割して2行にするのは叙事詩文体の特徴の一つである(第4-5節参照)。また第1行 rexwka < riwka 「橋」と rexwke < rewke 「曲がっている」は、歌謡以外の韻文でよく用いられる不完全韻を踏んでいる。ただし行頭部分ではなく行末部分である。

先にあげた資料 25 はこの歌の類歌であり、おそらく本来は 3 行詩形式だったものを、**topan** を繰り返した第 3 行を加え、4 行詩形式に改変したものである。

#### 資料 23 (再掲)

再掲 楽譜番号 121 (NHK1965 : 110) (採録地 : 静内地区昭和)

(丹菊試訳)

Kani rewka	金属の橋
Rewka pake	その橋の頭が
<b>Topan topan</b>	たわむ たわむ
<b>Topan</b> rewke	たわんで曲がる

資料 30 のように、3 行形式で行頭に母音韻や不完全韻を持たないものは不安定であり、だからこそ、資料 25 は **topan** を繰り返して行を増やし、安定した 4 行形式に改変されたのではないだろうか。

なお、kane ruyka 「金属の橋」という文学的修辞は「余興踊り歌」ジャンルに分類されている楽譜番号 283 にもみられる。

#### 資料 31

楽譜番号 283 (NHK1965 : 267) (採録地 : 釧路地区塘路)

(丹菊試訳)

Konkani ruyka ho ruyka	金属の橋	ホ	橋 (ホはかけ声)
Konkani ruyka ho ruyka	金属の橋	ホ	橋

NHK (1965 : 267) では **konkani ruyka ho ruyka** を 2 行繰り返す 2 行詩のように扱われているが、以下のような 4 行形式とみてよいであろう<sup>20</sup>。

**Konkani ruyka**  
**Ho ruyka**  
**Konkani ruyka**  
**Ho ruyka**

<sup>20</sup> NHK (1965 : 267-268) でも 2 行の歌詞が異なる類歌が 4 行形式にまとめられている。

7-6. 行頭に押韻も繰り返し語も持たないウポポ (その6/6)

資料 32

楽譜番号 159 (NHK1965 : 143) (採録地 : 静内)

(丹菊試訳)

Yuk top**a** ran **na**      鹿の群が下りてきたぞ  
Cipes**oro** soro **hoy**      船に (?) 沿って下りてくる    ホイ

(NHK1965 : 143 掲載訳)

鹿のかたまりが天降ったよ  
吾里川にそうておる

NHK (1965 : 144) では cip は cipet 「我々の川」の意とするが、そう解釈するのは難しい。

この歌の持続時間が同じくなる位置を「/」、休止を「○」で示せば、歌い方は以下のようになる。

Yuk top**a** / ran **na**  
Cipes**oro** / soro  
Hoy / ○

この歌は数少ない3行形式で、1行目の後半が母音 a、2行目の後半が母音 o による繰り返し韻になっている。おそらく行の大部分が繰り返し韻になっているので、行頭母音を踏まずにすませているのであろう。本来は、

Yuk top**a**  
ran **na**  
Cipes**oro**  
soro **hoy**

のような脚韻優位の4行形式だったとも考えられる。

ただし、丹菊逸治 (2018 : 42) で提案したように半子音 y が母音 i と押韻、つまり yuk の y と cipesoro の i が行頭母音を踏んでいる可能性もある。

### 7-7. 行頭に母音韻も繰り返し語句も持たないウポポ6歌のまとめ

以上、行頭に母音韻も繰り返し語句も持たない6歌の詩法を確認した。その結果は以下である。

表3.

特徴 資料番号 (楽譜番号)	4行形式 で母音韻	行頭 交差配列	行頭 不完全韻
26 (楽譜 1)			
27 (楽譜 22)	○		
28 (楽譜 28)		○	
29 (楽譜 33)			○
30 (楽譜 120)			
32 (楽譜 159)			

4行詩形式と解釈すると行頭母音で押韻しているものが1歌ある。次に、行頭母音を巻き込んだ交差配列を持つものが1歌、行頭母音を巻き込んだ不完全韻を持つものが1歌ある。これら3歌は「行頭母音がかかわる押韻」がなされているわけである。したがって、行頭母音がかかわる押韻現象が全くみられないものは3歌、すなわち資料26 (楽譜番号1 本書 p43)、資料30 (楽譜番号120 本書 p49)、資料32 (楽譜番号159 本書 p51) だけである。

## 9. 第1章の結論

NHK (1965) のウポポ資料 159 例で行頭押韻の確認を行った。行頭における母音の一致は偶然より高い比率 (153 例 96.2%) で生じていて、作為的な押韻が行われている可能性が高い。行頭における母音の一致がみられないものは 6 例 (3.8%) あるが、うち 3 例には行頭母音がかかわる別種の押韻が用いられている。いかなる意味でも行頭部に押韻を持たないのは 3 例 (1.9%) のみである。

このように NHK (1965) のウポポ資料にかんするかぎり、偶然とは思えない高い比率 (156 例 98.1%) で押韻が確認できた。

## 第2章 アイヌ叙事詩の詩連構造・行頭母音韻・不完全韻

### 概略

平賀サタモによって1959年に語られた叙事詩には、①3・4行詩連を中心とする詩連構造がある。②4行詩連には偶然生じる確率(88.6%)より高い比率(94.3%)で行頭母音韻がある。③主として詩連内部の不完全韻が全体の半数以上の行で確認できる。

### 1. 目的

叙事詩の例として平賀サタモ<sup>21</sup> ([1959]1993) をとりあげ、同テキストにおける、1. 詩連構造の存在 2. 行頭母音韻その他の押韻の存在 3. 不完全韻の存在 を検証する。

この叙事詩作品は、北海道鶴川町生まれの平賀サタモ(1895年頃～1972)によって1959年に語られ、それを言語学者田村すゞ子が録音したものである。田村すゞ子は1963年に文字化作業を終え、1993年に文字テキストが録音資料とともに公刊された<sup>22</sup>。公刊されたテキストには語り手平賀サタモによる注釈がほどこされている(一部の文言の修正、行の追加など)。本稿では原則として録音資料の分析を行う。田村すゞ子・平賀サタモ(1993)掲載の加筆修正されたテキストと区別するために、録音資料(の文字化テキスト)を「平賀サタモ([1959]1993)」とする<sup>23</sup>。なお、本来はアイヌ口承文芸作品に題名はないが、田村すゞ子は「村焼き国焼き」(アイヌ語 Kotan sitcire Mosir sitcire) という題を付している。

平賀サタモ([1959]1993)のローマ字表記は必ずしも田村すゞ子・平賀サタモ(1993)と同じではない(聞き起こし自体が異なることもある)。また、訳は田村すゞ子・平賀サタモ1993を参考にしているが丹菊による試訳である。u, epなどの虚辞はそのまま示してある(ただし文頭でも小文字のままにしてある)。行を例示する際には田村すゞ子・平賀サタモ(1993)で付された行番号を4桁の数字で行頭に付した。

---

<sup>21</sup> 田村すゞ子(1996:付録頁22)では「平賀サダ」として写真入りで掲載され、さらに「アイヌ名 Satamo サタモ、通称サダモ」としている。田村すゞ子編による刊行物では署名等に「サダモ」として表記されているが、ここではアイヌ語形として掲載されている「サタモ」を用いることにした。

<sup>22</sup> 2020年3月現在で早稲田大学リポジトリ <https://waseda.repo.nii.ac.jp/> からテキスト本および録音資料が公開されている。リポジトリで公開されているテキストは1993年の刊行物の撮影画像であり、物語本文のみで解説部分は含まれていない(図書館等に収蔵されている印刷版を参照されたい)。公開されている録音はmp3フォーマットである。

<sup>23</sup> この録音資料には文字資料と異なりエディションの差は存在しないため録音時の年号を付すことにした。

## 2. 平賀サタモによる 1959 年の語りにおける「行」

### 2-1. アイヌ韻文体の「行」

アイヌ民族の叙事詩は朗唱されるものである<sup>24</sup>。upopo ウポポを始めとする伝統歌謡（叙事詩）、リフレインを持つ神謡（oyna オイナ、kamuyyukar カムイユカラ）、叙事詩（yukar ユカラ、sakorpe サコロペ）、神への祈り（kamuy nomi カムイノミ）など、口頭伝承（あるいは口承文芸）ジャンルによって歌い方は少しずつ異なるが、基本的にはいずれも朗唱である。つまり、歌詞（言語音）が重要であり、歌詞に合わせて音の高低パターン（いわゆる「旋律」だが、器楽の曲とは異なり、歌詞つまり言語音から独立したものではない）が作られている。叙事詩の朗唱の際には、同じ持続時間を持つ一定の高低パターンが繰り返されるが、その単位を研究者は「句」「行（ぎょう）」などと呼んできた<sup>25</sup>。本稿ではアイヌ韻文体を詩形式としてとらえ「行」と呼んでおく。

### 2-2. 1 行の音節数

アイヌ叙事詩の 1 行の音節数はさまざまである。とはいっても、ウポポとして複数人数で声を合わせて歌うためには、各行の音節数が一致しているほうが歌いやすい<sup>26</sup>。したがって、歌い方にもよるが、各行の音節数はだいたい同じである<sup>27</sup>。

一方、叙事詩は一人で歌うものであり、各行の音節数は一定ではない。だが、叙事詩を歌う際に用いられる repni レプニと呼ばれる拍子棒を叩くタイミングに収まっている必要がある。そのため基本的には 1 行の音節数は 4 から 7 に収まっている。このことは従来から指摘されており、5 音節の行が多いため「1 行 5 音節」が基本とみなされてきた<sup>28</sup>。平賀サタモ（[1959]1993）においても、虚辞を含めれば全 1151 行中 1018 行（88.4%）、虚辞

---

<sup>24</sup> 散文調で語られることもある（rupaye ルパイェ）が、本稿では朗唱（sakoye）されたものを扱う。Philippi（[1979]1982：39）によれば、散文調の語りは本来は朗唱の前に準備される非公式のものである。

<sup>25</sup> 金田一京助（[1908]1992：18）では「句」と呼んでおり、久保寺逸彦（1977：23）でも「聖伝」（叙事詩とほぼ同じ形式のもの）に関して「句」という語を用いている。

<sup>26</sup> 金田一京助（[1908]1992：46）は 2 行単位で音節数がそろえられることを指摘している。また、金田一京助（[1933]1992：296）「七音節のような長句が来る場合には、すぐ次の句も七音節ぐらいの長さの句をもって対にする」

<sup>27</sup> sintoko シントコと呼ばれる漆器（日本から輸入された「行器」）の蓋などを叩いて歌うが、その際には 1 打あたり 2 音節が基本である。

<sup>28</sup> 金田一京助（[1933]1992：295）「その一口一口はたいていみな同じほどの五音節前後、短くて四音節、長くて六音節を止まりとし」



を含めなければ 763 行 (66.3%) が 5 音節行である。

歌う際には、最後の 2 音節の長さは 1 行の音節数にかかわらず決まっており、残りの音節が前半部にほぼ均等に配分される。ウポポを歌う際にシントコの蓋などを叩いて拍子をとることを「打」と呼ぶのと同様に、レプニを叩くタイミングを「打」と呼ぶ (記号●で表すこともある)。

例 1. 1129 anan korka アナンコロカ (4 音節)

歌	a	nan	kor	ka	
レプニ	●		●		

例 2. 0001 iresucasi イレスチャシ (5 音節)

歌	i	re	su	ca	si	
レプニ	●			●		

例 4. 0068 kaparpe otcike カパラペオッチケ (6 音節)

歌	ka	par	pe	ot	ci	ke	
レプニ	●				●		

例 5. 0422 ki ruwe tas ta pan nek

歌	ki	ruwe	tas	ta	pan	nek	(7 音節)
レプニ	●				●		

上記例 1～5 で、レプニ第 1 打に含まれる音節数は、それぞれ 2、3、4、5 だが、レプニ第 2 打に含まれる音節数は常に 2 である。そして第 1 打はそれぞれ原則として均等に 2 分割、3 分割、4 分割、5 分割されて、そこに 1 音節ずつが配分されるのである<sup>29</sup>。

---

<sup>29</sup> したがって、アイヌの伝統歌謡・朗唱について「拍子」という概念の有効性には限界がある。「5 音節行の第 1 打は 3 拍子、第 2 打は 2 拍子である」などと分析するのは適切ではない。

### 2-3. 1行の最大音節数

平賀サタモ ([1959]1993) では1行の音節数は最大で7音節である。上に示したように、レプニ2打目には持続時間に余裕があるので、1打目と同じように5音節を押し込めれば理論的には全体で10音節まで入るはずである。しかし実際にはそのように歌われることはない<sup>30</sup>。1行は最大7音節に決められている。

1行の音節数が最大7音節になっているのは、おそらくアイヌ語の言語構造を反映したものである。田村すず子 (1996) は、平賀サタモも多大な協力をした沙流方言辞書であり、口語も多く反映しているが、その見出しの音節数ごとの単語数を示せば以下のようなになる。

表1. 田村すず子 (1996) の見出し語における1～10音節語の数

音節数	単語数	比率※	比率 (累計)
1	647	6.8%	6.8%
2	2032	21.2%	28.0%
3	2623	27.4%	55.4%
4	2304	24.1%	79.4%
5	1377	14.4%	93.8%
6	389	4.1%	97.9%
7	145	1.5%	99.4%
8	39	0.4%	99.8%
9	15	0.2%	99.9%
10	5	0.1%	100.0%
合計		100.2%	

5音節までで全見出し語の93.8%、7音節までで99.4%が含まれる。8音節以上の語はわずか0.6%しかない。これは Philippi (1979: 30) が指摘する「1単語で1行を構成する」という志向と関連しているであろう<sup>31</sup>。どうしても8音節以上になった場合には2行に折り返すことも可能である<sup>32</sup>。叙事詩で用いられる1人称叙述形式を考慮しても1人称接辞 a=ア「私」という1音節が追加されるだけである（実際にはゼロ人称の3人称形式や、人称の付かない不定詞用法も多い）。

<sup>30</sup> これは韻律と関係していると思われるが、それについては今後の課題としたい。

<sup>31</sup> 金田一京助が「行」と呼ばずに「句」と呼んだのも、このためかもしれない。

<sup>32</sup> Philippi (1979: 30) はこういったいわゆる「行またがり」の多さも指摘している。

## 2-4. 1行の単語数

平賀サタモ ([1959]1993) の1行の平均単語数は2.2語である。これは Philippi (1979: 30) による「1行につき動詞または名詞が1単語」という指摘と合致するように思われる。アイヌ叙事詩は一般に短い修飾語句や接続詞などがついた名詞や動詞 (=名詞句や副詞句) が1行を構成する。そのため、単音節からなる動詞に意味を変えない接辞がついて音節数が増やされる、という技法が発達している。例えば、san サン「下りる」や ran ラン「下りる」という単音節語1語の代わりに接辞を足したり語幹重複をしたりして、ci-san-a-san-ke チサナサンケ<sup>33</sup>「下りる」や ci-ran-a-ran-ke 「下りる」という5音節語を派生させて用いる、などの例である<sup>34</sup>。これは常に起こるのではなく、san サン「下りる」などの1語が1行にあたってしまう場合のみに起こる。例えば、

例6      0491      u san=an hike      ウ      サナンヒケ 「下りたのだが」(u は虚辞)

例7      0288      san hum konna      サンフムコンナ 「下りる音は以下のごとく」

など接続詞や他の単語が後続する場合にはそのまま san が用いられる。たんに1行の音節数を増やしたいだけなら、次の単語を同じ行に入れてしまえばよいのだが、Philippi が指摘する「1行1単語志向」があるからこそ、それをせずに1単語の音節数を増やすのである。

ただし、叙事詩文体における「単語」の定義は若干問題を含んでいる。口語とは異なり、単語境界が確定しにくい例がみられるからである。本稿では、これらの例についても人称接辞 a=から動詞語幹までを1単語とみなしておく。

---

<sup>33</sup> cisanasanke という語自体は平賀サタモ ([1959]1993) では用いられていないが、田村すゞ子・平賀サタモ (1993: 53) では第628行 u puspa kane の修正として現れている。

<sup>34</sup> ciranaranke の例は中川裕 (1997: 205) による。

### 3. アイヌ叙事詩の「詩連」構造

#### 3-1. 2行からなる対句や定型表現

アイヌ叙事詩に2行あるいは4行からなる定型表現があることは金田一京助（[1908]1992:18）以来、繰り返し指摘されてきた。Philippi（1979）は最もまとまった記述である<sup>35</sup>。ここでは定型表現の全体像の記述を試みることはしないが、行数と関連させて例示しておく。

最も多く見られるのは2行の対句である。

例 8	0012	Sikari cup noka	「満月の模様」
	0013	u Nin cup noka	「三日月の模様」

例 9	0071	Otu kesto ta	「2日の間」
	0072	Ore kesto ta	「3日の間」

2行にまたがる表現が対句になり、全体として4行の定型表現になっている場合もある。

例 10	0178	Ekimun kiroru	山へ向かう道は
	0179	sinna kane	また別に
	0180	Episun kiroru	浜へ向かう道は
	0181	sinna kane	また別に

例 11	0364	Kotan sitcire	村を焼き
	0365	Mosir sitcire	国を焼く
	0366	San ka tososo	棚を荒らし
	0367	Oypepi poro	その椀が大きい

4行からなる定型表現は、それだけで一つの文章となっている場合がある。

例 12	0382	Itak turano	その言葉とともに
	0383	iyonuytasa	今度は
	0384	itak kutcama	言葉の喉の響きが
	0385	uwetunuyse	金属音のように美しく響く

<sup>35</sup> 中川裕（1997）でも Philippi（1979）を増補する形で分類が試みられている。

並行的な表現の3行からなる定型句もあるが、極めてまれである。平賀サタモ([1959]1993)には次の1例しかない。

例 13	0646	Kamuy cipanup	神の鉢巻き
	0647	Kamuy ninkari	神の耳環
	0648	Kamuy tamasay	神の首飾り

3行にまたがる表現が対句になった合計6行の定型表現もある。

例 14	0511	u Tuyma uk pe	遠くに草を食むときは
	0512	kokirawsika	角を背中に
	0513	omare kane	当てながら
	0514	u Hanke uk pe	近くに草を食むときは
	0515	kokirawriki	角を上
	0516	roski kane	立てながら

### 3-2. 詩連

金田一京助以来のアイヌ語・アイヌ文学研究においては、対句や定型表現は他の「地の文」とは異なる特別な部分であり、それら定型表現だけが局地的に「3行のかたまり」(3行詩連)や「4行のかたまり」(4行詩連)をなしている、とみなされてきた<sup>36</sup>。しかし、それ以外の部分も何らかの単位、少なくとも「文」という単位が連なって構成されているはずである。あるいは複数の文が集まったり、長い文は複数の部分に分かれていたり、といったことが考えられるはずである。そして実際に、叙事詩は全編にわたってかなり明確で長さがそろった数行単位の文章・句で構成されている。本稿ではそれらを「詩連」と呼ぶ。

平賀サタモ([1959]1993)の冒頭部は、次のような詩連構造になっている<sup>37</sup>。

---

<sup>36</sup> 金田一京助、久保寺逸彦らは定型表現の構造については指摘しているが、それ以外の部分の構造についてはほとんど言及していない。Philippi もやはり定型表現(formula)の分類を試みているが、それ以外の部分がどのような単位で構成されるかについてはあまり明確に示していない。アイヌ叙事詩の定型表現とそれ以外の部分の関係については、モンゴル叙事詩に関する藤井麻湖(1997)の研究が示唆的だと思われるが、別稿に譲りたい。

<sup>37</sup> 筆者の管見ではアイヌ口承文芸についてこのように数行ごとに区切る表記を初めて積極的に採用したのはPhilippi([1979]1982)である。ただし、Philippiはその区切りが何を意味するのか必ずしも明確には示していない。

## 例 15

0001	Iresu casi	私が育てられた砦
0002	tan poro casi	この大きな砦が
0003	<b>cisireanu.</b>	建っていた。
0004	Iresu sapo	私の育ての姉が
0005	irespa ki wa	私を養育して
0006	okaan katu	暮らしていた様は
0007	<b>anomommomo.</b>	省略する。
0008	u Pakno ne kor	それはそれとして
0009	u casi kotor	砦の天井が
0010	koyaykan ruwe	飾られていたのは
0011	<u>ene oka hi,</u>	このようである。
0012	Sikari cup noka	満月の模様や
0013	u nin cup noka	欠けたる月の模様が
0014	<b>earuwato.</b>	満ち満ちている。
0015	u Emko kusu	そのため
0016	u casi upsor	砦の内側は
0017	u tonon suku	昼の光が
0018	cieomare	入ってくる
0019	u semkoraci	かのように
0020	u casi upsor	砦の内側は
0021	<b>enipekooma.</b>	輝いていた
0022	u Pakno ne kor	そこまでとして
0023	kamuy iyoykir	神の宝物
0024	kamuy inuma	神の武具が
0025	u ran pes kunne	低い崖のように
0026	<b>cisiturire</b>	伸びていた
0027	Iyoykir enka	宝物の上に
0028	u nispa mut pe	英雄の佩刀が
0029	otu santuka	何本もの柄が
0030	<b>uowkauyru.</b>	重なっていた。

0031	Ukopusakur-	たくさんの房が
0032	<u>u -suy</u> pa kane.	揺れながら。
0033	Iyoykir ka ta	宝物の上には
0034	tapan pe rekor	名付けて
0035	kamuy hayokpe	神の鎧
0036	u siknu pito ne	生きている神のように
	(*0037 siknu kamuy ne	生ける霊として) ※この行は録音時にはない
0038	<u>u an</u> kane	ありながら。

これらの詩連は、基本的に文もしくは独立性の高い節と一致し「動詞が最後に後置される」というアイヌ語の語順に合わせて動詞で終わるか、動詞の後に終助詞もしくは強い区切りを示す kane などの接続詞が置かれている。

(1) 0003 **cisireanu**、0007 **anomommomo**、0014 **earuwato**、0021 **enipekoma**、0026 **cisiturire**、0030 **uowkauyru** はいずれも述部をなす動詞である。

(2) 0011 ene oka hi 「それは次のようである」は文法的には形式名詞で終わっているが、以下に直接話法を導入するため強い区切りの機能がある<sup>38</sup>。

(3) 0031 Ukopusakur- と 0032 u -suypa kane は「行またがり」の 1 語の動詞 ukopusakursuy<sup>pa</sup> 「たくさんの房が揺れる」と接続詞 kane 「～しながら」、0038 u an kane 「ありながら」はともに接続詞 kane 「～しながら」で終わっている。叙事詩においては強 kane を含めいくつかの接続詞は多くの場合終助詞とほぼ同じ機能を有している<sup>39</sup>。

接続詞 kane でつながれた 2 つの文は互いに独立性が高く、田村すゞ子・平賀サタモ(1933)でも、日本語訳においてしばしばそこで文を切っている。そのほかに hike、awa、kusu、p/pe など強い区切りを示す。

### 3-3. 独立性の高い関係修飾節・4行対句

主節と接続詞で導かれる従属節が 2 つの文とみなし得るだけでなく、長い関係修飾文に

<sup>38</sup> Philippi (1979: 38) は ene oka hi で終わる数行単位を「直接話法に関する formula」と分類している。

<sup>39</sup> 叙事詩においてしばしば接続詞が文末詞のように用いられている。藤井麻湖(1997: 116) はモンゴル叙事詩について同じような現象を指摘している。

おいても修飾部と被修飾部の独立性は高い。それらは別々の詩連をなしている可能性がある。また、逆に短い文が2つで一つのまとまりになっている例もみられる。それらも詩連をなしている可能性がある。

### 3-3-1. 独立性の高い関係修飾節による詩連

．長い関係文においては関係修飾節（連体修飾節）と被修飾節が別の詩連になる。

例 16	0879	u ki wa ne kor	そこで
	0880	u nen ta usa	誰が
	0881	u respa ciki	育てたら
	0882	u pirka kuni	よいような
	0883	kamuy opoysan	神の子孫
	0884	kamuy hekaci	神の子供
	0885	u ne nankora	であろうか

### 3-3-2. 4行からなる対句による詩連

2行が2組で4行対句となっている場合は、それだけで1つの詩連になる。

例 17	0657	Kamuy tamasay	神の首飾りを
	0658	o rekutuyruke.	首にかけた。
	0659	Kamuy ninkari	神の耳輪を
	0660	kisar uyruke.	耳につけた。



### 3-4. 詩連構造があいまいな例

次に示すような 7 行詩連を例えば「\*」で示した位置で分割するのはおそらく適切ではないであろう。今後、このような位置で詩連を区切る要素が見つかるかもしれないが、今のところ区切りが明確なのは kane などの接続詞で明確に区切られている場合である。

例 18	0015	u Emko kusu	そのため
	0016	u casi upsor	砦の内側は
	0017	u tonon suku	昼の光が
	0018	cieomare	入ってくる
		*	
	0019	u semkoraci	かのように
	0020	u casi upsor	砦の内側は
	0021	enipekoma.	輝いていた

また、次のような 6 行も、形式的（文法的）には 6 行で 1 文とみるか、3 行文と 2 行文とみるかあいまいである<sup>40</sup>。意味の連続性からみれば、おそらく以下のように「\*」で示した位置で分割すべきではない。

例 19	0033	Iyoykir ka ta	宝物の上には
	0034	tapan pe rekor	名付けて
	0035	kamuy hayokpe	神の鎧
		*	
	0036	u siknu pito ne	生きている神のように
	0038	u an kane	ありながら。

---

<sup>40</sup> 形式的（文法的）には 0034 tapan pe rekor kamuy hayokpe の後ろに動詞 ne が必要である。ne が省略された破格とみることもできるし、0038 u an kane の an まで 1 文であるとみなすこともできる。

ただし、田村すゞ子・平賀サタモ（1993：13）では平賀サタモ本人が5行文の 0036 u siknu pito ne「生きている神のように」の後ろに以下のように 0037 siknu kamuy ne「行ける霊として」を追加するのが正しい、と修正を加えている。その場合は対称性からみても4行文と2行文と解釈すべきかもしれない。

例 20	0033	Iyoykir ka ta	宝物の上に
	0034	tapan pe rekor	あるものは名付けて
	0035	kamuy hayokpe	神の鎧
		*	
	*0037	siknu kamuy ne	生きている霊のように（この行は録音時にはない）
	0036	u siknu pito ne	生きている神のように
	0038	u an kane	ありながら。

また、その場合には 0027 から 0038 までの 12 行が以下のように対称性を持った一連の表現として4詩連になっているとみるべきなのかもしれない。

例 21	0027	Iyoykir enka	宝物の上に
	0028	u nispa mut pe	英雄の佩刀が
	0029	otu santuka	何本もの柄が
	0030	<b>uowkauyru.</b>	重なっていた。
	0031	Ukopusakur-	たくさんの房が
	0032	<u>u -suypa kane.</u>	揺れながら。
	0033	Iyoykir ka ta	宝物の上には
	0034	tapan pe rekor	名付けて
	0035	kamuy hayokpe	神の鎧（があった）。
	0036	u siknu pito ne	生きている神のように
	*0037	siknu kamuy ne	生きている霊のように（この行は録音時にはない）
	0038	<u>u an kane</u>	ありながら。

### 3-5. 1 詩連の行数

平賀サタモ ([1959]1993) という叙事詩テキスト全体は、1~7 行からなる詩連 (文もしくは節) を単位として構成されている。詩連数は合計 310 詩連である。1 行から 7 行詩連までの各行数の詩連の出現比率は以下のようになっている。

表 2. 平賀サタモ ([1959]1993) の各種詩連の数と割合

行数	詩連数	比率
1	2 (結句「pakno」を含む)	0.6 %
2	47	15.1 %
3	87	28.1 %
4	104	33.5 %
5	48	15.5 %
6	16	5.2 %
7	6	1.9 %
合計	310	99.9 %

3 行詩連・4 行詩連が 6 割強を占める。もっとも数が多いのは 4 行詩連である。4 行単位の定型表現の存在を考え合わせると、この叙事詩文体には 4 行で 1 文となる強い志向があると見てよい。

#### 4. 平賀サタモの1959年の語りにおける押韻出現数

##### 4-1. 4行詩連における頭脚韻

平賀サタモ ([1959]1993) の冒頭部には以下のような「単語の繰り返し」と「音の一致」がみられる。

例 22	0001	<b>Iresu casi</b>	私が育てられた砦
	0002	tan poro <b>casi</b>	この大きな砦が
	0003	<b>cisireanu.</b>	建っていた。
	0004	<b>Iresu sapo</b>	私の育ての姉が
	0005	<b>irespa ki wa</b>	私を養育して
	0006	okaan katu	暮らしていた様は
	0007	anomommomo <b>.</b>	省略する。
	0008	u <b>Pakno ne kor</b>	それはそれとして
	0009	u <b>casi kotor</b>	砦の天井が
	0010	koyaykan ruwe	飾られていたのは
	0011	ene oka hi,	このようである。
	0012	<b>Sikari cup noka</b>	満月の模様や
	0013	u <b>nin cup noka</b>	欠けたる月の模様が
	0014	earuwato.	満ち満ちている。

これらのうち、音のみの一致はいわゆる「押韻」の可能性がある。しかし、アイヌ語の母音数は5つであり、叙事詩の「詩連」内において行頭や行末で母音が一致しても、ほとんどは偶然の産物であろう。

結論を先に言えば、実際の行頭行末の母音押韻の数は、偶然生じる確率をわずかながら上回っている。つまり「偶然生じる母音押韻を生かすが、なるべく多く押韻せよ（ただし、押韻しない詩連があってもよい）」というルールだと考えられる。それがアイヌ語の叙事詩における母音韻である。これは Philippi ([1979]1982:29) の「義務的ではないが、意識的に用いられている」という説明と合致する。以下では詩連の行頭母音の押韻について、出現数の多い順に4行詩連・3行詩連・2行詩連については概略を、7行詩連・6行詩連については全例を検証する。行末母音についてはデータのみ示す。

#### 4-1-1. 4行詩連(104連)における行頭母音韻出現数

4行詩連における行頭母音韻の種類は以下の5通りである。

- ① 「2行のみ」: 4行中2行の行頭が同じ母音、残りの行頭母音がそれぞれ別の母音
- ② 「2行2組」: 4行中2行の行頭が同じ母音、残りの行頭母音が別の母音で一致
- ③ 「3行のみ」: 4行中3行で行頭が同じ母音
- ④ 「4行一致」: 4行全ての行頭が同じ母音
- ⑤ 「4行全相違」: 4行全ての行頭が違う母音

各母音が同じ確率で行頭に来るとき、これらの一致が偶然生じる可能性は以下である。

表3. 4行詩連の行頭で各種押韻が偶然生じる確率(各母音の出現比率が同じ場合)

押韻種別	確率 (%)
2行のみ	57.6
2行2組	9.6
3行のみ	12.8
4行一致	0.8
4行全相違(押韻なし)	19.2
合計	100

アイヌ語は5母音の言語であるため、並んだ4行において行頭・行末で母音が一致する確率は非常に高く、偶然に任せても8割を超える。したがって詩連内部における行頭の「押韻」の多くは自然に生じたものであろう。しかし、それに加えて意図的に押韻がなされてもいるとすれば、比率は偶然によるよりその分だけ高くなるはずである。

平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連における行頭母音押韻の数と比率は以下である。

表 4. 平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連の行頭母音韻の数と比率

押韻種別	出現数	比率	偶然生じる確率
2 行のみ	56	53.8 %	57.6
2 行 2 組	11	10.6 %	9.6
3 行のみ	29	27.9 %	12.8
4 行全一致	3	2.9 %	0.8
4 行全相違 (押韻なし)	5	4.8 %	19.2
合計	104	100 %	100

実際には、行頭での出現数が多い母音と少ない母音がある。例えば母音 u は行頭での出現数が少ない (虚辞の u を除く)。平賀サタモ ([1959]1993) における各母音の数と比率は以下のようにになっている<sup>41</sup>。

表 5. 平賀サタモ ([1959]1993) 全 1151 行における母音出現率

母音	行頭	行末	最後から二番目	参考：全母音
a	404 (35.0%)	323 (28.1%)	448 (38.9%)	1841 (33.0%)
e	221 (19.2%)	307 (26.7%)	155 (13.5%)	1099 (19.7%)
i	261 (22.7%)	167 (14.5%)	128 (11.1%)	864 (15.5%)
o	178 (15.5%)	199 (17.2%)	223 (19.4%)	982 (17.6%)
u	87 (7.6%)	155 (13.5%)	197 (17.1%)	799 (14.3%)
合計	1151 (100%)	1151 (100%)	1151 (100%)	5585 (100.1%)

平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連 (586 行 104 詩連) における行頭母音の出現数も全 586 とほぼ同様に、a (136[32.7%])、e (81[19.5%])、i (102[24.5%])、o (69[16.6%])、u (28[6.7%]) である。それを考慮すると、全母音が同じ比率で出現する場合とは、押韻が偶然に生じる確率が変わる。実際の一致の出現数・比率は以下である。

<sup>41</sup> 最後から 2 番目の音節は母音 a が 38.9% であり、最終音節より多めである。これは作為が全くなくとも「同じ音になりやすい」ということである。最終音節でなく、この位置 (最後から 2 番目) の音節が叙事詩を歌う際にもっとも明瞭に歌われる個所であることは偶然ではないのかもしれない。

表5. 平賀サタモ ([1959]1993) 4行詩連 (586行 104詩連) において、各母音の出現比率を考慮した上での偶然による押韻の出現確率と実際の出現数

押韻種別	実際の出現数 (比率)	偶然生じる数 (確率)
2行のみ	56 (53.9%)	57.0 (54.9%)
3行のみ	29 (27.9%)	18.5 (17.9%)
2行2組	11 (10.6%)	12.1 (11.7%)
4行全一致	3 (2.9%)	1.8 (1.7%)
4行全相違 (押韻なし)	5 (4.8%)	14.4 (13.9%)

これらのうち「押韻しない」のは「4行全相違」の場合だけであり、偶然で14.4%生じるはずだが、実際には4.8%である。つまり、意図的でなくとも86.1%で押韻するはずだが、実際には95.2%で押韻している。もともと一致する可能性が高いとはいえ、わずかながら意図的な押韻もあると考えてよいだろう。

#### 4-1-2. 繰り返し語を除外した場合の行頭母音出現数

ウポポなど叙景詩と長大な叙事詩では文体に違いがあり、前者にはかけ声など繰り返し語句が非常に多いのに対して、後者ではそれらは少ない。NHK (1965) のウポポ 159 歌中で繰り返し語句を含まないものはわずか8歌である。ウポポに「押韻」はあるにせよ、その数字が「繰り返し語句」によって結果的に押し上げられているのも確かである<sup>42</sup>。

叙事詩にも少ないにせよ「繰り返し語」が存在する。比率を検証する上では、「叙事詩においても繰り返し語が多いために一致率が高くなっているのであって、押韻ではないのではないか」という疑問が生じるであろう。結論を先にいえば、繰り返し語によって一致率が高くなっているわけではない。以下は検証である。

104 詩連のうち 17 例では複数行の行頭に同一の単語・名詞形態素が置かれている。これらは「押韻」というよりも繰り返し語による一致である。例えば

例 24	0067	<b>Kaparpe</b> itanki	上等なお椀
	0068	<b>kaparpe</b> otcike	上等なお膳を
	0069	uwoeroski	並べてくれた、
	0070	ikoypunpa	私に供してくれた。

<sup>42</sup> 「繰り返し語句」と「押韻」は、原理的には同じく「繰り返しの感覚をもたらす技法」である。人類史的には「押韻」はユーラシア大陸の一部で発達した特殊な技法なのであろう。世界的には「繰り返し語句」だけによる歌謡のほうが広く分布している。

において、kaparpe「上等な」という同じ単語が繰り返されている。また、

例 25	0539	Ikootuyma	遠くから私に対して
	0540	u <b>sikkeruru</b>	眼を見開き
	0541	u <b>siktokoko</b>	眼をむき出している
	0542	aruska kusu	私は腹を立てて <sup>43</sup>

において、**sikkeruru** と **siktokoko** は同一の名詞形態素 **sik**「目」を繰り返し用いている。これら、一部が異なるほぼ同じ語句を用いる修辞は押韻と非常に似た現象であるが、厳密に言えば押韻ではない。これらは「同じ意味であるからこそ対句になっている」のであり、意味と音形のどちらが重要なのか不明である<sup>44</sup>。しかし、アイヌ語は単音節語基を多数つなげて 1 単語とする総合的な言語であり、その結果出来上がる単語において内部の語基の意味が本来とはかけ離れてしまっていることも多い<sup>45</sup>。本稿では便宜的に「独立語としても用いられる語基を語頭に含んでいるか否か」を基準として、その一致は押韻ではなく繰り返し語として扱う。o-re A/o-tu A、という対句や、iresu「育てる（単数形）」と irespa「育てる（複数形）」など語頭が同じ単複交替形などの一致は「繰り返し語句」であり、a-などの人称接辞や自動詞化接頭辞 i-, ko-, e-など充当接頭辞、名詞的であっても独立した名詞形を持たない si-, yay-, mon-などの一致は「押韻」として扱う。

---

<sup>43</sup> この詩連は次の詩連との境界があいまいである。ikootuyma（副詞）、sikkeruru（動詞）、siktokoko（動詞）の 3 行で文が終わっており、最終行 aruska kusu「私は腹を立てて」を次の詩連の冒頭行とみなすこともできる。しかし、意味的には sikkeruru と aruska kusu の間は強く結びついており形式的に混乱している。sikkeruru/siktokoko という対句形式をとったために、その後ろに aruska kusu に形式的につながる形態素を置きづらくなってしまっている（本来の文としては sikkeruru hi aeruska kusu などが考えられる）。

<sup>44</sup> これについては今後の課題としたい。

<sup>45</sup> 例えば irankarapte「ご挨拶申し上げます」がどのような語基からなっているかなどは、すでに分からなくなっている。



押韻は「行頭における一致」のうち「繰り返し語による一致」を除いたものである。そのような一致を含む詩連は 87 例ある。その内訳を示すと以下のようになる。

表 7. 平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連の押韻 (繰り返し語句による一致を除く)

押韻種別	実際の出現数 (比率)	偶然生じる確率
2 行のみ	47 (54.0%)	47.1 (54.1%)
3 行のみ	24 (27.6%)	16.3 (18.7%)
2 行 2 組	8 (9.2%)	11.8 (11.7%)
4 行全一致	3 (3.4%)	1.7 (2.0%)
4 行全相違 (押韻なし)	5 (5.7%)	11.7 (13.4%)
合計	87 (99.9%)	88.6 (99.9%)

意図的でなくとも 86.5% で押韻するはずだが、実際には 94.2% で押韻している。つまり、繰り返しによらなくても、やはり高めのポイントになっている。

#### 4-1-3. 4 行詩連における行頭子音韻出現数

叙事詩における「行頭子音韻」は出現に偏りが大きく、偶然か作為かを考えるのは困難である。平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連 586 行のうち行頭子音が声門閉鎖音である (いわゆる母音始まりである) 行が 201 行 (34.3%) と約 3 分の 1 である<sup>46</sup>。行頭子音韻を踏む 4 行詩連は 30 例 (4 行詩連全体の約 29%) ある。行頭子音韻の出現比率は偶然生じる確率と比して大きく異なることはないが、「3 行のみ一致」している例が多めに生じている。偶然 2 行のみ一致しているものを工夫したのかもしれない。

表 8. 平賀サタモ ([1959]1993) の 4 行詩連における行頭子音一致の出現数

押韻種別	実際の出現数 (比率)	偶然生じる確率
2 行のみ	23 (22.1%)	27.3 (26.9%)
2 行 2 組	0 (0%)	0.4 (0.4%)
3 行のみ	7 (6.7%)	2.5 (2.4%)
4 行全一致	0 (0%)	0.1 (0.1%)
4 行全相違 (押韻なし)	74 (71.2%)	73.1 (70.3%)
合計	104	103.4 (100.1%)

<sup>46</sup> ただし、アイヌ伝統歌謡においては 4 行すべてが声門閉鎖音始まり (母音始まり) の歌がいくつか存在する。丹菊逸治 (2018)

なお、全 1151 行中、母音始まり（声門閉鎖音始まり）の行は 504（43.8%）、子音始まりの行は 647（56.2%）であり、ほぼ半数だが子音始まり行が若干多い（4 行詩連 104 連 416 行中ではそれぞれ 201（48.3%）と 215（51.7%）であり比率はほぼ同じだが、やはりほんのわずかに子音始まり行のほうが多い）。以下に子音の内訳とともに示す。

表 9. 平賀サタモ（[1959]1993）全 1151 行および 4 行詩連 416 行における行頭音数と比率

	全行（数）	全行（比率）	4 行詩連（数）	4 行詩連（比率）
p	44	3.8 %	9	2.2 %
t	70	6.1 %	24	5.8 %
k	205	17.8 %	76	18.3 %
h	39	3.4 %	12	2.9 %
m	34	3.0 %	7	1.7 %
n	67	5.8 %	25	6.0 %
r	30	2.6 %	11	2.6 %
s	84	7.3 %	33	7.9 %
c	46	4.0 %	12	2.9 %
w	3	0.3 %	0	0.0 %
y	25	2.2 %	6	1.4 %
母音（声門閉鎖音）	504	43.8 %	201	48.3 %
子音	647	56.2 %	215	51.7 %
合計	1151	100 %	416	100 %

#### 4-1-4. 行頭母音韻・繰り返し語句を持たない4行詩連

平賀サタモ ([1959]1993) の4行詩連104例において、行頭母音韻（繰り返し語句によるものを含む）の出現率は99例95.2%、行頭子音韻を含めると行頭韻出現率は、103例99.0%、行頭に押韻・繰り返し語句を全く持たない4行詩連はわずか1例1%にすぎない。

NHK (1965) に収録された159歌のウポポにおいては、行頭押韻母音韻（繰り返し語句によるものを含む）の出現率は153歌96.2%、行頭母音が関わる不完全韻などを含めると156歌98.1%が押韻している。つまり、ウポポにおいても叙事詩の4行詩連においても、押韻の出現率は偶然によるよりも高くなっている。

行頭の母音が全て異なる4行詩連は以下の5例である。

資料1	0079	<u>u</u> Sirka nuye	ナイフの鞘の彫刻
	0080	<b>t</b> omika nuye	刀の鞘の彫刻
	0081	<b>t</b> apan pe patek	そればかりを
	0082	nepki ne aki	私は仕事としていた。
資料2	0341	u <b>Ki</b> rok awa	そうして
	0342	<b>k</b> unne kosonte	黒いコソソテの
	0343	<b>k</b> amuy menoko	神の女性は
	0344	ene itak hi,	次のように言ったのだ。
資料3	0739	u <u>Sinis</u> kotor	天空面を
	0740	u <b>t</b> oni un wa	あちらへ
	0741	u <b>t</b> ani un wa	こちらへ
	0742	<u>esisuye</u> kor	揺れるように行き
資料4	1027	Ne hi koraci	それと同時に
	1028	<u>ru an toy ka wa</u>	神なる地表から
	1029	<u>tapan kamuy maw</u>	この神の風が
	1030	cirikipuni	吹き上がった。
資料5	1107	<u>Poro</u> ketusi	大きなケトウシ
	1108	u <u>sut</u> ketusi	先祖伝来のケトウシを
	1109	<b>se</b> kane oka	背負った者たちが
	1110	ahup wa arki	入って来た。

上記のうち4例(80%)は行頭子音韻を踏んでいる。行頭子音韻を踏む4行詩連は104詩

連中 30 例（4 行詩連全体の約 29%）だから、サンプル数は非常に少ないものの、高い比率とはいえよう。つまり「行頭母音韻を持たない 4 行詩連には、行頭子音韻の出現率が高い」のである。

なお、行頭押韻のない唯一の 4 行詩連（1027-1030）を含め、上記 5 例は全て後述する「不完全韻」を踏んでいる。「不完全韻」の出現率は高く、全 310 詩連中 264 詩連（85.1%）、全 1151 行中 711 行（61.8%）が不完全韻を踏む行を含んでいる。叙事詩文体を特徴づけるものといってよい。

#### 4-2. 3行詩連（87例）における頭韻の出現数

3行詩連は87例ある。うち行頭に繰り返し語句を持たない詩連は78例である。3行詩連における行頭母音韻の種類は以下の3通りである。

- ① 「2行のみ」：3行中2行の行頭が同じ母音、残りの行頭母音がそれぞれ別の母音
- ② 「3行全一致」：3行全ての行頭が同じ母音
- ③ 「3行全相違」：3行全ての行頭が違う母音

各母音が同じ確率で行頭に来るとき、これらの一致が偶然生じる確率は以下である

表 11. 3行詩連（87例）で押韻が偶然生じる確率（母音が全て同じ比率の場合）

押韻種別	偶然生じる確率
2行のみ	41.76 (48%)
3行全一致	3.48 (4%)
3行全相違（押韻なし）	41.76 (48%)

表 12. 3行詩連（87例）で押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（実際の母音出現比率を加味した修正後）

押韻種別	実際の出現数（比率）	偶然生じる確率
2行のみ	53 (60.9%)	44.5 (51.2%)
3行全一致	6 (6.9%)	5.5 (6.3%)
3行全相違（押韻なし）	28 (32.2%)	37.0 (42.5%)
	87 (100%)	87 (100%)

全87詩連 261行

表 13. 繰り返し語によらない3行詩連78例において、押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（実際の母音出現比率を加味した修正後）

組み合わせ	実際の出現数（比率）	偶然生じる確率
2行のみ一致	45 (57.7%)	40.0 (51.2%)
3行全一致	5 (6.4%)	4.7 (6.1%)
3行全相違（押韻なし）	28 (35.9%)	33.3 (42.7%)
	78 (100%)	78 (100%)

意図的でなくとも57.3%で押韻するはずだが、実際には64.1%で押韻している。4行詩連と同様、やはり繰り返しによらなくても、実際の出現比率はやや高めになっている。

なお、3行詩連においては4行詩連と異なり、行頭母音韻を踏まない28例における子音

の一致の比率が特に高いということはないようである。

### 4-3. 5行詩連（48例）における頭脚韻

#### 4-3-1. 5行詩連における行頭母音韻出現数

5行詩連は48例ある。うち行頭に繰り返し語句をもたない詩連は35例である。5行詩連における行頭母音韻の種類は以下の7通りである。

- ①「2行のみ」：5行中2行の行頭が同じ母音、残り3行の行頭母音がそれぞれ別の母音
- ②「2行2組」：5行中2行の行頭が同じ母音、残り3行中2行が別の母音で一致
- ③「3行のみ」：5行中3行の行頭が同じ母音、残り2行の行頭母音がそれぞれ別の母音
- ④「3行と2行」：5行中3行の行頭が同じ母音、残り2行が別の母音で一致
- ⑤「4行のみ」：5行中4行の行頭が同じ母音、残り1行が別の母音
- ⑥「5行全一致」：5行全ての行頭が同じ母音
- ⑦「5行全相違」：5行全ての行頭が違う母音

表 14. 5行詩連（48例）で押韻が偶然生じる確率（母音が全て同じ比率の場合）

押韻種別	偶然生じる確率
2行のみ	18.4 (38.4%)
2行2組	13.8 (28.8%)
3行のみ	9.2 (19.2%)
3行と2行	3.1 (6.4%)
4行のみ	1.5 (3.2%)
5行全一致	0.1 (0.16%)
5行全相違（押韻なし）	1.8 (3.84%)

表 15. 5行詩連48例において押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（実際の母音比率による修正後）

押韻種別	実際の出現数と比率	偶然生じる確率
2行のみ	11 (22.9%)	13.0 (27.2%)
2行2組	13 (27.1%)	13.2 (27.5%)
3行のみ	8 (16.7%)	11.5 (24.0%)
3行と2行	4 (8.3%)	4.9 (10.3%)
4行のみ	12 (25.0%)	3.9 (8.2%)
5行全一致	0 (0%)	0.4 (0.9%)
5行全相違（押韻なし）	0 (0%)	0.9 (1.9%)
	48	47.8

表 16. 繰り返し語によらない 5 行詩連 35 例において押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（実際の母音比率による修正後）

押韻種別	実際の出現数と比率	偶然生じる確率
2 行のみ	6 (17.1%)	7.9 (22.6%)
2 行 2 組	13 (37.1%)	9.8 (27.9%)
3 行のみ	4 (11.4%)	8.8 (25.1%)
3 行と 2 行	4 (11.4%)	4.2 (12.0%)
4 行のみ	8 (22.9%)	3.5 (10.0%)
5 行全一致	0 (0%)	0.4 (1.3%)
5 行全相違 (押韻なし)	0 (0%)	0.4 (1.1%)
	35	

5 行詩連においては全行の母音が異なっている例はない。だが、アイヌ語は 5 母音なので、5 行詩連で「押韻しない」のは全行の母音が互いに異なる場合のみであり、偶然生じる確率は 0.7% である。つまり 99.3% の確率で少なくとも 2 行で母音が一致する。したがって「2 行以上の押韻」数からは何が意図されているのかは判断できない<sup>47</sup>。

押韻種別内訳をみると、実際の数では、2 行のみの押韻が減り、2 行 2 組でそれぞれ押韻、4 行で押韻の割合が増えている。だが、3 行一致、3 行と 2 行で一致している押韻は逆に若干減っている。

#### 4-3-2. 5 行詩連における行頭子音韻

5 行詩連全 48 詩連のうち行頭子音韻を持つ詩連は 19 詩連、39.6% である。

5 行詩連全 48 詩連 240 行中、母音始まりの行が 85 行 (35.4%)、子音始まりの行は 155 行 (64.6%) である。平賀サタモ ([1959]1993) 全体での母音始まり行と子音始まり行の比率 (43.8 : 51.7) に比べて、子音始まり行の比率が若干高くなっている。

表 17. 平賀サタモ ([1959]1993) における母音始まり行と子音始まり行の数

	全 1151 行	4 行詩連 416 行	5 行詩連 240 行
母音始まり行 (声門閉鎖音)	504 (43.8%)	201 (48.3%)	85 (35.4%)
子音始まり行	647 (56.2%)	215 (51.7%)	155 (64.6%)

<sup>47</sup> 5 母音言語において、99.3% の確率で生じる「5 行中 2 行の行頭のみで母音が一致する状態」を「繰り返しの感覚」としてとらえ得るのであれば、「5 行を 1 単位とする」というルールによる「自動的な押韻」ということになる。



#### 4-4. 2行詩連における行頭母音韻・行頭子音韻出現数

2行詩連は47例ある。うち行頭に繰り返し語句を持たない詩連は45例である。2行詩連では行頭母音韻は「2行一致（押韻している）か、2行不一致（押韻していない）か」の2通りしかない。押韻しているもの12例、押韻していないもの33例である。行頭子音韻を持つ2行詩連は1例のみである。

**表 18.** 2行詩連（47例）で押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（母音が全て同じ比率の場合）

押韻種別	実際の出現数（比率）	押韻が偶然生じる確率
2行一致	14（29.8%）	9.4（20%）
2行不一致	33（70.2%）	37.6（80%）
合計	47（100%）	

**表 19.** 2行詩連（47例）で押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（母音の比率を加味して修正）

押韻種別	実際の出現数・比率	押韻が偶然生じる確率
2行一致	14（29.8%）	11.1（23.7%）
2行不一致	33（70.2%）	35.9（76.3%）
合計	47（100%）	

**表 19.** 2行詩連（行頭に繰り返し語句を持たない45例）で押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（母音が全て同じ比率の場合）

押韻種別	実際の出現数（比率）	押韻が偶然生じる確率
2行一致	12（26.7%）	9.0（20%）
2行不一致	33（73.3%）	36.0（80%）
合計	45（100%）	

**表 20.** 2行詩連（行頭に繰り返し語句を持たない45例）で押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（母音の比率を加味して修正）

押韻種別	実際の出現数・比率	押韻が偶然生じる確率
2行一致	12（26.7%）	10.4（23.1%）
2行不一致	33（73.3%）	34.6（76.9%）
合計	45（100%）	

いずれにせよ、実際の出現数は偶然に生じるよりわずかながら高めである。

#### 4-5. 6行詩連の構造

##### 4-5-1. 6行詩連の行頭母音韻出現数

6行詩連は16例である。6行内部での行頭母音の一致の形式から見た場合、内訳は次のようになっている。

表 22. 6行詩連 16例の、押韻種別ごとの詩連出現数

押韻種別	詩連数
2行一致が2組	2
2行一致が3組	1
3行のみ一致	3
3行と2行それぞれ一致	5
3行一致が2組	0
4行のみ一致	3
4行と2行それぞれ一致	0
5行一致	2
6行一致	0

行数の多さと例の少なさを考えると、これらの「押韻」が偶然によるものか否かを判別することは難しい。そもそも第1行と第6行のように離れた位置で母音が一致していても一致だと感じられるのかどうか疑問である。

6行詩連が詩形式として不安定であることは内部構造からもうかがえる。16例中9例は5行詩連に1行追加された構成となっており、5行詩連部分だけでも押韻している。6例は内部に対句・言い換えなどによる2~4行の定型表現を含んでおり、それ以外の部分だけでも押韻している（ただし定型表現も押韻に参加してはいる）。つまり、16例中15例は3行~5行詩連の拡張とみなしうる。そして元の3~5行詩連として押韻がある。純粋な6行詩連は1例のみである。

以下に16例の構成を示しておく。

#### 4-5-2. 繰り返し行による「5行詩連+1行」構成

同じ行が繰り返されて5行詩連が6行詩連になっているものが2例ある。

資料 6	0097	Tane ne kusu	今では
	0098	<b>sineanto ta</b>	ある日
	0099	<b>u nisapramta</b>	突然に
	0100	<b>u nisapramta</b>	突然に（前行の繰り返し行）
	0101	ekimne rusuy	山に行きたい
	0102	<b>iyannukamu</b>	という気持ちでいっぱいになった。

資料 7	0593	<b>cipiyepkore</b>	（彼女らが）悪口を言ったのも
	0594	<b>cipiyepkore</b>	悪口を言ったのも（前行の繰り返し行）
	0595	u <b>yupke hike</b>	たいそうひどい悪口を
	0596	<b>iyekarkar hawe</b>	私に対して言ったこと
	0597	oka ya sekor	であろうか、と
	0598	<b>yaynuan hike</b>	思ったので

この2例について、田村すゞ子・平賀サタモ（1993：50では平賀サタモ本人による「すぐ続けて次のことを言うとふしに入れなから、おなじことを二度いうことある」という説明を紹介し、「ふしを合わせるために前の行がくり返されている」としている。ただ、それだけでは詩形によるのか、それとも歌っているときの音の高低パターン（いわゆる「旋律」）の間違いを補完するためなのか判別できない。とはいえ、詩形としては1行だけで問題ないので、詩形式としては5行詩連と考えるとよいであろう<sup>48</sup>。

繰り返し行を除いた構成は1例目が tane ne kusu 「今では」という導入部に続く4行。4行内部に行頭母音韻、行末母音韻がある。なお、行末母音韻は導入行を含む。

2例目は最終行が yaynuan hike 「（と）思ったので」という話法の行である。これは y 行による頭子音韻をなす。それ以外の4行内部に行頭母音韻、行末母音韻がある。

<sup>48</sup> 朗唱時の単位の問題については今後の課題としたい。

#### 4-5-3. 省略宣言句による「5行詩連+1行」構成

描写の省略宣言句 anomommomo「(以下)省略する」が付加されているものが1例ある。

資料 8	0167	<b>T</b> anepo sonno	今こそ本当に
	0168	<b>k</b> amuy kar casi	神が作った砦
	0169	<b>k</b> eray ne kusu	であるがゆえに
	0170	u <b>c</b> asi kamuy	神のような砦の
	0171	u pirka <b>k</b> atu	美しいさまは
	0172	<b>a</b> nomommomo	省略する。(省略の宣言句)

anomommomo「省略する」はさまざまな挿入の仕方があるが、ここでは u pirka katu「その美しいさまは」に続いて文の一部となっている。第1行 tanepo sonno「今こそ本当に」は強調の導入行である。本来は「今こそ～であることを見たのであった」などと結び、さらに「その美しいさまは云々」と続くべきであるが、それらの部分が anomommomo「省略する」になっている。導入行と省略宣言行を除いた4行の内部には行頭母音韻、行頭子音韻、行末母音韻がある。ただし、行頭においては6行中4行の行頭母音が a でそろっている。

#### 4-5-4. 場面転換句による「5行詩連+1行」構成

場面転換句 u pakno ne kor「それはそれとして」を第1行とするものが1例ある。

資料 9	0567	<b>u Pakno ne kor</b>	それはそれとして (場面転換句)
	0568	<b>h</b> arkiso peka	左座側のあたりの
	0569	u <b>c</b> asi teksam	砦のそばの
	0570	u niste toy <b>o</b> r	固い土のところを
	0571	<b>h</b> apur toy kunne	柔らかい土のように
	0572	<b>a</b> ureekiru	私は足でひっくり返した、

u pakno ne kor「それはそれとして」は明確な場面転換の語句である。したがって、前の詩連にも後ろの詩連にも特別な結びつきがない。これを除いた5行には行頭で「4行一致」の母音韻、行末では「2行一致」の母音韻がみられる(ただし5行あれば96%以上の確率で母音2つ以上が一致する)。

#### 4-5-5. 感嘆句による「5行詩連+1行」構成

感嘆句 easirana 「何とまあ」を第1行とするものが2例ある。

資料 10	0268	<b>Easirana</b>	何とまあ（感嘆句）
	0269	<b>kamuy</b> ne kusu	神であるがゆえ
	0270	u <b>kamuy</b> ipor	神の顔つきの
	0271	u <b>eypottumma</b>	その顔つきからして
	0272	<b>kosinna kane</b>	（人間とは）違って
	0273	nupur pe <b>sone</b>	巫力ある者に違いない。

easirana 「何とまあ」に続く5行中、第2・3・4・5行は4行全体が定型表現である（ただし散文体であれば第3行 u kamuy ipor 「神の顔つきの」は不要）。この4行は内部に行頭子音韻を含む。母音の一致は6行に分散しており、4行内部にまとまった母音韻はみられないが、繰り返し語句 kamuy がある。

資料 11	0637	<b>Easirana</b>	何とまあ（感嘆句）
	0638	<b>sikari cup noka</b>	満月の模様
	0639	u <b>nin cup noka</b>	三日月の模様
	0640	<b>earuwato</b>	がたくさんついている
	0641	<b>kamuy kosonte</b>	神のコソンテが
	0642	u <b>sanasanke</b>	出てきた。

easirana 「何とまあ」に続く5行中、第2・3・4行が2行対句を含む定型的表現（連体修飾句）である。その2行対句は行頭母音韻を踏む。また、第5・6行は行頭行末ともに母音韻を踏む。ただし、導入行 easirana 「何とまあ」は続く3行と母音韻を構成してもいる。

#### 4-5-6. 間接話法句による「5行詩連+1行」構成

間接話法を導く句 *yaynuan hike* 「と、思ったが」あるいは *yaynuan korka* 「と、思ったのだが」が最終行になるものが3例ある。

資料 12	0439	<b>Itak ne yakka</b>	言葉さえも
	0440	<b>ciyekosomo-</b>	私に対する
	0441	u <b>-yaykatanu</b>	無礼千万な表現を
	0442	<b>iyekarkar hawe</b>	私に対して使う
	0443	oka ya <b>sekor</b>	ものかと
	0444	<b>yaynuan hike</b>	私は思ったので (間接話法句)

資料 13	1143	<b>Tapan te wano</b>	これからは
	1144	mosir <b>erekor</b>	国によって名を呼ばれるのだ
	1145	u <b>aynu sekor</b>	人間と
	1146	<b>aireko oasi</b>	呼ばれることになる
	1147	u ki hawe an	のだなど
	1148	<b>yaynuan hike</b>	私は考えて (間接話法句)

資料 14	0447	<b>Eun ka tapne</b>	そのことに対し
	0448	u <b>wen menoko</b>	悪い女性
	0449	u <b>tar orkehe</b>	たちに
	0450	<b>eattam neno</b>	刀ひとつに
	0451	<b>atuypa anki</b>	切ってやろう
	0452	<b>yaynuan korka</b>	と私は思ったが (間接話法句)

3例ではいずれも母音韻は前半部に偏っている。平賀サタモ ([1959]1993) 全体では、*yaynuan* 「と、思う」を含む行が最終行になっている詩連は8例ある。うち2行詩連・3行詩連が各1例、5行詩連が2例、6行詩連が4例である。最も多い4行詩連の例はない。つまり、*yaynu* 「思う」を含む行は本来は詩連に含まれず、まとまった叙述内容を持つ詩連を作った後で、*yaynu* 「思う」を含む追加行で間接話法化しているのであろう。

#### 4-5-7. 対句を含む構成

対句や言い換えなどによる定型的な表現は2行～7行詩連のいずれにもみられるが、6行詩連では16例中6例と高い比率で含まれている。対句的な定型表現はうち3例である。

資料 15	0215	<b>A</b> ratuyso <b>ka</b>	はるか海原の上
	0216	<b>a</b> tuyso ka <b>wa</b>	海原の上から
	0217	<b>ma</b> k an kat kor <b>pe</b>	どんな姿のものか
	0218	u ek hum <b>konna</b>	やってくる音が
	0219	<b>koturimimse</b>	鳴り響いている。
	0220	<b>kokewrototke</b>	轟いている。

資料 16	0221	u <b>Senram</b> sekor	さてさて (?)
	0222	mak an kat kor <b>pe</b>	どんな姿のものか
	0223	<b>u pase</b> humi	重い音
	0224	<b>e siturare</b>	を伴っている。
	0225	<b>u Kosne</b> humi	軽い音
	0226	<b>e sihopire</b>	を後にしている。

資料 17	0363	<b>T</b> anan to or ta	今日は
	0364	<b>Kotan</b> sitcire	村を焼き
	0365	<b>Mosir</b> sitcire	国を焼く
	0366	<b>S</b> an ka toso <b>o</b>	棚の上を荒らす
	0367	Oypepi <b>poro</b>	そのお椀が大きな
	0368	<b>K</b> amuy ne an kur	神であるお方

資料 15 では、0219 koturimimse 「鳴り響く」 0220 kokewrototke 「轟く」 は音や構成が類似し、語義が似ており、しばしばこの2つの対で用いられる決まり文句である。資料 16 では、0223～0226 は pase 「重い」と kosne 「軽い」という紋切型の対義語を用いた表現である。資料 27 では、0364～0368 は全体も英雄 Aynurakkur アイヌラックルの父親の描写として定型的な表現だが、内部に kotan 「村」と mosir 「国」という紋切型の類義語を用いている。

#### 4-5-8. 言い換えを含む構成

定型的な言い換えを含む構成である。

資料 18	0623	<b>Tapan kamuy maw</b>	神の風
	0624	<b>ketusi upsor wa</b>	ケトゥシの中から
	0625	<b>hopuni kamuy maw</b>	吹き出す神の風
	0626	<b>kamuy maw sika</b>	その神の風の上に乗る
	0627	<b>kamuy kosonte</b>	神のコソントが
	0628	<b>u puspa kane</b>	出てきて

資料 19	0963	<b>Nisatta wano</b>	明日からは
	0964	<b>tapan te wano</b>	今からは
	0965	<b>kamuy mosir ka un</b>	神の世界へ
	0966	<b>u kanto or un</b>	天界へ
	0967	<b>u arpa kuni p</b>	行くべきもので
	0968	<b>ane ruwe ne</b>	私はあります。

資料 20	1082	<b>Anak ki korka</b>	けれども
	1083	<b>hunakke kusu</b>	せっかく
	1084	<b>iresu sapo</b>	私の育ての姉
	1085	<b>kamuy moyremat</b>	神の淑女が
	1086	<b>cikspaotte</b>	私に命じた
	1087	<b>iyekarkar pe</b>	こと

資料 18 では、0624-0625 **ketusi upsor wa hopuni kamuy maw** 「ケトゥシ（容器）の中から吹き出す神の風」は直前の 0623 **tapan kamuy maw** 「この神の風」を説明する形になっている。散文的表現であれば 0623 自体が丸ごと不要である。資料 19 では 0965 の **kamuy mosir ka** 「神の世界」と 0966 の「天の世界」は同義の言い換えである。資料 20 では **iresu sapo** 「私の育ての姉」が **kamuy moyremat** 「神の淑女」という敬称で言い換えられている。これらの定型句は韻文であることを示す。また、押韻に参加しつつも、それなしでも押韻はなされている。これらの定型句は押韻形式的には 1 行とみなせるのではないか。



#### 4-5-9. ただ長いだけの構成

資料 21	1118	<b>Sekor</b> eyki yakne	このようにお前がすれば
	1119	mosir <b>erekor</b>	国によって名付けられる
	1120	<b>eki</b> katuhu	ことにお前もなり
	1121	u aynu mosir	人間の国と
	1122	<b>sekor erekor</b>	呼ばれる
	1123	u ki kus ne na	ようになるだろう。

導入句や感嘆句などの独立した行をもたず、また明確な切れ目や結びつきの強い定型表現などを含まず、たんに長いだけの構成である。このような構成の6行詩連はこの1例だけである。とはいっても、内部に切れ目は存在する。

まず、第1行は条件節、最終行(第6行)はモード(法)を示す助動詞句であり、第2~4行で結びつきの強い1つの節をなしてはいる。つまり、Mosir erekor eki katuhu aynu mosir sekor erekor「国によって名付けられることにお前もなり、(この国も)人間の国と呼ばれる」の前後を Sekor eyki yakne「このようにお前がすれば」と ki kus ne na「そうなるであろう」で挟む構造になっている。また、第2・3行 mosir erekor eki katuhu「国によって名付けられることにお前もなり」は、第4・5行 u aynu mosir sekor erekor「人間の国と呼ばれる」の理由を示している。1文で1詩連をなすという原則がある以上、統語論的な内部構造を持つのは当然ではあり、この6行詩連も例外ではない。しかし、他の6行詩連のようなはっきりとした「5行詩連+1」という構成ではないように思われる。

#### 4-6. 7行詩連の構造

7行詩連は6例ある。7行詩連は6行詩連以上に押韻の単位となることが難しいと思われる。6行詩連と同様に2~4行単位の定型表現を含むことが多く、実質的には2つの部分から構成されている。6例はそれぞれ導入行を持ち、さらに

- ① 資料 22： 比喻によって同じ内容を繰り返す2つの部分から構成されている
- ② 資料 23： 同じような美辞を含む2つの部分から構成されている
- ③ 資料 24： 定型表現を含む
- ④ 資料 25： 詳細な説明による言い換えを含む
- ⑤ 資料 26： 関係文と定型表現を含む
- ⑥ 資料 27： 関係文を含む

というさまざまな構成法で作られているが、基本的には前半部・後半部の各部分内部で押韻している。ただし、資料 24 は後半、資料 26 は前半のみで押韻している。

#### 4-6-1. 7行詩連（その1/6）：比喩による繰り返しを含む構成

比喩導入句 u semkoraci 「かのように」によって実質的に同じ内容が繰り返される構成。

資料 22	0015	<b>u Emko kusu</b>	それによって（導入行）
	0016	u <b>casi upsor</b>	砦の内側
	0017	u tonon suku <b>s</b>	昼の光
	0018	<b>cieomare</b>	入ってくる
	0019	u <b>semkoraci</b>	かのように
	0020	u <b>casi upsor</b>	砦の内側
	0021	<b>enipekooma</b>	光線が差し込む。

u emko kusu 「それによって」という比喩の導入行があり、3行ずつのまとまりが2つ並んでいる。まとまりごとに行頭母音韻を踏んでいる。u semkoraci 「かのように」は比喩を導入する句だが、ここでは実質的には同じ内容（tonon suku**s** **cieomare** 「昼の光が入ってくる」と **casi upsor** **enipekooma** 「砦の内側に光線が差し込む」）が繰り返されている。

#### 4-6-2. 7行詩連（その2/6）：美辞の繰り返しを含む構成

感嘆句に導入され、美辞を繰り返している構成。

資料 23	0043	<b>Easirana</b>	何とまあ（感嘆句）
	0044	u nan nipek <b>i</b>	顔から発せられる光は
	0045	<u>hetuku cup ne</u>	昇る太陽のように
	0046	<u>iyenu cupk<b>i</b></u>	発する太陽の光が
	0047	u <u>ciwre kotom</u>	差し込むかのように
	0048	u <u>pirka ruw<b>e</b></u>	美しいことに
	0049	anikorayap	私は感嘆する。

感嘆句 easirana 「何とまあ」を含む前半3行と後半4行で構成される。前半3行、後半4行には行頭母音韻がみられる。主人公が育ての姉の美貌を褒め称える美辞は二重になっていて、0045 hetuku cup ne 「昇る太陽のように」という比喩が、0046-0047 iyenu cupki ciwre kotom 「発する太陽の光が差し込むかのように」と言い換えて繰り返されている。繰り返された部分は 0048 pirka ruwe 「(のように) 美しいこと」との3行で行頭韻を踏む

#### 4-6-3. 7行詩連（その3/6）：長い定型的表現を含む構成

感嘆句に導入され、定型的な修飾表現を持つ構成。

資料 24	291	<b>Easirana</b>	何とまあ
	292	<u>inan okay pe</u>	どちらが
	293	u <u>rapokkari</u>	劣る
	294	u <b>ki kane hi</b>	ということも
	295	u <b>koysamnopo</b>	ないような
	296	upak ramet <b>ok</b>	同じくらいの勇者
	297	<b>ciesonere</b>	に間違いない。

感嘆句 easirana 「何とまあ」とそれに続く6行詩連からなる。6行詩連は inan okay pe rapokkari (ki kane hi) koysam 「どちらが劣ることもない」という4行にわたる定型的な修飾表現を含む。この表現を利用した4行は行頭母音韻を含み、行末でも韻を踏む。最後の2行からなる後半部は内部で押韻せず、前半部から連続した押韻になっている。

#### 4-6-4. 7行詩連（その4/6）：言い換えを含む構成

言い換え（説明の詳細化）を内部に持つ構成。

資料 25	0316	u <b>Ki rok ayne</b>	そうしているとやがて
	0317	u <u>tan tepo ta</u>	すぐ目の前に
	0318	<u>retar kosonte</u>	白いコソンの
	0319	<u>kamuy menoko</u>	神の女性の
	0320	u <u>teksama ta</u>	すぐそばに
	0321	ma <b>k</b> an kat kor <b>pe</b>	どんな姿のものだろうか
	0322	<b>cisikurure</b>	近寄ってきた。

導入句 u ki rok ayne 「そうしているとやがて」に、場所を説明する4行、動作を説明する3行という構成になっている。場所を説明する4行は u tan tepo ta 「すぐ目の前に」と言うことから、その場所をさらに詳細に述べる3行が続く構成である。最初の4行は内部に押韻を含む。最後の2行も行末で母音韻を踏む。だが、第6行目つまり後半部の冒頭は前半部からの連続した押韻になっている。

#### 4-6-5. 7行詩連（その5/6）：関係文と定型表現を含む構成

関係文と定型表現を含む構成。

資料 26	0560	<b>u Ekan ayne</b>	ついで来て（場面転換）
	0561	<u>iresu casi</u>	私の育った砦の
	0562	<b><u>casi erupsik ta</u></b>	砦の奥側で
	0563	u <b>tan rikna wa</b>	その高いところから
	0564	u simomanpe	大きなシカを
	0565	<b>aosura hum ko</b>	放り出した音が
	0566	<u>korimnatara</u>	鳴り響いた ■

導入句 u ekan ayne 「ついで来て」は ek 「来る」という具体的な動詞を含むが、その前の詩連で移動しているさまが語られているので、やはり u ki rok ayne 「そうしたあげく」などの代動詞を含む導入句と同じように、ほぼ接続詞句と同じようなものとみるべきであろう。iresu casi/casi erupsik ta 「私が育った砦の／砦の奥側で」は叙事詩的な関係文であり、散文（日常会話文体）であれば、たんに iresu casi erupsik ta 「私が育った砦の奥側で」といえばすむ。最後の2行は hum 「音」について korimnatara 「鳴り響く」という定型的表現である。導入句の次の前半4行が押韻を含む。前半には叙事詩的な関係文、後半はに定型表現と行頭行末がある。だが、前半部と後半部の間でも母音 a による押韻が連続している。

#### 4-6-6. 7行詩連（その6/6）：長い関係節を含む構成

長い関係修飾を含む構成

資料 27	0828	<u>Cikuni kupka</u>	木の鋏（くわ）を
	0829	<u>ani mosir kar</u>	国土を作るのに使った
	0830	<u>u ki rok kupka</u>	その鋏を
	0831	mosir noski wa	国土の真ん中から
	0832	u oyra hine	忘れたまま
	0833	kamuy nis ka un	神の天空に
	0834	rikin aan pe	上ってしまったのですが

導入句などはないが、前半3行が関係修飾を含む名詞句になっている。この部分は冗長的な表現になっている。すなわち、散文体ならたんに ani mosir kar/cikuni kupka 「国土を作っ

た木の鋤」でせいぜい2行ですむものを、cikuni kupka/ani mosir kar/u ki rok kupka「木の鋤、国土を作った、そうした鋤」と3行に伸ばしている。その3行は行頭母音韻、行末母音韻をともに含む。2行のままだと行頭母音韻を踏まない。後半4行は前半 mosir noski wa/u oyra hine「国土の真ん中から／（鋤を）忘れたまま」と後半 kamuy nis ka un/rikin aan pe「神の天空に／上ってしまったのですが」に分かれる。接続詞 hine があるが、意味の結びつきが強いのでこれは同一の詩連とみるべきであろう。この4行の内部では行頭母音韻、行末母音韻が踏まれる。なお、前半部と後半部の境目にあたる第3行と第4行をまたいで母音 a による行末母音韻が続いている。

#### 4-7. 平賀サタモによる1959年の語りにおける詩連と押韻まとめ

以上、4詩連を中心に、平賀サタモ（[1959]1993）における、2～7行詩連の行頭母音韻の存在を検証した。アイヌ語は5母音言語であり、叙事詩の2～5行詩連においては行頭で母音が一致する確率は8割以上である。だが、実際には偶然によるよりも高い比率で一致がみられる。これはPhilippi（[1979]1982）による「義務的ではないが意識的である」という行頭頭韻にかんする指摘を裏付けるものである。

また、6行詩連・7行詩連については、2～4行からなる複数の部分に分かれると考えられること、それらが押韻の単位となっている可能性があることがわかった。

## 5. その他の押韻

ここからは、平賀サタモ ([1959]1993) にみられる、行頭行末押韻以外の「押韻と思われる現象」について指摘する。

### 5-1. 複数の詩連において最初の行あるいは最終行を一致させる

例 25	0693	<b>kuwa kurkasi</b>	杖の上に
	0694	u kane <b>kuwa</b>	金属製の杖の
	0695	cinoye <b>kuwa</b>	捻じれた杖の
	0696	<b>kuwa</b> tuykasi	その杖の上に
	0697	u notomare.	あごをのせていた。
	0698	<b>kuwa kurkasi</b>	杖の上を
	0699	u tekrarire.	手で押されていた。
	0700	u <b>kurkasike</b>	そのうえで
	0701	itak omare.	言葉を発した。

例 26	0637	Easirana	何とまあ
	0638	sikari cup noka	満月の模様
	0639	u nin cup noka	三日月の模様
	0640	earuwato	がたくさんついている
	0641	<b>kamuy kosonte</b>	神のコソントを
	0642	u <b>sanasanke.</b>	取り出した。
	0643	Cinoye kuwa	捻じれた杖
	0644	u <b>kane kuwa</b>	金属製の杖を
	0645	u <b>sanasanke</b>	取り出した。
	0646	<b>Kamuy cipanup</b>	神のチパヌブ
	0647	<b>kamuy ninkari</b>	神の耳輪
	0648	<b>kamuy tamasay</b>	神の首飾り
	0649	<b>koaruweun</b>	ひとそろいを
	0650	u <b>sanasapte.</b>	取り出した。



例 25 では各詩連の第 1 行に kuwa, kuwa kurkasi が繰り返されている。例 26 では各詩連の最後に sanasanke 「取り出す」という繰り返し語がみられ、その直前に子音 k による行頭韻・繰り返し韻を配置している。これは upopo など伝統歌謡（叙景詩）でもみられる技法である。

## 5-2. 部分的な一致による連鎖

美辞を並べた描写では、行の語句の一部が次の行で用いられる形で連鎖していく。押韻に似るが、完全に同一の単語を用いる点、次には別の単語で連鎖する点が異なる。

### 5-2-1. 同一の語句による連鎖

例 27	0637	easirana	何とまあ
	0638	sikari <b>cup noka</b>	満月の模様
	0639	u nin <b>cup noka</b>	三日月の模様
	0640	earuwato	がたくさんついている
	0641	kamuy kosonte	神のコソソテが
	0642	u sanasanke.	出てきた。
	0643	cinoye <b>kuwa</b>	捻じれた杖
	0644	u kane <b>kuwa</b>	金属製の杖が
	0645	u sanasanke	出てきた。
	0646	<b>kamuy</b> cipanup	神のチパヌブ
	0647	<b>kamuy</b> ninkari	神の耳輪
	0648	<b>kamuy</b> tamasay	神の首飾り
	0649	koaruweun	ひとそろいが
	0650	u sanasapte.	出てきた。

これらは意味的な観点から対句的表現だとも指摘されてきた。確かに sikari cup noka 「満月の模様」と (u) nin cup noka 「三日月（欠ける月）の模様」における sikari cup 「満月」と nin cup 「三日月（欠ける月）」は対句であるが、後半部の noka 「模様」（あるいは前半部の cup も含めて）は同一語句の繰り返しである<sup>49</sup>。

<sup>49</sup> こういった表現が「くり返し」的性質であると強調したのは立石久雄（1991：164）で

## 5-2-2. 同一音・類似音による連鎖

語句単位ではなく、同一音や類似音が連続することもある。次の6行詩連では、第2音節目に母音 u、および子音 p による連続性がある。

例 28	0623	Tap <b>an</b> kamuy maw	神の風が
	0624	ket <b>usi</b> upsor wa	ケトゥシの中から
	0625	hop <b>uni</b> kamuy maw	吹き出す神の風
	0626	kam <b>u</b> y maw sika	その神の風の上に乗る
	0627	kam <b>u</b> y kosonte	神のコソントエが
	0628	u <b>pu</b> spa kane	出てきて

次の3行詩連では各行の行末に a-i を軸とした連続性がある。

例 29	0743	ne hi <u>kor<b>aci</b></u>	であるかのように
	0744	u kus <u>wa <b>ani</b></u>	通ると、そのために
	0745	uhuy <u>wa <b>paye</b></u> .	みな燃えて行く。

これらは次に述べる「不完全韻」の一部でもある（下線部で示した）。不完全韻は基本的には2行単位であるが、このように3行以上の連鎖をなす場合がある。

---

ある。ただし立石久雄は意味的な繰り返しとみなしていたようである。ここでは音形としての繰り返しである点に注目したい。

## 6. 不完全韻

音素あるいは単音節単位の完全な一致ではなく、行と行の間で複数の音の並びが「似ている」例がある。本稿ではこれらを「不完全韻」(imperfect rhyme) と呼ぶ<sup>50</sup> (丹菊 2018:22)。

不完全韻は基本的に各詩連内部に対応する 2 行で存在するが、3 行以上にまたがることもあり、また詩連をまたぐこともある。行内部の位置もまちまちである。だが、平賀サタモ ([1959]1993) においては、不完全韻を含む詩連は全 310 詩連中 264 詩連 (85.1%)、不完全韻を踏む行は全 1151 行中 714 行 (62.0%) である。これによって叙事詩全体が「音がよく似た語句の連続」となり、流れるような感覚を生むのである。

不完全韻は基本的に

### ① 複数音節で母音や子音が一致する

というもののだが、実際には以下のようなさまざまなバリエーションがある。

- ② 一致しない母音や一部素性が異なる母音が参加している
- ③ 行内位置は同じだが音節内位置が異なる例
- ④ 音節数が異なる例
- ⑤ 行内位置が異なる例
- ⑥ 行内位置と音節数がともに異なる例
- ⑦ 行内位置は同じだがあまり類似していない例
- ⑧ あまり類似しないが 3 行以上にまたがる例

以下では平賀サタモ ([1959]1993) における不完全韻のバリエーションを例示する。

---

<sup>50</sup> Imperfect rhyme は英詩などにおいては「完全に韻脚 (foot) が一致するわけではない押韻」を指すが、アイヌ語韻文では韻脚が明確ではない。本稿では「複数の音素が全て一致するわけではない」という意味で Imperfect rhyme という用語を用いている。Kawahara (2007) が指摘する日本のラップ歌謡の Half rhyme に近い現象かもしれない。

## 6-1. 複数音節で母音や子音が一致する

行頭母音韻のように単一の母音だけが一致するのではなく、複数音節で母音や子音が一致する例がある。一致する音の間には別の母音や子音が挟まれている。

例 30	0146	iresu <u>sapo</u>	私を育ててくれた姉上
	0147	tapan te <u>pakno</u>	今の今まで
例 31	0131	u <u>kane amset</u>	
	0132	u <u>amset ka</u> wa	
例 32	1082	<u>anak ki korka</u>	けれども
	1083	hu <u>nakke kusu</u>	せっかく

なお例 32 では母音 i と e、母音 o と u も類似母音であるが、これについては次の第 6-2 節で述べる。

特に次のように、前後に同一語句がある場合はより広い範囲で一致した印象がもたらされる。

例 33	0578	<u>kamuy he tapan</u>	神なのだろうか
	0579	<u>aynu he tapan</u>	人間なのだろうか

he tapan という同一語句の繰り返しを後半に持ち、前半部は対義表現（「人」と「神」）だが、同時に不完全韻になってもいる。このような「よくできた対句」は偶然であろうと意図的であろうと、結果的に広く用いられるであろう。

6-2. 一致しない母音や一部素性が異なる母音が参加している例

次の例では a-u-a-ke に対し a-u-o-ke が対応している。

例 34	0114	<u>ka</u> muy ran <u>ke</u> tam	神が下した刀を
	0115	<u>ka</u> utpokeciw	帯の下に差した

ka	muy	ran	ke
a	kut	po	ke
母音 a	母音 u		子音 k・母音 e

次の例では kuni に対し konci が対応している。母音 u と o は同じではないが、狭めの後舌円唇母音という素性が共通する「似ている母音」である。このようにしばしば、一部の素性のみが一致する母音同士が対応している。

例 35	0378	akore <u>kuni</u>	お贈りしようと
	0379	cikarkar <u>konci</u>	刺繍した帽子を

ku	ni
kon	ci
子音 k・母音 u と o (狭めの円唇母音)	母音 i

なお、この2行はもっと広くほぼ行全体に近い kore kuni と karkar konci が不完全韻をなしているのかもしれない。

### 6-3. 行内位置は同じだが音節内位置が異なる例

以下の例では、s は音節単位では同じ位置に来ていない。だが歌の持続時間内部において、音の開始位置は同じ位置に来る。このような場合は一致している印象は強くなるであろう。

例 36	0093	u <b>ke</b> sto an kor	毎日毎日
	0094	i <b>re</b> su sa <b>po</b>	私の育ての姉は

歌う際のタイミング

レプニ (拍子棒)	●				●	
	休止	u	<b>ke</b>	<b>sto</b>	<b>an</b>	<b>kor</b>
	休止	i	<b>re</b>	<b>su</b>	<b>sa</b>	<b>po</b>

不完全韻

u	kes	to	an	kor
i	res	u	sa	po
母音 u と i の類似 (狭母音) (ただし u は虚辞)	母音 e 子音 s	母音 o と u の類似 (後舌・狭め母音)	母音 a	母音 o

#### 6-4. 音節数が異なる例

以下の例では u-a-a-e に対し o-a-a-a-e が対応している。つまり、母音 a による 2 音節と母音 a による 1 音節が対応している（虚辞 u も考慮するならそれも音節数が合わない）。

例 37	0255	u <b>ur</b> ar tak <b>ne</b>	霞の塊に
	0256	<b>ko</b> yay <b>kar</b> ka <b>ne</b> .	なっていて

歌う際のタイミング

レプニ (拍子棒)	●				●	
	休止	u	<b>u</b>	<b>r</b> ar	<b>tak</b>	<b>ne</b>
	休止	<b>ko</b>	<b>y</b> ay	<b>k</b> ar	<b>ka</b>	<b>ne</b>

不完全韻

u, u	ra	r	tak	ne
ko	yayka	r	ka	ne
後舌・狭め母音 u, o (ただし u の 1 つは虚辞)	母音 a	子音 r	母音 a	子音 n・母音 e

## 6-5. 行内位置が異なる例

以下の例では対応する場所に来ていない。0221 行の ram は虚辞を入れて 3 音節目、0222 行の kan は 2 音節目であり、最後の kor の位置もずれている。だが、それでも「似ている」印象を与えるであろう。

例 38	0221	u senr <u>am</u> se <u>kor</u>
	0222	mak <u>an</u> kat <u>kor</u> pe

歌う際のタイミング

レプニ (拍子棒)	●				●	
	休止	u	sen	<b>ram</b>	<b>se</b>	<b>kor</b>
	休止	ma	<b>kan</b>	<b>kat</b>	<b>kor</b>	pe

不完全韻

sen	ram	se	kor
ma	kan	kat	kor
※	母音 a・音節末子音が鼻音	※	CVC 全て一致

上記「※」部分は共通性はないが、ともに前の行で母音 e、後の行で母音 a になっていて、わずかながらも繰り返しの印象をもたらすであろう。



例 39	0433	cipiyepkore
	0434	u yupke hike

歌う際のタイミング

レプニ (拍子棒)	●				●	
	休止	ci	pi	<b>yep</b>	<b>ko</b>	re
	休止	u	<b>yup</b>	<b>ke</b>	hi	ke

不完全韻

yep	ko
yup	ke
子音 y・狭母音・子音 p	子音 k・半狭母音

あるいは cipiye~~p~~kore という行全体と u yupe~~k~~e hike という行全体同士が不完全韻をなしている、とみるべきかもしれない。

6-6. 行内位置と音節数がともに異なる例

以下の例では「似ている」箇所の開始部分も音節数も異なる。

例 40	0197	<u>ae</u> <b>ki</b> <b>sar</b> <b>utu</b>	私の耳元にはそれで
	0198	<b>ko</b> <b>maw</b> <b>ku</b> <b>ruru</b>	風を切る音が鳴っていた。

レプニ (拍子棒)	●				●	
	休止	ae	<b>ki</b>	<b>sar</b>	<b>su</b>	<b>tu</b>
	休止	<b>ko</b>	<b>maw</b>	<b>ku</b>	<b>ru</b>	<b>ru</b>

不完全韻

ki	sar	su	tu
ko	maw	kuru	ru
子音 k	母音 a	母音 u	母音 u

6-7. 行内位置は同じだがあまり類似していない例

以下の2行は虚辞を含めれば2組の母音と1組の類似母音が同じタイミングの位置に来ている。このような場合は音の類似度は低くても「似ている」印象を与えるであろう。

例 41	0279	<u>u</u> petso ka <u>ta</u>
	0280	ho <u>ra</u> o <i>ciwpa</i>

レプニ (拍子棒)	●				●	
	休止	u	pet	so	ka	ta
	休止	ho	ra	o	ciw	pa

不完全韻

u	pet	so	ka	ta
ho	ra	o	ciw	pa
母音 u と o (狭め母音) (ただし u は虚辞)	なし	母音 o	なし	母音 a

6-8. あまり類似しないが3行以上にまたがる例

完全に一致する場合から、素性の一部が似ている場合までこれらの類似度はさまざまである。行のどこに位置するかによっても印象は異なる。ときにはそれら「似ている音」が数行にわたり連続している。これは「5-2-2. 類似音の連鎖」と同じものである。

例 42	0317	u <b>Tan tepo ta</b>	すぐ目の前に
	0318	re <b>tar kosonte</b>	白いコソンの
	0319	ka <b>mu y menoko</b>	神の女性の
	0320	u <b>teksama ta</b>	すぐそばに
	0321	ma <b>k an kat kor pe</b>	どんな姿のものだろうか
	0322	ci <b>sikurure</b>	近寄ってきた。

不完全韻

①②tan	①te	po	①②ta
①②tar	②③ko	son	①③te
③muy	①me	o	(ko)
①tek	④sa	(ma)	①②ta
②④kan	②④kat	kor	③pe
③④ku	③ru	ru	③re
①子音 t	①母音 e	母音 o, u	①子音 t
②母音 a	②子音 k		②母音 a
③母音 u	③母音 o, u		③母音 e
④子音 k	④母音 a		

これらはどこまでが意識的に用いられているのかわからないが、少なくとも一部は意識的なものであろう。以下の例などは偶然かもしれないが、弱くても類似はしており、つまり弱いなりに効果があるであろう。

例 43	1148	<b>yaynuan</b> hike	私は考えて
	1149	<b>iruska</b> kewtum	怒りの心を
	1150	<b>ayaykorpare</b>	私は持って

不完全韻

yay	nu	an	hike
i	rus	ka	ke
yay	kor	pa	re
yay と i (音節全体の類似)	母音 u と o 子音 n と r (歯茎音)	母音 a	母音 i-e と 母音 e

yay, i はともに 1 音節であり、yay は広母音 a を含むが i で始まり i で終わる音節である。yaynuanhi、iruskake の 2 音節目の u に yaykorpare の o が対応する位置にあり、ともに後舌円唇母音である。最終母音は i, e, e で、いずれも狭めの前舌非円唇母音である。yaynuanhi と iruskake の n と r も対応する位置にあるが、ともに歯茎音である。

例 44	1096	u <b>aminumpe</b>	炉縁に
	1097	<b>aurekoyupu</b>	足を押しつけていた。
	1098	cis <b>e kan kotor</b>	建物の天井を
	1099	<b>akonot</b> tarara	睨みつけていた。

不完全韻

1096	a	mi	-	①num	①pe
1097	au	re	-	①②koyu	①②pu
1098	-	se	kan	①②ko	②tor
1099	-	-	a	①②ko	②not
	母音 a	母音 e, i	母音 a	①母音 o, u ②子音 k	①子音 p ②母音 o, u

1096-1098 はほぼ行全体近くが対応しているが、1099 は行前半部のみが対応している。ただし、1099 後半部に a-a という並びがあることも、1097-1099 の母音 o, u の並びと「同じ (あるいは類似の) 母音が並ぶ」という意味で「似ている」印象をもたらしているのかもしれない。

## 7. 第2章の結論

平賀サタモ ([1959]1993) 1 作品だけではあるが、1 編全体にわたる「押韻」の全体像がつかめた。アイヌ韻文は 4 行を単位とする傾向が強い「4 行詩連構造」ともいうべき構造を有している (4 行詩連が最多で全体の 33.4% を占める)、6・7 行にわたる詩連は実際には 5 行詩連あるいはさらに行数の少ない複数の詩連から構成されている。

4 行詩連においては偶然でも 88.6% で行頭母音韻が生じるが、実際の押韻出現数は 94.2% であり、意図的に押韻が増やされていると思われる。2 行詩連・3 行詩連においてもやはり偶然より高い比率で押韻が生じている。5 行詩連は判断が難しいが、4 行で一致する押韻の出現率が高いことに注意したい。6 行詩連・7 行詩連については、基本的に内部の構成単位ごとに押韻している可能性が高い。

不完全韻が多いことも叙事詩文体の特徴である。平賀サタモ ([1959]1993) における「不完全韻」の出現率は全 310 詩連中 264 詩連 (85.1%) である。

### 第3章 結論

第1章では4行形式を基本とするアイヌ伝統歌謡ウポポについては行頭母音韻が偶然とは思えない高い比率で出現していることがわかった。第2章ではアイヌ叙事詩も4行形式を基本とし、またウポポより出現比率が小さいものの、行頭母音韻が偶然以上に出現していることがわかった。また、どちらにも不完全韻が見られる。つまり、ウポポも叙事詩もよく似た形式を持っている。これは「アイヌ韻文」の形式、文体的特徴とみてよい。

従来「アイヌ韻文」の文体的特徴については、5音節を基本とした音数律、特殊な語彙、定型表現、2行対句などが指摘されてきた<sup>51</sup>。本稿ではさらに詩連構造、行頭母音韻、不完全韻の3つを追加したことになる。

また、ウポポと叙事詩の間には押韻の傾向の違いも存在する。村崎恭子による「樺太アイヌの散文説話中に登場する挿入歌に押韻がある」という指摘は叙事詩よりウポポによく当てはまる。叙事詩においては、行頭母音韻の出現率が最も高い4行詩連においても、偶然による確率88.6%に対し94.2%でやや高い比率を示すが、ウポポにおける行頭母音韻の出現率は98.1%とさらに高いのである。叙事詩についてはPhilippiの「意識的だが義務的ではない」という記述のほうが当てはまる。「できるだけたくさん押韻する」と言い換えても良いだろう。ほかにも違いはある。関係文的な繰り返し語句や不完全韻はウポポより叙事詩に多く見られる。

単純に行頭母音韻と同じように数を比較すると、行頭子音韻、行末母音韻はさほど出現率が高くなく、意図的と判断する数的な根拠はない。だが、Philippiも指摘するように散発的ながらも意図的に思える行頭子音韻は存在する。また、行末の繰り返し語句は行末韻の存在を示唆する。

---

<sup>51</sup> 近年では甲地利恵(2000)奥田統己(2012)など語アクセントと朗唱時の音の高低パターンに関する研究がある。

## 引用文献

NHK（日本放送協会）編

1965『アイヌ伝統音楽』（ソノシート付）日本放送出版協会

大喜多紀明

2012『『アイヌ神謡集に掲載されたカムイユカラについての考察 修辞論的 視点より』『人間生活文化研究 22』大妻女子大学人間生活文化研究所

奥田統己

2012「アイヌ語の韻文における音節数志向とアクセント志向」『千葉大学ユーラシア言語文化論集 14』千葉大学ユーラシア言語文化論講座

金田一京助

[1908]1992「アイヌの文学」『金田一京助全集 第7巻 アイヌ文学 I』三省堂 7-44、初出『中央公論』23-1・2・3 所収

[1931]1993「ユーカラ概説」『金田一京助全集 第8巻 アイヌ文学 II』三省堂 7-336、初出『アイヌ叙事詩ユーカラの研究（二分冊）』東洋文庫

[1933]1992「アイヌの歌謡と万葉集の歌」『金田一京助全集 第7巻 アイヌ文学 I』三省堂 291-313、初出『万葉集講座 第3巻 言語研究偏』春陽堂 所収

久保寺逸彦

1977『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店

甲地利恵

2000「「クモの神の自叙」の音楽について 旋律構造とリズム配分を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要 6』北海道立アイヌ民族文化研究センター

高倉新一郎（編）

1969『日本庶民生活史料集成 第4巻』三一書房

立石久雄

1991『アイヌの神謡 昔話とユーカラへの道』西田書店

田村すゞ子

1987『アイヌ語音声資料 4 福満・鶴川の歌謡』早稲田大学語学教育研究所

1996『アイヌ語沙流方言辞典』草風館

田村すゞ子・平賀サタモ

1993『アイヌ語音声資料 8 サダモさんのユーカラ 2 KOTAN SITCIRE MOSIR SITCIRE 2 村焼き国焼き 2』早稲田大学語学教育研究所

丹菊逸治

2018『アイヌ叙事詩鑑賞～押韻法を中心に』北海道大学アイヌ・先住民研究センター報告書



中川 裕

1995『アイヌ語千歳方言辞典』草風館

1997『アイヌの物語世界』平凡社

中川裕・中本ムツ子

2007『カムイユカラでアイヌ語を学ぶ』白水社

平賀サタモ

[1959]1993 (田村すゞ子・平賀サタモ 1993『アイヌ語音声資料 8 サダモさんのユーカーラ 2 KOTAN SITCIRE MOSIR SITCIRE 2 村焼き国焼き 2』早稲田大学語学教育研究所 に付属したカセットテープ録音資料)

福田智子・南里一郎・竹田正幸

2002「古典和歌における反復表現の諸相」『人文科学とコンピュータ』53-7 47-54 情報処理学会研究報告

藤井麻湖

1997『モンゴル叙事詩のナラトロジー (物語の構造分析) 研究 アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として』総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻 博士論文

村崎恭子

1989『樺太アイヌ語口承資料 1』昭和 63 年度科学研究費補助金 (一般研究 (C)) 研究成果報告書「樺太アイヌ語の記述的研究」(課題番号 62510266)

村崎恭子・浅井タケ

2001『樺太アイヌの昔話』草風館

Batchelor, John

1938 An Ainu-English-Japanese Dictionary 4th edition, Iwanami, Tokyo (『アイヌ・英・和辞典 第4版』岩波書店)

Kawahara, Shigeto

2007 Half rhymes in Japanese rap lyrics and knowledge of similarity, J East Asian Linguist, 16, pp113-144

Philippi, Donald L

[1979]1982 Songs of Gods, Songs of Humans: The Epic Tradition of the Ainu, Princeton University Press

## 付録資料 平賀サタモによる 1959 年の語りの全詩連構成と全不完全韻

本資料は、音声資料である平賀サタモ ([1959]1993) の詩連構造と不完全韻を示したものである。したがって、平賀サタモ ([1959]1993) の刊行テキストである田村すゞ子・平賀サタモ (1993) とはアイヌ語表記が異なる場合もある。

1. 行番号は田村すゞ子・平賀サタモ (1993) と同一のものを用いた。刊行されたテキストには、語り手の平賀サタモが後日録音を聞いてから追加した行が含まれているが、付録資料には含まれていない。そのため、該当する番号は脱落している。
2. 詩連と詩連の間は 1 行空けてある。
3. 詩連の最終行が動詞句をなしている場合は■を、名詞句をなしている場合は▲を、接続表現になっている場合は●を付してある。▲には必要に応じてどのような名詞句か、また●には原則としてどのような接続表現が用いられているかを付してある。
4. 不完全韻を含む行のみを文字で示し、それ以外の部分は「○○○」のように省略してある。○は 1 音節である (CVC 音節と CV 音節は区別していない)。不完全韻の部分は太字になっている。細字部分は不完全韻に参加していない。
5. 不完全韻は多くの場合詩連内部で押韻するが、詩連をまたいでいることもある。また、不完全韻の複数の組が交錯している場合もあるが、それらの組は区別していない。
6. 虚辞 u、ep は○ではなくそのまま u、ep で示した。
7. 見やすさを考慮して文頭でも大文字にせず全て小文字とした。

0001	<b>iresu casi</b>		0050	u ○○○○	
0002	○○○○		0051	<b>iyoykir mon</b> <sup>pok</sup>	
0003	<b>cisireanu</b>	■	0052	<b>cituyeam</b> <sup>set</sup>	
0004	<b>iresu sapo</b>		0053	u ○○○○	
0005	<b>irespa</b> ki wa		0054	<b>cisireanu</b>	■
0006	○○○○○		0055	u <b>amset kur</b> <sup>ka</sup>	
0007	○○○○○	■	0056	<b>ayayoresu</b>	■
0008	u <b>pakno ne kor</b>		0057	<b>iresu sapo</b>	
0009	u <b>casi kotor</b>		0058	○○○○○	
0010	○○○○○		0059	<b>iparosuke</b>	■
0011	○○○○○	▲ene oka hi	0060	ea <b>sirana</b>	
0012	○○○○○○○		0061	u <b>pirka</b> suke	
0013	u ○○○○		0062	<b>eyaykesupka-</b>	
0014	○○○○○	■	0063	<b>-ewakitara</b>	
0015	u <b>emko kusu</b>		0064	u <b>ciwre kane</b>	●kane
0016	u ○○○○		0065	u <b>pirka</b> suke	
0017	u <b>tonon sukus</b>		0066	<b>ki wa ne ki</b> kor	●kor
0018	<b>cieomare</b>		0067	<b>kaparpe itanki</b>	
0019	u <b>semkoraci</b>		0068	○○○○○○○	
0020	u <b>casi upsor</b>		0069	uw <b>oeroski</b>	■
0021	<b>enipekooma</b>	■	0070	ik <b>oypunpa</b>	■
0022	u <b>pakno ne kor</b>		0071	○○○○○	
0023	○○○○○		0072	ore <b>kesto</b> ta	
0024	<b>kamuy inuma</b>		0073	u ki <b>katuhu</b>	
0025	u <b>rampes kunne</b>		0074	○○○○○	■
0026	<b>cisiturire</b>	■	0075	tane <b>anakne</b>	
0027	<b>iyoykir en</b> <sup>ka</sup>		0076	<b>semar poronno</b>	
0028	u <b>nispa mut</b> <sup>pe</sup>		0077	u <b>anan ki</b> kor	●kor
0029	o <b>tusantu</b> <sup>ka</sup>		0078	<b>tap orowano</b>	●tap orowano
0030	<b>uokauyru</b>	■	0079	<b>u sirka</b> nuye	
0031	<b>ukopusakur-</b>		0080	<b>tomika</b> nuye	
0032	u <b>-suypa kane</b>	●kane	0081	tapan <b>pe patek</b>	
0033	<b>iyoykir ka</b> ta		0082	nepki <b>ne aki</b>	■
0034	○○○○○		0083	○○○○○	
0035	<b>kamuy hayokpe</b>		0084	○○○○○	
0036	sik <b>nu pito ne</b>		0085	<b>makiri etok</b>	
0038	u ○○○	●kane	0086	<b>asikrarire</b>	■
0039	<b>iresu sapo</b>		0087	○○○○○	
0040	anikor <b>ayap</b>	■	0088	<b>asikkote</b> <sup>su</sup>	
0041	<b>kamuy he tapan</b>	■	0089	○○○○○	
0042	<b>aynu he tapan</b>	■	0090	<b>anioker</b> <sup>re</sup>	■
0043	ea <b>sirana</b>		0091	○○○○○	■
0044	u ○○○○		0092	○○○○○	■
0045	<b>hetuku cup ne</b>		0093	u <b>kesto an kor</b>	
0046	<b>iyenu cupki</b>		0094	<b>iresu sapo</b>	
0047	u ○○○○		0095	○○○○○	
0048	u <b>pirka ruwe</b>		0096	○○○○○	●ayne
0049	anikor <b>ayap</b>	■			

0097	○ ○ ○ ○ ○			
0098	<b>sineanto</b> ta			
0099	u <b>nisapramta</b>			
0100	u ○ ○ ○ ○			
0101	<b>ekimne rusuy</b>			
0102	<b>iyannukamu</b>	■		
0103	tapan <b>pe kusu</b>			
0104	<b>kamuy hayokpe</b>			
0105	<b>iyoykir ka un</b>			
0106	<b>ayayna katu</b>			
0107	○ ○ ○ ○ ○	■		
0108	<b>kamuy kosonte</b>			
0109	<b>asikurka sam</b>			
0110	○ ○ ○ ○ ○	■		
0111	uwok <b>kane kut</b>			
0112	<b>earsay neno</b>			
0113	<b>ayaykoyupu</b>	■		
0114	<b>kamuy ranke tam</b>			
0115	<b>akutpokeciw</b>	■		
0116	<b>kane pon kasa</b>			
0117	<b>kasa rantupep</b>			
0118	<b>ayaykoyupu</b>	■		
0119	<b>kina tuye hos</b>			
0120	<b>aeyaypokisir</b>			
0121	<b>ekarkar kane</b>	●kane		
0122	○ ○ ○ ○ ○			
0123	○ ○ ○ ○ ○			
0124	<b>aeyayureka</b>			
0125	u <b>karkar kane</b>	●kane		
0126	○ ○ ○ ○ ○			
0127	○ ○ ○ ○ ○			
0128	○ ○ ○ ○ ○			
0129	○ ○ ○ ○ ○	■		
0130	u ○ ○ ○ ○			
0131	u <b>kane amset</b>			
0132	u <b>amset ka wa</b>			
0133	u <b>ranan ki wa</b>	●wa		
0134	○ ○ ○ ○ ○ ○			
0135	○ ○ ○ ○ ○			
0136	○ ○ ○ ○ ○	●kor		
0137	<b>iresu sapo</b>			
0138	<b>ine rok pe kus</b>			
0139	<b>iyeoripak pe</b>			
0140	<b>itukarike</b>			
0141	kosi <b>kerana</b>			
0142	u <b>atte kane</b>	●kane		
0143	<b>itakan hawe</b>			
0144	○ ○ ○ ○ ○	▲ene oka hi		
0145	○ ○ ○ ○ ○			
0146	iresu <b>sapo</b>			
0147	tapan te <b>pakno</b>			
0148	<b>iresu sapo</b>	▲		
0149	<b>sinen</b> ene wa			
0150	<b>paro cioyki</b>			
0151	○ ○ ○ ○ ○			
0152	○ ○ ○ ○ ○ ○			
0153	u ○ ○ ○ ○			
0154	○ ○ ○ ○ ○			
0155	○ ○ ○ ○ ○	●yak		
0156	u <b>yuk cikoykip</b>			
0157	kasi <b>ciose</b>			
0158	<b>ækarkar ki na</b>	■		
0159	<b>itakan tura</b>	●tura		
0160	u <b>soy wa samma</b>			
0161	anosir <b>aye</b>	■		
0162	inkaran <b>ruwe</b>	▲ruwe		
0163	○ ○ ○ ○ ○			
0164	○ ○ ○ ○ ○			
0165	u <b>soyke sama</b>			
0166	○ ○ ○ ○ ○	■		
0167	○ ○ ○ ○ ○			
0168	<b>kamuy</b> kar casi			
0169	<b>keray ne kusu</b>	●kusu		
0170	u <b>casi kamuy</b>			
0171	u <b>pirka katu</b>			
0172	○ ○ ○ ○ ○	■		
0173	u ○ ○ ○ ○			
0174	casi <b>soyna wa</b>			
0175	○ ○ ○ ○ ○	■		
0176	u <b>pirka katu</b>			
0177	○ ○ ○ ○ ○	■		
0178	<b>ekimun</b> kiroru			
0179	u <b>sinna</b> kane	●kane		
0180	<b>episun</b> kiroru			
0181	u <b>sinna</b> kane	●kane		
0182	u <b>siran ciki</b>			
0183	ekimun <b>kiroru</b>			
0184	<b>kiroru tuyka</b>			
0185	aeyay <b>rikikur-</b>			
0186	<b>-hopunpa kane</b>	●kane		
0187	u <b>toytoy ka wa</b>			
0188	<b>hopuni rera</b>			
0189	u ○ ○ ○ ○			
0190	○ ○ ○ ○ ○ ○			
0191	u ○ ○ ○ ○	●kane		

0192	○ ○ ○ ○ ○			0240	○ ○ ○ ○ ○		
0193	u ○ ○ ○ ○			0241	u <b>pet turasi</b>		
0194	○ ○ ○ ○ ○			0242	u <b>arki humi</b>		
0195	u ○ ○ ○ ○			0243	<b>koturimimse</b>	■	
0196	○ ○ ○ ○ ○	●korka					
0197	ae <b>kisarsutu</b>			0244	○ ○ ○ ○ ○		
0198	<b>komawkururu</b>	■		0245	○ ○ ○ ○ ○		
				0246	u <b>kapar</b> toypo		
0199	u ○ ○ ○ ○			0247	<b>ayaykakuste</b>	■	
0200	○ ○ ○ ○ ○						
0201	○ ○ ○ ○ ○	■		0248	u <b>anan awa</b>		
				0249	u ○ ○ ○ ○		
0202	u <b>ki rok ayne</b>			0250	u ○ ○ ○ ○	●no	
0203	<b>akor ekimne</b>						
0204	○ ○ ○ ○ ○ ○ -			0251	<b>iteksama</b> ta		
0205	-○ ○ ○ ○ ○	■		0252	u <b>petso ka</b> ta		
				0253	○ ○ ○ ○ ○		
0206	○ ○ ○ ○ ○			0254	○ ○ ○ ○ ○	■	
0207	ep a <b>kor petpo</b>						
0208	u <b>pet hontomo</b>			0255	u <b>urar tak ne</b>		
0209	○ ○ ○ ○ ○			0256	<b>koyaykar kane</b>	●kane	
0210	u ○ ○ ○ ○	●kane					
				0257	<b>kouratcari</b>		
0211	u pet <b>teksam ta</b>			0258	ep ○ ○ ○	●wa	
0212	acastustekka	■		0259	<b>anukan</b> ruwe		
0213	<b>inuan kuni</b>			0260	ene <b>oka hi</b>	▲ene oka hi	
0214	<b>ene oka hi</b>	▲ene oka hi					
				0261	○ ○ ○ ○ ○		
0215	○ ○ ○ ○ ○			0262	kamuy <b>menoko</b>		
0216	○ ○ ○ ○ ○			0263	u an <b>nanko</b> ra	■	
0217	<b>mak an kat kor</b> pe						
0218	u <b>ek hum konna</b>			0264	○ ○ ○ ○ ○		
0219	○ ○ ○ ○ ○	■		0265	retar <b>cipanup</b>		
0220	○ ○ ○ ○ ○	■		0266	u ○ ○ ○ ○		
				0267	<b>esipine pe</b>	▲名詞句	
0221	u sen <b>ram sekor</b>			0268	○ ○ ○ ○ ○		
0222	<b>mak an kat kor</b> pe			0269	○ ○ ○ ○ ○		
0223	u <b>pase</b> humi			0270	u ○ ○ ○ ○		
0224	e <b>siturare</b>	■		0271	u ey <b>pottumma</b>		
0225	u <b>kosne</b> humi			0272	<b>kosinna</b> kane	●kane	
0226	e <b>sihopire</b>	■		0273	nupur pe <b>sona</b>	■sona	
0227	u ○ ○ ○ ○			0274	nupur can <b>noye p</b>		
0228	u ○ ○ ○ ○			0275	○ ○ ○ ○ ○		
0229	u <b>tuytuy nis</b> ne			0276	u <b>seske kane</b>	●kane	
0230	uko <b>tutturse</b>	■					
0231	u <b>nis rap etok</b>			0277	u ○ ○ ○ ○ ○		
0232	u <b>numnu kawkaw</b>			0278	u ○ ○ ○ ○	●kane	
0233	u <b>numnu apto</b>						
0234	eran hum <b>konna</b>			0279	<b>u petso ka ta</b>		
0235	○ ○ ○ ○ ○	■		0280	<b>horaociwpa</b>	■	
0236	<b>iyos nisihi</b>			0281	u <b>castustekka</b>		
0237	○ ○ ○ ○ ○			0282	u siran <b>awa</b>	●awa	
0238	<b>nisoparakur-</b>						
0239	u ○ ○ ○ ○	●kane		0283	<b>ep akor petpo</b>		
				0284	<b>pet kur etoko</b>		
				0285	iworso <b>ka wa</b>		
				0286	○ ○ ○ ○ ○	▲名詞句	

0287	<b>kohumepusi</b>		0337	nupur <b>cannoye p</b>	
0288	u ○○○○		0338	esir <b>utumka</b>	
0289	<b>koturimimse</b>	■	0339	<b>onuy</b> na kane	
0290	○○○○○	■	0340	○○○○○	■
0291	○○○○○		0341	u ○○○○	
0292	<b>inan okay pe</b>		0342	<b>kunne kosonte</b>	
0293	u <b>rapokkari</b>		0343	<b>kamuy menoko</b>	
0294	u ○○○○		0344	○○○○○	▲ene itak hi
0295	u koy <b>samnopo</b>		0345	<b>koninkar kusu</b>	
0296	upak <b>rametok</b>		0346	<b>rep un iworso</b>	
0297	○○○○○	■	0347	○○○○○	
0298	sipase <b>kamuy</b>		0348	u <b>ek menoko</b>	
0299	u <b>pase humi</b>		0349	<b>kamuy moyre</b> mat	▲名詞句 (呼びかけ)
0300	u <b>siturare</b>	■	0350	iworso ka ta	
0301	u <b>kosne</b> humi		0351	<b>urokte</b> kamuy	
0302	e <b>sihopire</b>	■	0352	kamuy <b>oruspe</b>	
0303	u <b>nis rap etok</b>		0353	a <b>punno</b> siran ya	■
0304	u <b>numnu kawkaw</b>		0354	uwepe <b>kennu</b>	■wepekennu
0305	u <b>numnu apto</b>		0355	u ○○○○	
0306	<b>eran hum konna</b>		0356	<b>retar kosonte</b>	
0307	○○○○○	■	0357	○○○○○	▲ene itak hi
0308	○○○○○		0358	<b>repuyso ka ta</b>	
0309	u ○○○○		0359	○○○○○	
0310	u ○○○○	●kane	0360	kamuy or <b>ta anak</b>	
0311	mak an <b>kat kor</b> pe		0361	<b>airanak</b> pe ka	
0312	u ne <b>nankora</b>	■	0362	<b>isam korkay</b> ki	●korkayki
0313	u ○○○○		0363	<b>tanan to or ta</b>	
0314	u san <b>hum konna</b>		0364	<b>Kotan</b> sitcire	
0315	○○○○○	■	0365	<b>Mosir</b> sitcire	
0316	u ○○○○		0366	<b>San ka tososo</b>	
0317	u <b>tan tepo ta</b>		0367	<b>Oypepi poro</b>	
0318	<b>retar kosonte</b>		0368	○○○○○	▲名詞句
0319	<b>kamuy menoko</b>		0369	u <b>Hon okkasi</b>	
0320	u <b>teksama</b> ta		0370	<b>Opoy</b> suyanke	
0321	<b>mak an kat</b> kor pe		0371	kamuy <b>rametok</b>	
0322	cisi <b>kurure</b>	■	0372	<b>ne yak</b> easir	
0323	<b>anukan ruwe</b>		0373	○○○○○	
0324	○○○○○	▲ene oka hi	0374	u ○○○○	●wa kusu
0325	kunne <b>kosonte</b>		0375	<b>tanan to or ta</b>	
0326	○○○○○		0376	○○○○○	
0327	<b>koar'uwe</b> un		0377	<b>inkaran</b> wa kusu	●wa kusu
0328	u <b>yayne</b> nayne		0378	akore <b>kuni</b>	
0329	<b>esipine</b> pe	▲名詞句	0379	<b>ci</b> karkar <b>konci</b>	
0330	○○○○○		0380	akor wa <b>yanan</b>	
0331	u ○○○○		0381	○○○○○○○	■
0332	ey <b>pottumma</b>		0382	itak <b>turano</b>	
0333	<b>kosinna</b> kane	●kane	0383	iyon <b>uytasa</b>	
0334	u ○○○○		0384	itak <b>kutcama</b>	
0335	u <b>nen</b> o kane		0385	○○○○○	■
0336	nupur <b>pe sone</b>	■nupur pe sone	0386	○○○○○	▲ene oka hi

0387	<b>kim un iworso</b>		0431	a <b>sinuma</b> mosma	
0388	iworso <b>ka wa</b>		0432	<b>mosma</b> an kuni p	
0389	u san <b>menoko</b>		0433	cipiyepkore	
0390	<b>kamuy moyremat</b> ▲名詞句 (呼びかけ)		0434	u <b>yupke</b> hike	
			0435	○○○○○○○○○	■
0391	kimuy <b>so ka ta</b>		0436	<b>usayne ka</b> tap	
0392	ayra <b>nak</b> kuni p	■	0437	u <b>wen menoko</b>	
0393	<b>isam</b> he ki ya	●awa	0438	<b>utar orke</b> he ▲名詞句	
0394	<b>itak rok awa</b>				
			0439	○○○○○	
0395	<b>kim un iworso</b>		0440	○○○○○-	
0396	○○○○○		0441	u <b>-yaykata</b> nu	
0397	u <b>san menoko</b>		0442	iyek <b>karkar</b> hawe	
0398	○○○○○ ▲ene itak hi		0443	○○○○○	
			0444	○○○○○ ●hike	
0399	○○○○○				
0400	○○○○○		0445	○○○○○	
0401	<b>kim un iworso</b>		0446	ayay <b>korpare</b> ■	
0402	<b>epunkine</b> kamuy ▲名詞句				
			0447	eun <b>ka tapne</b>	
0403	○○○○○		0448	u wen <b>menoko</b>	
0404	u ○○○○		0449	○○○○○	
0405	○○○○○ ●taptap		0450	eat <b>tam neno</b>	
			0451	<b>atuypa</b> anki ■	
0406	○○○○○		0452	<b>yaynuan</b> korka ●yaynuan korka	
0407	○○○○○				
0408	○○ u ○○○ ●連体修飾句		0453	<b>apunitara</b>	
			0454	○○○○○○-	
0409	u <b>hon okkasi</b>		0455	<b>-kokisma ka</b> ne ●kane	
0410	opoy <b>suyanke</b>				
0411	○○○○○		0456	○○○○○	
0412	kamuy <b>ne an kur</b> ▲名詞句		0457	<b>irespa siri</b>	
			0458	u <b>pirka kuni p</b> ▲名詞句 (p)	
0413	ne yak <b>easir</b>				
0414	ayay <b>kotomka</b>		0459	<b>iresu sapo</b>	
0415	<b>yaynuan wa</b> kus ●kus		0460	○○○○○	
			0461	u <b>ne a hine</b>	
0416	<b>tanan to or ta</b>		0462	○○○○○ ▲ene itak hi	
0417	○○○○○				
0418	<b>inkaran</b> wa kusu ●wa kusu		0463	sino <b>utarpa</b>	
			0464	sino <b>rametok</b> ▲名詞句 (呼びかけ)	
0419	akore <b>kuni</b>				
0420	matan <b>pusi taptap</b> ●taptap		0465	e <b>annu ki pe</b>	
0421	akor wa <b>sanan</b>		0466	e <b>annukar pe</b>	
0422	<b>ki ruwe tas tapan</b> nek■		0467	iruska <b>kewtum</b>	
0423	u <b>hawas</b> hike ●hike		0468	eki <b>wa ne kor</b> ●kor	
0424	<b>iruska</b> kewtum		0469	sem ok <b>kayoram</b>	
0425	<b>ayaykorpare</b> ■		0470	○○○○○○	■
0426	<b>mak an kat kor pe</b>		0471	nep <b>enukar yakka</b>	
0427	u ○○○○		0472	nep <b>enu yakka</b>	
0428	○○○○○		0473	ikiya <b>eyruska na</b> ■	
0429	○○○○○				
0430	u ○○○○ ●taptap		0474	<b>sekor okay</b> pe	
			0475	○○○○○○	
			0476	<b>etoko ta</b>	
			0477	○○○○	
			0478	○○○○ ▲hi	

0479	○ ○ ○ ○ ○			0526	<b>ane cikuni</b>	
0480	○ ○ ○ ○ ○			0527	<b>anehaytare</b>	■
0481	<b>koetoranne</b>	■		0528	○ ○ ○ ○ ○	
0482	○ ○ ○ ○ ○			0529	<b>ayepekare</b>	■
0483	u <b>oar apunno</b>			0530	○ ○ ○ ○ ○	
0484	<b>homar rera</b>			0531	○ ○ ○ ○ ○	■
0485	<b>homaritara</b>	■		0532	u ki <b>rok ayne</b>	
0486	<b>hopuni rera</b>			0533	<b>anukar ruwe</b>	
0487	u ○ ○ ○ ○			0534	ene <b>oka hi</b>	▲ene oka hi
0488	<b>aeaypastere</b>	■		0535	u <b>nep pahawe</b>	
0489	u <b>sanan</b> katu			0536	ikonu <b>kuni p</b>	●p
0490	○ ○ ○ ○ ○	■		0537	retar sik <b>numi</b>	
0491	u <b>sanan</b> hike	●hike		0538	○ ○ ○ ○ ○	■
0492	○ ○ ○ ○ ○			0539	○ ○ ○ ○ ○	
0493	<b>tanan</b> to or ta			0540	u <b>sikkeruru</b>	■
0494	○ ○ ○ ○ ○	▲名詞句 (呼びかけ)		0541	u <b>siktokoko</b>	■
0495	u yuk <b>cikoykip</b>			0542	arus <b>ka kusu</b>	●kusu
0496	kasi <b>ciose</b>			0543	u <b>kanna</b> ruyno	
0497	ae <b>ekarkar</b> ki na	■		0544	asirkik hum <b>konna</b>	
0498	<b>itakan</b> awa	●itakan awa		0545	○ ○ ○ ○ ○	
0499	nep ka u <b>asakno</b>			0546	○ ○ ○ ○ ○	■
0500	sirepa <b>an yakun</b>			0547	○ ○ ○ ○ ○	
0501	<b>iresu sapo</b>			0548	cikoykip <b>kamuy</b>	
0502	<b>ikoyki sekor</b>			0549	ranma <b>katuhu</b>	
0503	○ ○ ○ ○ ○	●kusu		0550	○ ○ ○ ○ ○	■
0504	tu iwor <b>so ka</b>			0551	ki hi <b>orowa</b>	
0505	tu ken <b>asso ka</b>			0552	u <b>pancikiri</b>	
0506	ano <b>pasopas</b>	■		0553	atapka <b>kokomo</b>	■
0507	<b>inkaran hike</b>	●hike		0554	aetapka <b>konna</b>	
0508	<b>u simomanpe</b>			0555	<b>racinitara</b>	■
0509	○ ○ ○ ○ ○			0556	<b>ep akor casi</b>	
0510	komoy <b>natara</b>	■		0557	kop <b>akke sama</b>	
0511	u <b>tuyma</b> uk pe			0558	ayay <b>tuyere</b>	■
0512	○ ○ ○ ○ ○			0559	ayay <b>terkere</b>	■
0513	<b>omare</b> kane	●kane		0560	u ○ ○ ○ ○	
0514	u <b>hanke</b> uk pe			0561	<b>iresu</b> casi	
0515	kokiraw <b>riki</b>			0562	casi <b>erupsik ta</b>	
0516	u <b>roski</b> kane	●kane		0563	u tan <b>rikna</b> wa	
0517	ipe <b>sir konna</b>			0564	u ○ ○ ○ ○	
0518	○ ○ ○ ○ ○	■		0565	○ ○ ○ ○ ○ ○	
0519	u <b>sirki hi ta</b>			0566	○ ○ ○ ○ ○	■
0520	<b>oar apunno</b>			0567	u <b>pakno ne kor</b>	
0521	○ ○ ○ ○ ○			0568	<b>harkiso peka</b>	
0522	<b>ayaytuypare</b>	■		0569	u <b>casi teksam</b>	
0523	u <b>pancikiri</b>			0570	u ○ ○ ○ ○	
0524	u ○ ○ ○ ○ ○			0571	<b>hapur toy kunne</b>	
0525	<b>anesikari</b>	■		0572	<b>aureekiru</b>	■
				0573	<b>ahunan hike</b>	
				0574	○ ○ ○ ○ ○	
				0575	○ ○ ○ ○ ○	■



0576	<b>neun</b> motokor pe		0623	<b>tapan kamuy</b> maw	
0577	<b>ane wa tapne</b>	■ tapne	0624	<b>ketusi</b> upsor wa	
0578	<b>kamuy he tapan</b>	■ tapan	0625	<b>hopuni</b> kamuy maw	
0579	<b>aynu he tapan</b>	■ tapan	0626	<b>kamuy</b> maw sika	
0580	iresu <b>sapo</b>		0627	kamuy <b>kosonte</b>	● kane
0581	u tan te <b>pakno</b>		0628	u ○○○○	
0582	○○○○○		0629	<b>tapan</b> pe rekor	
0583	○○○○○	▲ hike	0630	<b>easirana</b>	
0584	○○○○○		0631	<b>kamuy kosonte</b>	
0585	○○○○○	● ayne	0632	<b>iyaynomare</b>	■
0586	<b>usayne ka</b> tap		0633	u sirka <b>kasi</b>	
0587	u ○○○○		0634	○○○○○	
0588	<b>utar orkehe</b>	▲ 名詞句	0635	○○○○○	
0589	<b>itak ne yakka</b>		0636	ene <b>oka hi</b>	▲ ene oka hi
0590	<b>ciyeko</b> somo-		0637	<b>easirana</b>	
0591	u <b>-yaykatanu</b>		0638	<b>sikari</b> cup noka	
0592	iyekarkar <b>kusu</b>	● kusu	0639	u ○○○○	
0593	cipi <b>iyepkore</b>		0640	<b>earuwato</b>	
0594	cipi <b>iyepkore</b>		0641	kamuy <b>kosonte</b>	
0595	u <b>yupke</b> hike		0642	u sanas <b>anke</b>	■
0596	○○○○○○		0643	○○○○○	
0597	○○○○○		0644	u ○○○○	
0598	○○○○○	● hike	0645	u ○○○○	■
0599	○○○○○	▲ p	0646	kamuy <b>cipanup</b>	
0600	○○○○○	● kusu	0647	kamuy <b>ninkari</b>	
0601	<b>iruska</b> ipor		0648	<b>kamuy tamasay</b>	
0602	anan <b>tuyka</b> ta		0649	<b>koaruweun</b>	
0603	<b>ipukitara</b>	■	0650	u <b>sanasapte</b>	■
0604	○○○○○		0651	○○○○○	
0605	○○○○○○	■	0652	○○○○○	
0606	u casi <b>kotor</b>		0653	○○○○○	
0607	<b>akonottara</b>	■	0654	○○○○○	■
0608	u ○○○○		0655	○○○○○	
0609	○○○○○		0656	○○○○○	● wa
0610	<b>inukar</b> ayne	● ayne	0657	○○○○○	
0611	<b>oar apunno</b>		0658	○○○○○	■
0612	<b>hopun</b> pa hine	● hine	0659	kamuy <b>ninkari</b>	
0613	u ○○○○		0660	<b>kisar</b> uyruke	■
0614	○○○○○	■	0661	<b>kamuy cipanup</b>	
0615	u ○○○○	■	0662	<b>erurikikur</b>	
0616	○○○○○		0663	u ○○○○	● kane
0617	○○○○○	■	0664	u ○○○○	
0618	<b>ketusi</b> upsor		0665	○○○○○	
0619	u <b>tekkus</b> pare	■	0666	○○○○○	
0620	<b>mak an</b> kat <b>kor pe</b>		0667	<b>riwak kamuy ne</b>	
0621	u ○○○○		0668	<b>koyaykar kane</b>	● kane
0622	etoko <b>orke</b>	▲ etoko orke			

0669	○ ○ ○ ○ ○		0718	<b>hayokan ruwe</b>	
0670	○ ○ ○ ○ ○ ○		0719	○ ○ ○ ○ ○	■
0671	u ○ ○ ○ ○		0720	<b>tumu</b> an kewtum	
0672	○ ○ ○ ○ ○	■	0721	○ ○ ○ ○ ○	
0673	ep <b>akor sa</b> po		0722	<b>somo</b> ne nankor	■
0674	u <b>nan tuyka</b> si		0723	○ ○ ○ ○ ○	
0675	<b>hetuku cup ne</b>		0724	<b>erekor</b> moto	
0676	<b>iyenucupki</b>		0725	<b>ene oka</b> hi	▲ene oka hi
0677	u ○ ○ ○ ○	●kane	0726	○ ○ ○ ○ ○	
0678	u <b>casi kotor</b>		0727	○ ○ ○ ○ ○	
0679	si <b>kari cup no</b> ka		0728	○ ○ ○ ○ ○	
0680	u ○ ○ ○ ○		0729	○ ○ ○ ○ ○	■
0681	○ ○ ○ ○ ○	■	0730	kiyanne <b>hike</b>	
0682	<b>iyoype</b> nipek		0731	<b>kamuy nis ka</b> ka ta	
0683	ep ○ ○ ○ ○		0732	<b>akopuriniwkes</b>	■
0684	u ○ ○ ○ ○		0733	u ○ ○ ○ ○	
0685	<b>kosonte</b> nipeki	▲名詞句	0734	○ ○ ○ ○ ○	
0686	○ ○ ○ ○ ○		0735	○ ○ ○ ○ ○	■
0687	○ ○ ○ ○ ○		0736	u ki <b>pe ne kus</b>	
0688	u ○ ○ ○ ○	▲名詞句	0737	○ ○ ○ ○ ○	
0689	○ ○ ○ ○ ○		0738	<b>ene oka</b> hi	▲ene oka hi
0690	○ ○ ○ ○ ○		0739	u <b>sinis kotor</b>	
0691	○ ○ ○ ○ ○		0740	u ○ ○ ○ ○	
0692	○ ○ ○ ○ ○	■	0741	u ○ ○ ○ ○	
0693	kuwa <b>kurkasi</b>		0742	<b>esisuye kor</b>	●kor
0694	u kane <b>kuwa</b>		0743	ne hi <b>koraci</b>	
0695	cinoye <b>kuwa</b>		0744	u <b>kus wa ani</b>	
0696	kuwa <b>tuykasi</b>		0745	<b>uhuy wa paye</b>	■
0697	u ○ ○ ○ ○	■	0746	u ○ ○ ○ ○	
0698	kuwa <b>kurkasi</b>		0747	○ ○ ○ ○ ○	■
0699	u <b>tekrarire</b>	■	0748	○ ○ ○ ○ ○	■
0700	u ○ ○ ○ ○		0749	○ ○ ○ ○ ○	
0701	<b>itak omare</b>	■	0750	iki <b>yakkayki</b>	●yakkayki
0702	<b>itak ne manu</b> p		0751	u <b>apkas</b> hum ko	
0703	○ ○ ○ ○ ○		0752	○ ○ ○ ○ ○	
0705	○ ○ ○ ○ ○	■	0753	○ ○ ○ ○ ○	■
0706	○ ○ ○ ○ ○	●ene oka hi	0754	○ ○ ○ ○ ○	■
0707	○ ○ ○ ○ ○		0755	u <b>ki wa ne kor</b>	
0708	○ ○ ○ ○ ○		0756	<b>mak anan ne kor</b>	
0709	○ ○ ○ ○ ○	▲名詞句 (呼びかけ)	0757	u ○ ○ ○ ○	
0710	○ ○ ○ ○ ○		0758	○ ○ ○ ○ ○	
0711	○ ○ ○ ○ ○	■	0759	○ ○ ○ ○ ○	■
0712	○ ○ ○ ○ ○		0760	○ ○ ○ ○ ○	
0713	<b>kamuy rametok</b>	▲名詞句 (呼びかけ)	0761	mo <b>sirkes umma</b>	
0714	<b>apaskuma kus ne kor</b>		0762	u <b>apkas</b> hum ko	
0715	○ ○ ○ ○ ○		0763	○ ○ ○ ○ ○	■
0716	<b>somo an kuni</b> p		0764	○ ○ ○ ○ ○	■
0717	○ ○ ○ ○ ○ ○	●kus			

0765	u <b>kus wa ani</b>		0811	u ○○○○	
0766	uhuy wa <b>paye</b>	■	0812	u <b>ne yak tasi</b>	●tasi
0767	<b>orowa</b> easir		0813	upak <b>pito</b> ne	
0768	<b>otu pa</b> re pa		0814	upak <b>siretok</b>	
0769	<b>neni iki</b> ayne	●ayne	0815	○○○○○	●
0770	<b>iperusuy</b> kor	●kor	0816	u ○○○○	●kusu
0771	<b>kamuy nis ka ta</b>		0817	○○○○○	
0772	u <b>un cise ta</b>		0818	○○○○○	■
0773	○○○○○	●kor	0819	u ○○○○	
0774	○○○○○		0820	○○○○○	●ciki
0775	○○○○○	●ayne	0821	u ○○○○	
0776	u <b>hon ne kor pe</b>		0822	○○○○○	
0777	u <b>totta kunne</b>		0823	<b>ene oka hi</b>	▲ene oka hi
0778	○○○○○	■	0824	<b>teeta kane</b>	
0779	u <b>hon okkasi</b>		0825	<b>hoskino kane</b>	
0780	op <b>oysuyanke</b>	■	0826	<b>mosir</b> kar kamuy	
0781	u ○○○○	■	0827	<b>mosir</b> kar <b>ayne</b>	●ayne
0782	ipe <b>rok ayne</b>	●ayne	0828	<b>cikuni kupka</b>	
0783	u <b>hon ne kor pe</b>		0829	<b>ani mosir</b> kar	
0784	u <b>totta kunne</b>		0830	u <b>ki rok kupka</b>	
0785	<b>sisam omare</b>	■	0831	<b>mosir noski wa</b>	
0786	ne hi <b>mosma poka</b>		0832	u ○○○○	●hine
0787	<b>koyay</b> sinire		0833	○○○○○	
0788	<b>ki yak</b> aramu		0834	○○○○○	▲pe
0789	he <b>topo horka</b>	●horka	0835	sipase <b>kamuy</b>	
0790	u <b>ranke mosir</b>		0836	te <b>kekar kuni p</b>	
0791	oran <b>hum konna</b>		0837	<b>kupka ne</b> kor pe	
0792	○○○○○	■	0838	u ne <b>yakkayki</b>	●yakkayki
0793	○○○○○	■	0839	u <b>toykomunin</b>	
0794	u ap <b>kas hi ta</b>		0840	<b>eyaynunuke</b>	■
0795	u ○○○○		0841	tapan pe kusu	
0796	mosir <b>noski ta</b>		0842	pon cikisani ne	
0797	○○○○○		0843	<b>hetuku katu</b>	▲katu
0798	○○○○○	▲	0844	sikenukar pe	
0799	○○○○○		0845	u <b>ne korkayki</b>	●korkayki
0800	u ○○○○		0846	<b>heru yaynu</b> ne	■
0801	○○○○○		0847	anak <b>ki korka</b>	●korka
0802	○○○○○	●kane	0848	<b>sekor an</b> menoko	
0803	○○○○○		0849	sipase <b>kamuy</b>	
0804	u ○○○○		0850	ne <b>yak ta akor</b>	
0805	u ○○○○	■	0851	u <b>yaynu katu</b>	▲katu
0806	<b>enkasike</b> kus kor	●kor	0852	kamuy <b>yaynu kuni</b>	
0807	<b>nukar</b> wa ne kor	●kor	0853	u ○○○○	
0808	○○○○○		0854	<b>eyaynunuke</b>	■
0809	<b>ene pirka hi</b>		0855	u hon <b>kor ruwe</b>	
0810	○○○○○	●sekor	0856	○○○○○	
			0857	u <b>kor ruwe</b> ne	■

0858 ○○○○○  
0859 u **apesamoma**  
0860 ○○○○○ ■  
0861 ki ruwe **ne korka** ●korka

0862 ○○○○○  
0863 u ○○○○  
0864 **eresu kuni** p  
0865 u **ewkususu** ■

0866 ○○○○○  
0867 ○○○○○  
0868 ○○○○○  
0869 ○○○○○  
0870 u ○○○○ ●hine

0871 ○○○○○  
0872 u ○○○○  
0873 u ○○○○  
0874 ○○○○○○  
0875 ○○○○○ ■

0876 ○○○○○○  
0877 u **kor rametok**  
0878 ○○○○○ ■

0879 u **ki wa ne kor** ●kor  
0880 u **nen ta usa**  
0881 u **respa ciki**  
0882 u **pirka kuni** ●kuni

0883 kamuy **opoysan**  
0884 ○○○○○  
0885 u ne nan**kora** ■

0886 **sekor okay** pe  
0887 ○○○○○  
0888 **ewkoramkur-**  
0889 u -○○○○ ●kane

0890 ○○○○○ ●hike  
0891 ○○○○○  
0892 ○○○○○ ■

0893 **tapan** pe kusu ●kusu  
0894 u **yayteknawa**  
0895 u **kanto oro wa**  
0896 ○○○○○  
0897 u **ranan ruwe** ▲ruwe  
+  
0898 ep ○○○○  
0899 ○○○○○  
0900 ○○○○○ ■

0901 aeres**pa poka**  
0902 **eyaykoramu-**  
0903 -○○○○○ ●ayne

0904 ○○○○○  
0905 ○○○○○  
0906 ○○○○○○ ●kus

0907 ○○○○○  
0908 u ○○○○  
0909 **aporose** pe  
0910 u **moto orke**  
0911 ○○○○○ ■

0912 ○○○○○  
0913 ○○○○○  
0914 ○○○○○  
0915 ○○○○○○  
0916 ne **hi tapan** na ■

0917 **eani taptap**  
0918 ○○○○○  
0919 **ean yakkayki** ●yakkayki

0920 ○○○○○  
0921 ○○○○○  
0922 ○○○○○ ●kusu

0923 **asinuma tap**  
0924 u **ramuanan** hi ▲hi

0925 **rep un iworso**  
0926 **atuyso kurka**  
0927 **epunkine kamuy**  
0928 u **kor turesi** ▲

0929 ○○○○○  
0930 ○○○○○  
0931 ○○○○○ ●yakun

0932 **kim un iworso**  
0933 ○○○○○  
0934 **kamuy menoko** ▲

0935 **ponmat ne ekor**  
0936 ki wa ne **yakne** ●yakne

0937 ○○○○○  
0938 ○○○○○  
0939 u **ne pa ki** wa  
0940 uwaste **yakun** ●yakun

0941 tapan **pe sonno**  
0942 mosir **erekor** ■

0943 ○○○○○  
0944 u ○○○○  
0945 ○○○○○ ■

0946 ○○○○○  
0947 ○○○○○○ ■  
0948 ○○○○○ ■

0949 **oro waun suy**  
0950 ○○○○○○  
0951 **sipase kamuy**  
0952 **ane wa ora** ●ora

0953	tapan te <b>pakno</b>			1001	○ ○ ○ ○ ○	
0954	aeyayko <b>resu</b>			1002	○ ○ ○ ○ ○ ○	
0955	u <b>ki rok</b> ayne	●ayne		1003	<b>kamuy nis ka</b> un	
0956	○ ○ ○ ○ ○			1004	u <b>yaytunaska</b>	
0957	amonkur <b>kasi</b>			1005	<b>ep aki ki na</b>	■
0958	<b>kosumnatara</b>	■		1006	aye a <b>itak</b>	
0959	ki <b>wa ne yakun</b>			1007	u <b>pirkanopo</b>	
0960	tapan te <b>pakno</b>			1008	○ ○ ○ ○ ○	■
0961	○ ○ ○ ○ ○			1009	○ ○ ○ ○ ○	
0962	○ ○ ○ ○ ○	●kusu		1010	<b>arespa kamuy</b>	
0963	nisatta wano			1011	<b>tane anak</b> ne	
0964	<b>tapan te</b> wano			1012	○ ○ ○ ○ ○ ○	
0965	<b>kamuy mo</b> sir ka un			1013	<b>rikinan kus</b> ne	■
0966	u <b>kanto or</b> un			1014	<b>itak turano</b>	
0967	u ○ ○ ○ ○			1015	<b>iresu sapo</b>	
0968	○ ○ ○ ○ ○	■		1016	○ ○ ○ ○	
0969	u ○ ○ ○ ○			1017	<b>eosiraye</b>	■
0970	ep ○ ○ ○ ○			1018	u ○ ○ ○ ○ ○	
0971	○ ○ ○ ○ ○ ○	■		1019	u <b>yaytuypare</b>	■
0972	eani <b>anak</b>			1020	○ ○ ○ ○ ○	
0973	○ ○ ○ ○ ○			1021	○ ○ ○ ○ ○	■
0974	kamuy <b>ne an kur</b>	▲		1022	○ ○ ○ ○ ○	
0975	u ○ ○ ○ ○			1023	○ ○ ○ ○ ○	■
0976	<b>kamuy inuma</b>			1024	○ ○ ○ ○ ○	
0977	<b>koeun ki wa</b>	●wa		1025	○ ○ ○ ○ ○	
0978	<b>eehayok pe</b>			1026	○ ○ ○ ○ ○	■
0979	○ ○ ○ ○ ○			1027	<b>ne hi koraci</b>	
0980	ki <b>pe ne wa kusu</b>	●kusu		1028	<b>ru an toy ka wa</b>	
0981	opitta <b>aekore</b>			1029	<b>tapan kamuy maw</b>	
0982	○ ○ ○ ○ ○	■		1030	<b>cirikipuni</b>	■
0983	u ○ ○ ○ ○			1031	<b>ne hi koraci</b>	
0984	u ○ ○ ○ ○			1032	<b>iresu sapo</b>	
0985	○ ○ ○ ○ ○			1033	○ ○ ○ ○ ○	
0986	u <b>ki nankon</b> na	■		1034	○ ○ ○ ○ ○ -	
0987	u <b>pirkanopo</b>			1035	-○ ○ ○ ○ ○	■
0988	eyay <b>kewtum ka</b>			1036	u <b>arkuwanno</b>	
0989	<b>eohunara</b>	■		1037	<b>kamuy nis kotor</b>	
0990	○ ○ ○ ○ ○			1038	<b>koyaytunaska</b>	■
0991	○ ○ ○ ○ ○			1039	u ○ ○ ○ ○	
0992	○ ○ ○ ○ ○	■		1040	○ ○ ○ ○ ○	
0993	kamuy <b>moyremat</b>			1041	u <b>sapoe</b> huyean (?)	
0994	<b>utar</b> orkehe			1042	<b>araykotenke</b>	■
0995	<b>u arki</b> ciki			1043	ikian <b>awa</b>	●awa
0996	iteki <b>koyki na</b>	■		1044	tan poro <b>paraparak</b>	
0997	○ ○ ○ ○ ○			1045	<b>aesaraninpa</b>	■
0998	<b>eren ecine</b>	■				
0999	<b>tapan a casi</b>					
1000	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	■				

1046	u <b>ki rok</b> awa	●awa	1096	u <b>aminumpe</b>	
1047	<b>iresu</b> sapo		1097	<b>aurekoyupu</b>	■
1048	○○○○○		1098	<b>cise kan kotor</b>	
1049	<b>ene oka</b> hi	▲ene oka hi	1099	<b>akonottarara</b>	■
1050	okkayo <b>pirka</b>		1100	u <b>anan</b> awa	
1051	nep <b>eciskar</b> hawe an	■	1101	u <b>senram</b> sekor	●sekor
1052	○○○○○		1102	kamuy <b>moyremat</b>	
1053	○○○○○		1103	utar <b>orkehe</b>	▲
1054	○○○○○		1104	○○○○○	
1055	kamuy <b>hekaci</b>		1105	<b>kunne kosonte</b>	
1056	<b>ene a hine</b>	●hine	1106	<b>tu menoko ne</b> wa	●wa
1057	u ○○○○		1107	<b>poro</b> ketusi	
1058	u ○○○○		1108	<b>u sut</b> ketusi	
1059	<b>ene a hine</b>	●hine	1109	○○○○○	
1060	nep <b>eciskar</b> hawe	■	1110	○○○○○	■
1061	○○○○○		1111	<b>iruska kewtum</b>	
1062	u <b>aynu mosir</b>		1112	<b>ayaykorpore</b>	■
1063	○○○○○		1113	<b>anak ki korka</b>	
1064	<b>aeye rok</b> awa	●awa	1114	<b>hunakke kusu</b>	
1065	<b>okkayo pirka</b>		1115	○○○○○	
1066	nep <b>ciskar</b> pe tap		1116	<b>iresu</b> sapo	
1067	<b>kohawkor</b> hawe		1117	<b>iyeye</b> a itak	▲
1068	<b>oka ya sekor</b>	●oka ya sekor	1118	<b>sekor eyki yakne</b>	
1069	<b>iresu</b> sapo		1119	mosir <b>erekor</b>	
1070	○○○○○		1120	<b>eki katuhu</b>	
1071	○○○○○		1121	u ○○○○	
1072	<b>esirotatpa</b>	■	1122	<b>sekor erekor</b>	
1073	u nei ta <b>pakno</b>		1123	u ○○○○	■
1074	u <b>sinis kotor</b>		1124	<b>itak rok awa</b>	●wa
1075	eyay <b>rikikur</b>		1125	<b>yaynuan</b> kusu	●kusu
1076	u -nun <b>pa korka</b>	●korka	1126	tan hus <b>kotoy</b> wa	
1077	○○○○○		1127	cise <b>kan kotor</b>	
1078	u ○○○○		1128	<b>akonottesusu</b>	
1079	○○○○○		1129	<b>anan korka</b>	●korka
1080	○○○○○		1130	u <b>kanna</b> ruyno	
1081	○○○○○	■	1131	u <b>kane amset</b>	
1082	<b>anak ki korka</b>		1132	cituye <b>amset</b>	
1083	<b>hunakke kusu</b>		1133	u <b>amset kurka</b>	
1084	○○○○○		1134	akoyayo <b>sura</b>	■
1085	○○○○○		1135	u <b>tanto tori</b>	
1086	<b>cikaspotte</b>		1136	u <b>yaykotuy</b> ma	
1087	<b>iyekarkar pe</b>	▲pe	1137	asi <b>ramsuye</b>	■
1088	u nei ta <b>pakno</b>		1138	mak an <b>kat kor</b> pe	
1089	u <b>cisan yakun</b>	●yakun	1139	<b>sipase kamuy</b>	
1090	semok <b>kayoram</b>		1140	<b>sinis kor kamuy</b>	
1091	○○○○○		1141	<b>oroya ciki</b>	●ciki
1092	<b>yaynuan</b> kusu	●kusu	1142	<b>poho ane</b> wa	●wa
1093	<b>iresu casi</b>				
1094	u <b>casi</b> or un				
1095	<b>ahunan hine</b>	●hine			

1143	tapan <b>te wano</b>	
1144	mosir <b>erekor</b>	
1145	u <b>aynu sekor</b>	
1146	○○○○○○○	
1147	u ○○○○	
1148	<b>yaynuan hike</b>	●hike
1149	<b>iruska kew</b> tum	
1150	<b>ayaykor</b> pare	
1151	u <b>anan ka</b> tu	
1152	○○○○○	■
1153	○○	■pakno (結句)

**丹菊 逸治 (たんぎく いつじ)**

アイヌ・先住民研究センター准教授。  
専門は口承文芸論、アイヌ語アイヌ文  
学、ニヴフ語ニヴフ文学。

Alliteration in Ainu Poetry

Ainu and Indigenous Language Archive Project Report 2019

Published on March 25, 2020

Written by TANGIKU Itsuji

Published by Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University

Kita 8-jo Nishi 6-chome, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0808, Japan

Printed and bound by Hakuyo Printing

---

2019 年度アイヌ・先住民族言語アーカイヴ・プロジェクト報告書

**アイヌ韻文の行頭韻**

2020 年 3 月 25 日 発行

2020 年 7 月 22 日 第二刷

著者 丹菊逸治

発行 〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 6 丁目

北海道大学アイヌ・先住民研究センター

印刷・製本 柏楊印刷株式会社

---